

鹿兒島県史料集(Ⅳ)

一 向宗禁制関係史料

一向宗禁制関係史料

正誤表

頁	一	一	二	二	二	三	五	五	五	五	五	七	七	七	七	八	九	〇	一	二	二	三	四	七	七	一〇	二〇
段	下	下	下	下	下	下	上	上	上	下	上	上	上	下	下	下	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	下
行	5	23	3	6	17	11	1	6	22	19	19	20	20	1	3	12	16	9	20	9	17	14	20	6	25	8	
誤	奉存候 可有如何	天見拜み	被入候	入御被成	果と	不可成	被仰問候	被仰置候	自惟新様とくより	被仰知	無別儀	抽忠節	被成候	枕枕	左朝鮮	石様	対、忠恒様	被仰越	外城	乍能居	本導	令啓上候	御そへ	事	朱物相来		
正	奉存候 可有如何	天見拜み	被入候	入御被成	果と	不可成	被仰問候	被仰置候	自惟新様とくより	被仰知	無別儀	抽忠節	被成候	枕枕	在朝鮮	右様	対、忠恒様	被仰越	外城	乍能居	本導	令啓上候	御そへ	事	物相来		

二〇	二一	二三	二四	二四	二五	二五	二九	三四	三六	三六	三七	三七	三八	三八	三九	四一	四四	四四	四八	四八	五八	五九	五九	六一	六一	六一	六四	六六	六九
下	下	上	上	上	下	上	上	上	上	上	下	下	下	下	上	上	上	上	下	上	上	下	下	下	下	上	下	下	
10	12	30	27	16	13	24	15	30	1	2	26	30	10	21	4	4	23	15	23	14	23	17	7	8	10	23	5	12	28
宗門ノ宗門	式庫様	御本願寺	行いせられ	兼田	被可成	未た	御徒自附	彼仰付	其料	其身之料・本人料銀	安心ナリルヤ	上申ス事キ事	不段依	謙譲	謙譲	本派	未々	今泉寺ヲ	犬年道登	白書	戊戌	必ビ	未へ	不知歟	主将クランド	迄係	人衣を	伊住	追還
宗門	武庫様	本願寺	行はせられ	兼日	可被成	また	御徒目附	被仰付	其料	其身之料・本人料銀	安心ナリヤ	上申スヘキ事	不届依	謙譲	謙譲	東派	未々	金泉寺ヲ	犬年道登	白書	戊戌	忍ビ	未へ	不知歟	主将タラント	追係	人を	伊作	追還

刊 行 の こ と ば

鹿児島県史料刊行の仕事も、本年度五年目を迎えることになりました。

今までに、三輯四冊を出版しています。

このたびは、第四輯として「一向宗禁制関係史料」が刊行されることになりました。

この資料集は、本刊行委員で、鹿大教授桃園恵真氏の長年にわたる努力の結晶であります。

なお校訂から校閲のことまで、すべて同氏のお骨折りによるのであります。

田布施の福田寺の住職、桜井魯象氏も、一向宗禁制のことを、長年にわたって研究されておられますが、この度の刊行にあたって、それらの資料を、こころよく御提出下さいましたことに対しあつく御礼申上げます。

鹿児島県立図書館長

久 保 田 彦 穂

例 言

一、本書は薩藩一向宗禁制関係史料の主なるものを収録したものである。

一、一向宗御禁制由来は鹿兒島大学附属図書館所蔵玉里文庫本によった。同書は明治初年の写本で、その原本は不明であるが東大史料編纂所々蔵の御当家様就一向宗御禁制愚按下書（伊地知季安、天保五年十一月）と同内容であり、都城島津家所蔵の宗門一件はこれを一部省略したものである。御当家様就一向宗御禁止愚按補遺並に一向宗時々被仰渡候御書附写はそれぞれ鹿兒島県立図書館所蔵の写本によった。御影講案乱略記は枕崎市大願寺住職鎌数周行師所蔵の原本により、雑部の諸史料又それぞれ提供者所蔵の原本によった。日新菩薩記は加世田市竹田神社所蔵本によったが、これ又原本は寛政十（一七九八）年の大火によって焼失し、現存のものは後年藩庁より下賜されたものと伝えられている。なお日新菩薩記の原稿作製に当っては金峯町福田寺住職櫻井魯象師をわずらわした。

一、刊行に当ってはつとめて原本の体裁を存したが都合により適宜改めたところもある。特に日新菩薩記の頭註並に傍註は印刷の都合上本書の如き体裁をとらざるを得なかった。

一、漢字は一部を当用漢字に改め、誤りの明らかな文字については訂正を施した。変体仮名はすべて普通の平仮名に改め、又つとめて「者」は「は」、「る」は「より」、「茂」は「も」「与」は「と」としたが、文書によっては原文のままとしたものもある。

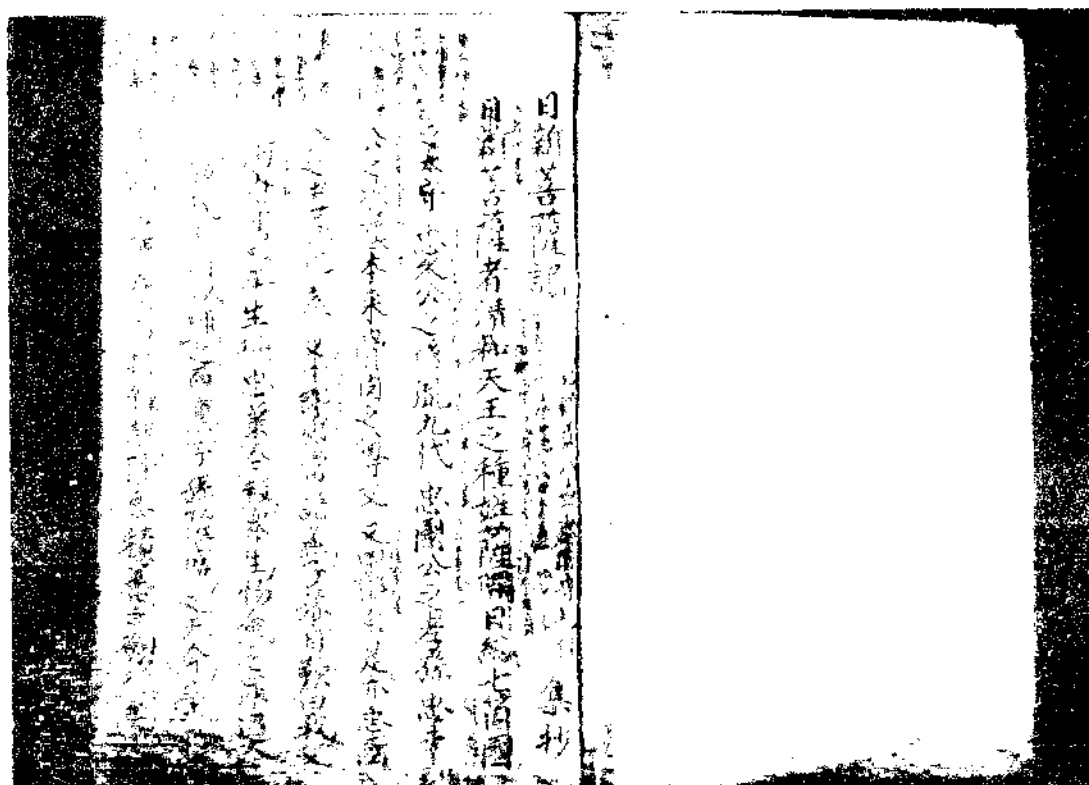
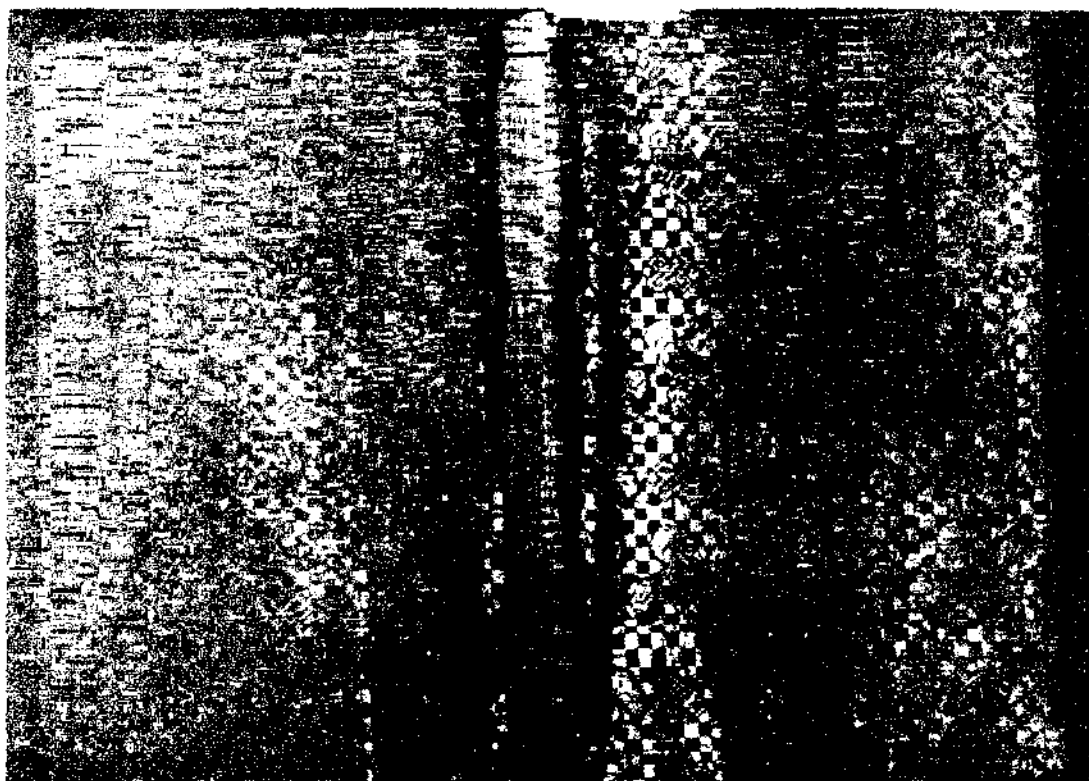
一、朽損の部分は字数により□又は■を用いた。

一、本書の編集・校訂に当っては諸種の事情により正確を期し得なかった点が少くない。今後の追補訂正を期したい。

一、本書の編集・校訂には主として鹿兒島大学桃園恵真これに当り、適宜同大学五味克夫が助言した。

目次

一 一向宗御禁制由来	一
二 御当家様就一向宗御禁止愚按補遺	一七
三 一向宗時々被仰渡候御書附写	三三
四 御影講素乱略記	三七
五 雑・〔覚書その他〕	四三
1 宗門改——列朝制度より	四三
2 覚書——都城島津家所蔵	四三
3 同	四三
4 覚書写——高山町役場所蔵	四三
5 証文——寺尾文書	四四
6 前一向宗——山崎郷泊野村宗門手札改帳より	四四
7 一向宗依科世代被召放云々——内之浦士族名籍編集録より	四四
六 日新菩薩記	四七



星

田

田

田

田

田

(原表紙)

一向宗御禁制由来 全

(原寸縦二七・七厘 横一九・六厘)

先日被仰問候一向宗御禁制之儀。其御申上候通。兼て愚述仕置候得共。諸方江借散置。漸三日跡取寄。猶又粗考仕候得共。全躰世上之難録共取合。憶成引書。無之。誤耳可有之は乍案中。其段は御用捨。他見御勘弁可被下候。

一太系図見合候得は。本願寺開山親鸞上人は。承安三己年之生にて。初は天台宗慈鎮和尚之門侶にて候處。黒谷之源空世に法然上人と唱る僧之弟子と成。弘長二戊十一月。九拾才にて入滅之由相見得。右之法然事も。元來天台宗にて。叡山之恵心釈義を致発明。承安四年より一向専念宗を建立為中由。然は親鸞二歳の時より念仏宗は為初筋候得共。親鸞事。本願寺開山いたし。月輪関白兼美公之女等を妻として。男子四人。女子三人有之候得は。妻帯之一向宗は。親鸞より為相始に可有御座候。

一御元祖得仏公御事は。親鸞より六歳計年少にて。得仏公御逝去以後。五六年存命候間。御二代道仏公御代。九拾歳にて入滅為仕筋候。其師法然事は。建暦二年。得仏公三拾四歳之御時。八拾歳にて入滅為仕筋候へは。親鸞事。其以前より法然江為付居等儀に付。得仏公御存生内より。最早親鸞は妻帯にて。一向宗執行仕居候事は無紛事候。然共御国杯江石躰之宗。其時代流行仕候儀共は。一切所見無御座候。

一山田聖栄日記に。忠久公は念仏宗時宗にて御座候。法名道阿弥陀仏と奉申。御禪門名は。得仏と承伝候と有之。愚按仕候に。其時代迄は。今の時衆宗未相建候。念仏宗之儀は。前文通承安四年より。古之法然上人為被初宗にて。建久七年。得仏公鎌倉浄光明寺宣阿上人被召列御下向。鹿兒島にも浄光明寺御建立にて。宣阿江住持被仰付。其時迄は右之寺。法然一派念仏宗之由候へは。公茂念仏宗と。聖栄被書置候儀は。可為其通候。時宗之儀は。其以后御三代道忍公御代。建治年間より。一遍上人為被初宗にて。於浄光明寺も。三世覚阿より初て其宗に為被成筋候へは。道忍公より時衆宗には被為成候半。然は。得仏公御代迄は合兼申答候。且

得仏公と申上候法名は。御禪門名と。聖栄被書置候儀は。建久五年。本田江被仰付置。榮西和尚開山にて。野田之感応寺為被相建出候へは。是亦其通に為有御座答に候。御二代道仏公御事も。御同宗にて候半。弘安七年。浄光明寺鐘銘に。前隅州禪定と御座候得は。是も禪宗にて為被成御座明証と奉存候。夫より。御四代道義公も。元享三年。感応寺御再興之由候へは。是も同様御禪門名に可有御座。御五代道鑑公にも。感応寺雲山和尚江御帰依にて。是は東福寺山鑑和尚法嗣之由候へは。是亦御禪門名に可有御座。左候て右御五代様御石塔之儀も。感応寺江御座候由。自其御六代様之儀は。定山公齡岳公御兄弟。薩隅に御分れ。御譲受被遊。定山公には薩州旋山城に被成御座。齡岳公は隅州に江御守護直に隅州江被為移候事。其比迄は御便利不宜誤も候哉。薩州の内にて鹿兒島之儀は。御先祖様為被建置御寺等有之。隅州境之故敷。先鹿兒島東福寺迄被為移。其御山門院より諏訪社など御引移。又は隅州正宮をも。若宮と被崇建之由候得は。右御五代様方御石塔之儀も。御拝礼為旁御居城之最寄。清水之塔頭。当分之本立寺江被召建。御五代様御法号之上。皆道之字被為付候故。五道院と為被名附御寺共には無御座哉。左候て御牌之儀は。本より為被建置浄光明寺江御安置にて。此寺時衆寺に候へは。御銘々様御禪門名之下に。某阿弥陀仏と為被付上筋には無御座哉。其後。齡岳公には。隅州大始良。日州志布志等江も被為移。大慈寺之剛中和尚御帰依有之。是以禪宗にて。一説には此時初て禪宗に被為改候様為書記物も御座候得共。此説可有如何哉。御元祖様得仏と奉申御名は。御禪門名と。聖栄も被記置。且又。御二代道仏公御事も。弘安七年の鐘銘に。前の隅州禪定と。鑄出御座候へは。抑御当家は。御元祖様以來。御代々禪宗之方。却て明証有之歟と奉存候。然共浄光明寺も御創建久敷に付ては。兩宗御兼学共可申敷。其後。御七代忍翁公御代相成。又候鹿兒島清水城江被為移。其比迄は。御元祖様以來。総州家御方江は。右之感応寺浄光明寺等為被建置御

寺も被為在候得共。奥州家之御寺迎は。未被為在様に候間。屹と福昌寺被相建。石屋和尚御招にて。開山に被召置。至極之御帰依。世人為存通に御座候。勿論石屋事。於本朝も曹洞宗開祖道元禪師弟子。通幻和尚之法嗣にて。達磨より五十四世之法孫に相当。誠に於一派歴々の高僧故。自是以來御代々様皆此宗派を御崇信被遊事に相成。至今御退転不被遊御事候。就中 日新公御事は。梅岳寺開山舜有和尚より。右之法脉被為受継。是亦達磨より六十三世の御法嗣に被為當。其伝説之次第は。石屋より竹居。仲翁。心岩。守隣。良位。天祐。舜有と継來候て。日新公江為奉授筋に相見得。其上下之間にて。御十一代円室公御代。周防山口産之桂庵と申濟家之出家。明国江七ヶ年致滞留居。朱子新註之儒道學び得。帰朝仕候折柄。文明十年 円室公鹿兒島江被召呼。別て御帰依にて。当分上射場之坂辺に。桂樹院と云ふ寺迄御建立にて被召置。御自身新註書經等初て御學び為被遊事共。明人書置候物に相見得。右之新註學問は。専ら三州より余国に。被相行。大学中庸等も。於日本令板行候は。御国より初て発起為仕由にて。日新公御母堂梅室様など。桂庵参候時は。御七歳の年にて。自然と御學問數寄に被為成。平日論語を被為読候由。勿論右之舜有等も。兼々桂庵江往來為相學事見当候間。石屋派の禪徒も。右之比より。過半は内外之修學仕風と相成。殊更 日新公御事は。梅室様孟母の御識量にて。御蒙養等。正敷被為誠候故歟。専ら儒道を相兼被為學候に付。神學一篇之仕立とは格別相替。第一忠孝之道を本として。儒仏神主三教共。御会得為被遊事歟候共。常殊寺俊安。福昌寺代賢等。奉讀頌候文句に有之。其上日新寺八世泰円事は。御逝去之時分。三十四歳罷成候者に御座候処。慶長二酉三月。現在見聞為仕御言行等。六十三歳にて書集置。是世に日新菩薩記と云書之内に御座候。右之内に。平生之御沙汰にも。何れ為人之道は。無本して有末ものは無之。諸木の有本も同敷候間。御領内にて背父母。或は蔑仏神族は。可為魔法旨。嚴敷御禁制被為在。御詠歌

にも

魔の所為か天げんおがみ法華宗一向宗に教寄のこさしきと為被遊置趣相見得。乍恐懸按仕候処。天見拜みとは。当分之切支丹宗を天教とも申候間。右之類には無御座哉。尤南蛮宗之儀は。伯團様以來御戒にて。貴明公御代など。南蛮僧御入付之事は勿論。南蛮之珍犬まで。御殿江被入候事は堅く御戒為被遊事。天正十一。同十二。兩年之上并日記に相見得。

義久公御譜天正十一。三月。

使南蛮之僧虜于鹿兒島。已而追之。令于國中禁之。法華宗は長祿三年。流人日興と申出家。種子島に參居。島主左近時氏を其宗門に説入れ。島中惣て禪律を改て。皆法華宗に相成。指宿大円寺之説溪和尚は。島産之禪宗に候処。其比より立退。御当地江為參居由。桂庵和尚より右に送る詩に。邪宗露土又揚塵。何処藏蹤護法神。と相見得。是亦桂庵杯之比より。邪宗と賤しめ為申筋御座候。一向宗之儀も上并日記に左之通御禁止明白相見得候。

天正十三年。閏八月十五日云々。武庫様。御役人衆江以上申付。御宿之構ともさせ候。武庫様。夜入候て三丹江入御被成候。忠棟など御供也。

一十六日各宿所江祇候候て。御祝言共御申也。諸軍衆方々より參上也。此晚隈庄賈人指出。被請取候由聞得候也云々。

一十七日云々。此間忠棟隈庄江越被成候様は。於鹿兒島隈庄御手に參候は。忠棟江御給候由承被成候。一向不知案内之処にて候間。追て御返事は中被成候する通被申上置候。然は見償有度由。吉田作州にて。轉合拙者江承候。即 武庫様江も申上也。就此儀口能多く候也。

一九月朔日云々。此晚。忠棟当所移被成候由。使に預候。拙者も使進候也。

一十五日。出仕如常。此昼樽一荷。食籠者にて進上申候。拙者も御前に可參之由候間。罷山候。御賞飯共也。深水三河守杯御前に有

合。良久御閑談共也。次に当所杯。皆々一向宗と問得候。然共此前より之事に候条。無届御成敗は如何に付。先々彼宗旨誓可申之由。稱被仰。其後も一向宗に候ひする者は是非以生害させ申候て可然之由被仰出候也。

右通御禁止之明文有之。先年取しらべ候時分見落。その後不図見当。補置然に肥後隈庄入御手候節。地下人本来一向宗之故。右之通改宗被仰渡。殊更幸侃被召移候付ては。其取締も可被仕之処。却て門徒被引入候筋敷。不審之基御座候。尤其以前。永禄五戌二月比。真幸院主北原又八郎兼守死後。其叔父民部少輔。并高崎城主口坂下総介など。一向宗之悪徒と成。仏神に違背し。此宗に不成者は可打果と相企。領内別て及争乱。無程滅亡仕候事。旧記等に相見得候。

旧記云永禄九年丙寅。閏八月八日。彼崇さむ。霧島参。庄内衆三百人焼死す。一向宗也。此事にて考ふれば庄内は幸侃領之前より一向宗なり。

又敷寄屋之儀も。天文十年。豊後国主大友義鑑。南蛮僧入付。其子宗麟杯代には。禪宗を改て皆鬼里下宗に相成。古来之神社仏閣も悉く致破壊。剩府内諸所に四拾八ヶ所之敷寄屋を構へ。日々其将棋双六等之遊興計にて。武備之手当等も無之。終には。日新公御快腹此国も及滅亡。何れも邪宗。又は悪党と。旧記に書載御座候間。當時御禁制不被遊候ては。御政事之妨にて。終に亡滅之媒とも可相成崩し。疾に御先見被為在。右通被為禁置。御歌迄被為詠置候筋には無御座哉。然旭天正十五年。太閤西征に。本願寺光佐上人被召列。於西国兵糧等之儀は。専ら右一向宗之徒類共。前以より致内応居。差統為申由。夫故至今薩州領内は。殊に彼宗門被為禁止候趣。中井氏逸史にて為見覺様有之。是亦正説に可御座。勿論其比御國にても。伊集院幸侃など。一向宗にて為有之事は。貴明公御代。踊衣裳御借入之節。彼家内共借上げ不申。一向宗は衣類も人には不借ものと欺。被為書候物御座候哉に見覺為申様有之。義久公御娘の御方江文の写。近衛殿歸京前にて。浜之市へ御入之答候。御能有之答候。我等も

土に立候ものの拍を踏候事稀事故。かいふん精を出し。二三番相勤事候。あはれとは見せ度候。幸侃内方江赤き小袖借りに遣候へと無之由候。一向宗之物は借さざるもの歟。むもし御前。赤き小袖有之候はば。御借有度候。尺短候ても不苦候。近衛殿江きせ奉るべく候かしこ。

月 日

竜伯

むもし誰にても御申給へ
右年号も無之候得共。近衛信尹公。文禄三年甲午。薩州坊津に御配流。慶長元丙申。六月六日。御歸洛とあれば。其以前がたの事なるべし。幸侃内方吉利氏不寡と見へ同五年八月十六日。惟新様御状にも左之通

一伊奈圖書方。山口勘兵衛方を以。被仰付は。幸侃女房。大坂御城へ三度推参仕。己内府様御座所江罷出。御国元之様子。種々様々に悪様に言上仕候。然時は。加様之倭仁を。上方に被召置候はば。御奉行中諸人江も罷出。いか様之儀を申かすめ候はんも不相知儀候条。早々差下候て可然候。しるて御見見故。小伝次并に母暇遣候。三郎五郎。千次。下向之儀は聊以不存候。小伝次に暇遣候由申候時は。はや五日以前下向仕候由。扱々慮外千万云々。
川上商山老。原田盛右衛門へ為被遣状にも。左之通。

一幸侃家老北郷興右エ門と一人にても幸侃死骸被屋形江被遣候時。内儀死骸を見。泪をも不流。我即自害すべし。三郎五郎千次は。興右エ門害し候へ。心有被官共は。屋形江切入候へ。家に火を懸候へとくるはれ候処。興右エ門。妻子は可有助之間。東福寺へ可被参由被仰出候。家之殘儀候間。是非共寺に御入候へと申に付。東福寺江被参候。吉利寺右エ門殿。白坂宗兵衛殿咄にても。彼兩人は内儀之少つづき故。度々御使被申候事。

季安云。伊地知甚左エ門重辰入道昌繁。幸侃御成敗之時。持死該御使に参候由。家調に有之候。

尤大閣入之前方。天正十三年酉十月。羽柴秀長より。松平刑部と申

者へ申付。同名六郎左エ門と申船頭を。幸侃方江差下。早々可有御降参向々可取計旨申合遣候事共。松本由緒書に有之。且同十四戌九月。日州且津江罷下候者之使より。四国兵船豊後江押渡候事相聞得。且川上丹津。家村隼人。兩人子之出家迎。彼便に為頼遣状も相届。京衆下向必定にて。御家系中へかかり付候人多く。笑止の由申遣候事共。上井日記にも有之。左様之折柄。同十五年四月。果して西征有之候処。幸侃第一に奉勤和降。同廿一日。日向口之大將前文秀長之本陣に。自身直に人質として罷出。刺大口地頭新納忠元之様。忠義を抱て堅く致城守候方江は。自身石田三成杯同道にて馳廻。和降之催促等仕。其上同五月廿六日。太閤御朱印にも。伊集院無親疎被見及。或は大隅之内伊集院右衛門太夫居城に付候一郡之儀は。最前より右エ門太夫江被仰候条。可得其意と有之。其最前よりと被為書候詞。且御家系中にかたり付候人多と。前より告来居候儀共。決て前文十三年十月。秀長より松木氏差下候時分より。粗石之向に密約にて。内通為仕居安に候を推考。表向は御國家に尽忠馳廻候様に見得候得共。内実は自身出世之足次に売国候仕形。奸悪之至。左候て其内通之手筋は。右之光佐上人一向宗之方より引れ為巾に可有御座。夫故中井氏も何ぞ抛処有之。前文之筋に書記為申答に御座候。素より幸侃逆心之事は。右外にも段々致散見居。天正十六年子二月。賢明公より新納武州江為被下御書中にも。旧冬幸侃下向以来。関白様氣色一段可然。諸座々も義敷申散候杯被為書候事にて。太閤御前には。万事悪様に謔言いたし置。幸侃在洛中は。御不都合之時宜被想像申事に御座候。又比志島紀州忠節之儀にて。慈眼公御筆。并御誓詞案文。又は伊勢貞昌上書にも。第一幸侃逆心之事相見得。勿論此事に不預儀も有之。乍長文此世江写載せ置申候。比志島官内少輔御仕置被仰付候御仰出寛。

忠恒公少年之時。從太閤公家督之儀被仰出。高麗相渡。万事無案内之処。竜伯公。惟新公被仰談。伊集院下野久治入道抱節。鎌田出雲守政近。比志島紀伊守國貞を被相付。朝夕側を不離。内外共可然様に

精を入就中伊集院右エ門太夫忠稜入道幸侃威勢。國を傾んといたし候を。右三人見及。竜伯公。惟新公江奉得御内意。諸人幸侃江心を合せ候半様にも回計策。高麗より帰朝以来。國之仕置等念を入別て石田治部少輔三成乱逆以後。國家危く成行候時。拙忠節。道を正敷相守候故。國家無異儀安全。當家之中興誠に其功不可勝計也。因茲比志島官内少輔國隆事。前迄不相馴心中之邪正を雖不知。紀伊守政を重んじ。家老役申付候処。無智無能にして。背旧政。新儀我志之所之にまかせ。畜金錢。愛酒女。且又内は殺害を輕し。無道之驕有之候間。諸人見せしめの為。種子島江令流罪。命を助置候得共。生れ付不神妙之間。我惡を悔。分別を改。重て可抽奉公志は無之。還て催惡覚。仇を可致志。連々顯然候間。令行死罪候。自此方義理は不違候処。右之惡心故。天罪不違候事。

一山口越前入道理安事。先年大友家催六ヶ國之軍兵。日州表江取掛候処。為高城之主頭。連々城を可持覚悟有之候処。始叔父中務少輔。歷々令籠城。於彼地支留。竜伯公。惟新公。其外薩隅日三州之人衆不殘指合。安否之合戦有之て被得勝利。全并三州。加之九州大形雖屬幕下。太閤公天下之大軍を引率し給ひ。日向肥後兩口より押入せられ候処。又於高城相支。彼地にて和睦成候。然処肥後表は出水より早々使を出。義虎（了）又太郎忠辰歟。太閤公江被申入。何之子細もなく川内迄押入せられ。無正鉢候処。竜伯公被成落髮。太閤公御陣江御參候て。當家相統候。夫より以来。理安事。竜伯公御家老役被仰付。別て被召仕候事。

一三原還江重秋入道昌安事。拙奉公依為義士。御家老役を被仰付。古來之衆物語委數聞伝候。不幸にして子孫断絶之故。其跡を同名備中守重種に被相統候間。近年家老役申付候事。以上

十二月晦日

忠恒公御誓詞之御案文

一竜伯公武庫様御事。聊分を不奉得。可抽思孝。尤不新雖順儀候。平生之存恤も。我等就進退。御西殿様より。仮無理非道之難蒙御

暖候。不違孝儀。為拙者毛頭不可成鋒桶之志を心底。當時無心許時節候間。弥憤甚重候。いかやうの忠節之仁たりとも。於逆儀諫會て不可致同心候事

一御家相統之儀。御兩殿様以御分別被仰付候。定一世ならん面目。

此等之御高恩。以何事可奉報候哉。内々對御家惡逆之仁在之て。

御兩殿様別て御心遣之段。連々ふかふかと被仰聞候。片時も無忘却候条。如何様以時節令諒討。御家安泰之可勵忠貞候。然を彼輩

江入魂之衆。向後輕重。銘々可勵忠貞候事

一惣御家中。定御兩殿様被召仕人數。又我等可召仕衆。当分は可相分候。因茲人々心持可入事候。拙者事は。いづれを不分。諸侍同

前に可相守候。勿論奉公之浅深により。其實罰は可有之事。

右条々各以同心。士卒皆令偏服。御家繁榮之調議。可為本望候。

此旨於偽者神文以下 以上

右年月日も無之候得共。朝鮮御渡海前之事に可有御座。右候て内々對御家惡逆之仁と被為書候は。幸儀事に別儀有間敷。仍此処に

寫置。抱節など誓詞も此時之事に候半。合せしるべし。

此張紙迄は。於磯。老公御覽被遊候間。本文に書置也。

右条々。張紙にて有之故に。右之通本文に小書あり。

伊勢兵部文書員昌昌記云

一家久公及御臨終。御辭世之御詠歌。并に御遺言ども書認候。其内

島津圖書入道紹益。鎌田雲州。比志島紀州。伊集院抱節。伊勢兵

部。此五人之位牌。御魂殿之面脇に為被召置之由被仰置候。按此

謂候歟。高麗御陣の時分より。幸儀謀反之志御座候。此五人見知

候て。日夜心を合令守護御陣所。御帰朝之以後も。不及油断。御

家御恙無御座候。其忠節を甚深不被思召忘候歟と。忝奉存候云々。

右旧典種書に有之。御覽以後補之。尤一字下げ書べしと有之候

事。本のまま

一謹て致言上候。然比志島宮内國隆。無為道敷至極之故。きびし

く被仰付。後代諸人の見せしめに御行候儀。御分国之儀は不及申。

他國迄も御尤之御沙汰と申候由候。誠に一身之無違故。數代之家

をたやし候事。無念。又は先祖江之不忠。中々思案仕候故。未申

上候。弥存寄候儀候間先申上候。如御存。先之鎌田出雲。比志島

紀伊事。諸人にすぐれ御奉公仕たる人にて候。其段々近年之儀は

御存候儀候間。雖不及申候。程遠成行候は。御失念有御座べく候

条。細々申上候。竜伯様御家督候御時より。幸儀以之之外おごられ

候事。竜伯様。惟新様數年に御覽付候へ共。御あひしらひ被成候

て被召置候。次第にこぞり申候事。諸人見及候得共。御兩殿様へ

御内儀に申上人召人も無之。結局幸儀江追從仕候処。比志島

紀伊國員。鎌田山雲政近。西人はかきを不見合。御兩殿様江御内

談被申上たる由候。其時分より之儀。我々は若輩之御座候つる故。

中々不存候。左様候て。太閤様御國御免向以後。幸儀自。太閤様

御直に知行被遣。大身に被成候付。弥御國を我儘に被仕。御家危

く成候付。御親類衆之内にも御用心にて。御内談に被仰候事不罷

成。紹益老江は被仰知候。右馬頭殿島津杯へは。近き比こそ被仰

候鉢に御座候つる。高麗江御渡候前に。相良日向辰辰。新納道甫

杯江は被仰聞候。新納拙者。伊集院抱節江は。其より以前被仰知

候。就其拙者江は被仰付たる儀共御座候つる。我等伊勢雅樂入道

任世親へは。自。惟新様とくより被仰知。一唯公又一（八敷）郎様

御縁組之儀に付。是も先之棄院を御頼候て。太閤様江御内儀共被

仰上候御使仕候。条々段々色々之儀御座候へ共。長々敷候間。大

形申上候。於高麗如御存五六人被仰聞。誓詞共御させ候て。従高

麗被成御帰朝。於伏見きとく成時分。幸儀御果候て。御家無異儀

候事。偏天の御教にて御座候。其時分はいかが可有御座歟と。我

等式は存候つれば。やがて石田治少三成弓箭被取候時迄。幸儀

存生候て。御家は可相果申之処。妙不思議成御事。申上も疎に御

座候。叔亦関ヶ原の合戦破申候て。日本一統に罷成。御國計御取

付候事難成候て。先鎌田出雲政近為御使被仰上。御他言御申之処。

無幾所被問召分。御上洛候へ。少しも御別儀有御座間敷由被仰出

候間。出雲罷下。其段申上候へ共。奉始。竜伯公。諸人同心無之却て出雲に諸人不審をかけ候得は少しもひるみ不被申。是非に被成御上洛尤之由申とをられ候得共。色々にて御上洛余御延引候間。先御質之ことに連。紹益老上洛せられ。其上にても御上洛可有之御様子にも無御座故。天下は御人数を可被指下御内意之由風聞に付。出雲政近。紀伊国貞。惟新様江被得御内談。押返し々々。竜伯様へ御異見候処。源次郎忠真。加藤清正殿江申合。御国をくつがへすべきからくり候儀。証文共申候て。竜伯様も其時確と前之御分別被成御替。御三殿様御一味に被成御談合。即源次郎兄弟御成敗候て。事ゆへなく御家目出度相統。黄門様如此御位に御登り候。不大形目出度にて御座候。右之被成御氣遣候事。昨日今日の御事にて御座候。御国江人多御座候へ共。近代一大事之時。骨身を碎き人のにくみをかへりみず。御奉公被申候者。右面人にて御座候。如此忠節跡にて候間。紀伊之跡を御立。御折念にても御座候。若跡を御立候とも。宮内少子には。御無用に定。心持親に可相似申候間。是は島を御出し無之。出家に罷成候様に尤候哉。比志島監物事。幸侃にはをひにて候。彼祖父清安と申候者。幸侃弟にて候故。御内をはなれ。幸侃江相付。高城江地頭にて。庄内江被召向候時も。殊之外御敵仕候得共。監物親左馬介は。親に相離れ。鹿兒島しかと相詰。御弓箭中も御奉公被申候。是も忠節之家にて御座候。比志島之惣領にて候間。定彼家は左京義時子に相渡御意にて候はば。忝存候て。紀伊跡可相統候。去年御成前より。久敷馴申候て見申候。御用に可立人にて候。跡を御立候とも。知行杯は勿論多は入申間敷候。前分限にて候つる。五百石にても可然候半敷と存候。宮内少事。野心杯にて御成敗候はば。中々其跡御立候儀有間敷候得共。是は其身不分別にて。時之老役仕。種々一國江おこひ惡候付。如此被仰付候間。宮内少は一篇御させ候て。紀伊国貞忠節之跡を御そたて候はば。君の道に叶ひ可申かと存事候。人の家をたやし候儀。上中下によらずなげかしき事候付。忠節之跡を御そた

て候て。彼家御続け候はば。御家之御折禱可罷成候。此段老中衆江も可然と思召候はば。為御意被仰出。又皆々衆之被申やうも上聞御尤に奉存候。此旨可然候様御披露所仰候。恐々謹言

寛永八年

伊勢兵部少輔

閏十月廿五日

貞昌（花押）

仁礼藏人殿

右書中に。幸侃自。太閤様御直に知行被遣。太身に被成候付。弥御国を我儘に被仕。御家危く成候付。御親類衆之内にも。皆御用心にて。御内談被仰事不能成。紹益老江は被仰知候云々と有之比之事にも可有之。左之通起証文見当写置。

義久公御判

義弘公御判

天罰起証文之事

一老ヶ条被仰聞。愚意申上候儀。向後永々無別心。奉勵御奉公。不

限彼儀。渡申間敷事

一世上いかなる計策有といふとも其案に入。御奉公可中上候事

一他国之物沙汰。承付次第。可致言上候。若又我々進退之儀。於被

聞召付者。一々可被仰聞候段奉仰事

右条々於偽申上者

神名

本田因幡守正親

判

八木越後守嘉笠

判

比志島紀伊守國貞

判

鎌田出雲守政近

判

伊地知勘解由左エ門尉重元

判

宗貞

判

図書頭忠長

判

阿多掃部介忠辰

判

左馬介増宗

判

平田左近將監藏宗

判

判 伊地知伯耆入道増也

判 平田豊前守宗位

判 新納武藏入道拙齋

判 村田雅樂助經宣

判 吉岡藏人久延

判 山田越前入道理安

判 稻留新介長辰

判 伊勢雅樂入道任世

判 川上源五郎久辰

判 平田美濃入道舜慮

右式拾老人に。御親類衆よりは。紹益忠長御名に候間。皆御用心にて。被仰聞候事難被成時勢も致符合候様に有之。尤一ヶ条被仰聞惠意申上候と有之儀は。前件に写載候。慈眼公御筆仰出に。諸人幸侃へ心を合せ候半様にと被為書候御趣意にて。万一ヶ條之御談合。幸侃に追從之者共承付。洩申ものも有之候ては。別て及御危難候事故。只無題に。一ヶ条と被為書候には無之哉。又拙齋抱節江は。夫より以前被仰知候。拙齋江は為被仰付儀共御座候と。貞昌被書候は。左之通為被下御書之事に候半。

先日一ヶ条申出候處。懇切之返答。殊更墨付見來。乍案中頼母數令喜悅畢。弥向後無別儀可被拙忠節之狀如件。

天正十七年六月廿六日 竜伯御判

新納武藏入道との

魯笑以來。至于今内外共別て被致奉公。尤神妙之至也。殊今度深々と以神裁被顯心底。頼母數令欣悅畢。弥可被拙忠貞之狀如件。

天正十七年七月二日 竜伯御判

伊集院下野入道との

一向宗之事。麻植善左衛門殿。中村甚左衛門殿。鹿兒島老中衆談合を以。諸侍は禁制。以下之ものは皆同彼宗門に可罷成出。廻文

被成候。其御拙者申候は。武庫様御身辺之事は。高麗に得御意一向宗に可罷成出。利口に申詰候得共。竜伯様御許被成候處。不入儀立申候ては。後日如何候可有哉と耽枕被申。鹿兒島之御下知之儘候。然間侍も少々は彼宗旨に為罷成由申候。さてさて御神慮までを相守。御兩殿御帰願をも奉待候處に。不成正儀事口惜候。於御分別は。彼宗に為罷成侍共。五人も十人も。成敗申度候。御留守之事候条。上意難量候。是非共向後之見ごり之条。頭をはね辻に立度候。御納得候はば御墨付可被下候。

自栗野平

休閑齋

旅庵

左朝鮮

山崎休兵衛尉殿

川上四郎兵衛尉殿

新納旅庵日記

文禄二年癸巳

初之九月八日に。又一様御遠行被成。其御左右。同月廿七日栗野江到來候。

一少將様御当家御連続可日出度由。各 竜伯様江言上候。御談合衆。

右馬頭様。鎌田出雲守。新納武藏入道。喜入大炊。伊勢兵部少。

川上々州。御使者古田美作守。拙者。幸侃入組被申候得共。鎌雲

州拙齋被申分にて之心。竜伯様御内意相済候。

一吉岡藏人殿を以。石治部少より。少將様早々可有御上落由。被

仰越候。就夫京都江御使可指上候。御談合候て。閏九月九日に御

談合相済。拙者江被仰付。同十一日に。栗野を打立罷上候。竜伯

様より御小袖御銀子式枚拝領仕候云々。

一閏九月。少將様御家御連続に相定候云々。

右御覽後補入。

又 慈眼公前件御筆仰出に。高麗江相渡。万事無案内之処。竜伯公 惟新公被仰談。伊集院下野入道抱節。鎌田出雲守比志島紀伊

守を被相付。朝夕側を不離。内外共精を入。就中幸侃誇威勢國を頼んといはし候を。右三人見及。御阿公江奉得御内意。諸人幸侃江心を合せ候はん様にと。回計策との趣被為書候事共付。御渡海之時分。起証文差上候て。為被下御状に候半左之通。

以神祇其深被頭心底趣。条々尤神妙候。誠当家之為。我等父子之為。感悦之至難謝儀候。春日 八幡 天満大自在天神。御照覽。為拙者不可有別儀候間。弥無相違。向後対忠恒別添心可被拙忠節事。偏頼人之状如件

文祿四年二月廿二日

義弘御判

伊集院下野入道との

今度三ヶ条。以神祇深被頭心底。誠為当家之。為我等。旁神妙候。春日 八幡 天満天神も御照覽。何様同心之儀。毛頭不可忘却者也

二月廿八日

竜伯御判

伊集院下野入道との

石様奉始 御三公。御心安筆江起証文等被為取替候事。第一幸侃御田之隙を伺ひ。何卒して可致煩覆心底被為見候付。專其御用心之為に為被仰付儀。今更被是參考仕候て被推計申事候。右外新納旅毫覺書にも。文祿二己九月。一唯公於朝鮮御遠行之御左右。同日七日。栗野江相聞得。慈眼公御連統可然と御談合之節も。幸侃入組被申候得共。鎌田雲州拙齋被申分候て。貫明公江御内意相濟候趣和見得候。是亦參考仕候得は。此序にて雲州拙齋等より為被差上置起証文三ヶ条之内に。世上如何成計策有といふとも。其案に入御奉公可申上事と云。一諾之首尾に可有御座。万一如此時代被申分候人無之候はば。御家之御危難無此上も事に可成立心底にて。幸侃入組為申は無別条と相考申事に御座候。又同三十二年。唐島より京都江旅庵之御使被差登。從 松齡公 貫明公江被仰遣候事有之。罷立候節。伊勢貞昌を以。幸侃心底之族有之に付。

御書拝領。上京仕舞次第罷下。栗野江御留守番仕候様。為被仰付趣も相見得。同四年。幸侃計略にて。石田三成江遂奸訴。三州歴々古來領地新恩等に至迄。一統惣縁易と申事取計。自身は肝付郡より庄内之移地頭に罷移候左候様五申六月。慈眼公朝鮮より抱節江為被下御状に。今度知行沙汰之儀。一田雖無案内候。向後國家可相守儀候間。竜伯様 武庫様江得御意。諸士安堵させべき籌儀ぞと。被為書有之。旁幸侃逆威相振居候折柄。松齡公再朝鮮御渡海にて。慶長二四二月。帖佐御立。翌廿二日。於川内一向宗御禁制其外御留守中御取締向之事共。段々長才院。上并神五郎等江。被仰付置左之通相見得申候

一向宗之事。先祖以來御禁制之儀に候之条。彼宗跡に成候者は。山事たるべき事

慶長二二月廿二日

義弘御判

右通被仰出置。三月廿八日。久見崎御出船。岩波國迄御着候。折柄最初百万之御賦候趣。五千人相重候 御朱印到来候に付。為御他言。旅庵被差登候得は。京竿御検地為相済上に。隠田有由にて。為札方旅庵又御田江被差下。銘々知行之被差出取揃。被為改候得は。幸侃知行に隠田有之。且大崎境立木に。段々不正之事も為有之由。是亦旅庵覺書に相見得候。右次第我儘に付。右様慶長二年一向宗御禁制被仰出候得共。同四三月。幸侃被誅迄之間。改宗等仕候哉無覺束候。前文之通權威甚敷。結局幸侃江皆致追従人多。或は幸侃心底之族有之など相見得候。幕幸侃信仰之一向宗も被為禁止。先日責様御咄之。旅庵状なども。士分以上之者。就中被為禁止山候事共。彼是考合候得は。右様致追従候輩を。專幸侃より其宗旨に引入。党類次第に相増申勢に候故。幸侃心底之族有之杯相見得。分て一向宗為禁制候筋には無御座哉。旁以逆意露顯之折柄。石田三成も御注進被申上候付。慈眼公御手討被為遊笠と奉存候。猶其後も此宗門相殘候哉。慶長四年夏。同年八月。同十二年八月。左之通被為改候

寛

一 竜伯様被召たる法度被下用捨可入之事

四ヶ条もらす

一 於鹿兒島神水之事に付。一向宗法度之事

一 信心之儀被捨間敷事

三ヶ条もらす

慶長四年夏とあり。惟新公仰出と奉存候。

起証文之事。御在伏見にて。

一 奉対 竜伯様 惟新様 忠恒様毛頭不存別儀。無二之御奉公可仕候。如何様之惡心之者。如何計之事を仕候共。同心不申。則其旨可申上事。

一 御前之出合。聊以洩し申間敷候。世上之物沙汰承付候はば。無異儀可申上事。但無正儀事は被聞合捨奉存候事

一 主人之御上かけ事申間敷事付御暖之儀いはひ仕間敷事

一 或は御親子之御間。或は御夫婦之御間。悪き様に申成間敷事

一 朝夕御食物之儀不及申。少々御食物に付ても。聊爾仕間敷候。万

一 いかなるたくみを以。和談けうかひの儀被煩候といふとも。其

一 案に入。悪人の心中之通可申上事

一 御代々御きらひ之儀候条。一向宗に會以罷成間敷事

一 当時幸侃妻子背御下知被構逆心候間。雖不及申儀候。曾以通用申

一 間敷候。勿論此跡も不通仕候事に付。若彼仁江入魂之者於有之は。

一 至其輩も聊申承間敷事

一 右条々若於令違犯者以下神文

慶長四八月七日

起証

一 今度一向宗就御糺明。互心底不存候。我々事は彼宗に不罷成候。

一 勿論向後別心有間敷候事

一 雖不新候。御奉公之一筋。無別儀可申上事

一 不可致野心不忠之事に付。自然雖有識者。能々御糺明候て可被下

候事

右条々若於偽申者以下神文

慶長十一年丙午八月十一日

伊地知民部少輔重政判

西田和泉守隆貞 判

外に四十八人姓名略ス

新納武藏入道殿

右之通相見得。其後寛永十二年にも被為改候事。大口三之官氏文書に有之由。其趣前々御改被成候節一向宗本尊出候士衆は。知行屋敷被召上候て。寺領にて候。下々は財宝迄被召上候。身上に口能無御座候。財宝は神社之修理に付ると見得候由。同年十月。諸国一統切支丹宗御改に付。御当国之儀は。惣て人別手札を以被相改候。是当分札改之初にて。同十六卯年迄に相済候由。

その比のもの候哉寛

在加久藤飯屋

一 きりしたん

一 うせ衆之事

一 不審成旅人之事

一 博奕之事

右は鹿兒島上下之横目衆江見立候て可被申出候由被仰渡候

寛永十五年五月十八日

自其内廿未年。正保四亥年。至今追々七年計に有之事候。一向宗

も。切支丹と相混。被改事は。右比より之事に候半。

又左之通被書も見当申候。

一 当国之儀。他国に相替。一向宗きりしたん宗相禁事。別て仏神為

信す也云々。

扱其比不思儀成説御座候由。島津彈正久慶は。仏道教寄にて。自

分法名処安忠省大居士と云法号之記等。雲水僧に便り。松島之不

住軒雲叟と申僧に相頼。寛永廿一申二月。為被書真事共有之。其

外正保四亥七月。興国寺守隆和尚江為被遺状どもには。先件奪更

和尚以來。別て曹洞一派帰依之情。甚敷程に相見得。御家老御役は其以前より御免にて。異国方宗門方之御掛のみ。於宅被爲聞候得共。慶安二、丑六月。是も依頼御免爲有之由。然其前後之事に候哉。御領内新宗之張本。真純と申者。内密々近付。上方に差寄せ。六条殿に取入。御國中彼宗致致興候様被相巧。於江戸大久保加賀守様にも取入らせ。寛陽公御事迄悪様に爲被申込杯。其比風説有之。真純事於脇本謀殺爲被仰付山。久慶。右鉢之事没後に顯れ。系図面世代等被爲御候との趣。宝永年間。市来家年問書有之。其以後御取締猶又嚴密に相成候歟。明暦元年。初て宗鉢坐被相建。若松助左門久昌。宮里五右衛門正行に。宗鉢奉行被仰付。万治元戌年。国分衆中山口四郎兵衛と申者。本尊持にて。同所衆中有馬跡左門。左近允藤兵衛江被仰付。同八月朔日。両士被宅へ夜中押入。致誅殺之。其子山口仲助事。同九月。種子島へ流罪被仰付候由。然其四郎兵衛母。彼本尊は。右式災難も無守護泡腹立。焼捨爲申趣。有馬氏書留に有之。同二年。諸士并諸寺社に至り。被官もの改方。兄玉四郎兵衛利実江被仰付。左之通書付も有之。

覺

一伝左衛門父子。今度百姓に被召成候由。從郡御奉行当地駿衆江被仰越候事

一伝左門先年宗鉢御改之刻。老母本尊を出し候付。牢人仕候。其時分伝左門申候は。親隠岐。一向宗を討果。其祟にて親兄養子迄。三人同病にて相果候。就夫母女心に爲子共と申。本尊を格護申候。尤内々笑止之由。折々申聞せ候得共。右之祟に痛隱置候。親之事にて候得は。更に難申出候て罷下候。手前は毛頭其宗鉢にて無御座由申。手前より当地於諏訪神前露社共仕鉢候。其内御内々召放由被仰出。百姓に罷成者も御座候。又職人は在郷札にて無御座候故。任無人。手前扶持を仕。数年召仕申候事無紛候。然共若被召直仕合共御座候て。又内々に片付障にも罷成儀も可有

御座と存。竜光寺申入。門前札を取。寺中に預置候得共。掛被官御沙汰共有之に付。竜光寺より除証文被差出候間。迫て札御改之刻。家内に可召入由。公儀江も申上置候。手前無人にて。御軍役難勤候間。同者被官に被下候へかし御化に奉存候事

一伝左門事。於有馬手負。片輪に罷成候。女房は不限に御座候。子竜兵衛事。手前小姓に召仕候故。此中耕作然と不仕候。其上老母致格護。山水御蔵入百姓に被仰付被下候様に申上度候。公儀可然様に御申被成可被下儀。頼入存候事

万治二、亥五月廿五日

山田主計有真昌殿弟也判

兄玉四郎兵衛殿

同三年。阿多衆中実吉参右門。吉平田才次郎。宗鉢之儀に付。居屋敷被召上。同四、丑四月。谷山衆中木藤右衛門。高尾野衆中前田郷左門。一向宗就御沙汰。名跡被召禿。栗野衆中宗方弥五右衛門事。古一向宗石川仲左門後家に取合。夫婦に罷成。殊に女房列子を直子に取候依科。衆中被召放。百姓に被召成。同八月。財部衆中久木元源藤等三人。一向宗改に付。彼宗旨に付。色々構偽曲事依申出候。爲罪過知行屋敷縁易に付。岸良江被召移。同九月。中郷衆中鳥越渡左門。親渡右門一向宗御沙汰に付。居屋敷被召上。同十二月福山衆中福留爲右衛門。依一向宗知行居屋敷被召上。此類御引付留に過分相見得。僅一年中さへ。如此候得は。無實際事に可有御座。寛文年間には。長島へも一向宗有之。山田主計有真。木脇刑部左門祐春。井に出水衆中面高主馬被差越。一向宗首尾能相治候に付。御褒美御高三十石。主馬江拝領被仰付候事。家筋調に相見得。其節木脇刑部右門祐春には百石拝領。名前奥書左之通

御高百石

右知行爲御近習役分地此中被結置候処に。此節吟味役被仰付候。小身にては可難勤候。且又先年長島中無沙汰之族有之。境目之儀。別て御念遣被召上。被差越候処。首尾能相鎮候。旁以爲

御心付永々被下候旨。御老中任御曳附名寄相改者也。

御支配所印

寛文十二年十一月廿五日

伊東刑部左エ門印

肝付三郎兵衛 印

村田五郎左エ門印

伊地知左右エ門印

新納二左エ門 印

貞享元子九月札御改之節。外域より差出書物左之通。

五人与書物

一鬼利支丹宗御禁制之儀にて。今度弥爾敷被仰出候。我々与中に鬼利支丹宗之者實て無御座候。

一御家御代々御法度一向宗之者無御座候。若右宗之者見聞仕候はば。

雖為親子兄弟。可致言上事。

一他国人。医師。占師。出家。山伏。紛鬼利支丹宗之者入来候はば。

則可致披露。付一夜泊之旅人にて。稱敷僉儀仕。不案内成者には。宿滞申問敷事。

外略干此

其後宗跡奉行之儀。元禄十二卯四月。宗跡改方と被相替。宝永六

丑九月。宗跡宗旨と唱来候は。宗門と可唱。且宗旨被仰渡。自其

御役名も宗門改方と唱来。安永七戌五月。只今之通。宗門改役と。

御役名被相替候由

右之通段々任案書々綴。得と考合せ申候処。一向宗も。御元

祖様御時代より初り居候。久敷宗に御座候得共。如唯今諸国に

発興仕候事は。自何比之事候哉。見覺無御座。勿論御当国は。

御元和様以來。御代々様。大形禅宗御扇依にて。問々。御三代

様など時衆宗に被為成候得共。禪宗をも被相兼候哉。就中。御

七代紹翁様御以來は。殊に曹洞一派御崇信にて。至今其通之御

事候。然は一向宗御禁制と申事。日新様御代。前件之通御禁物

之歌に初て相見得。其内南蛮宗之儀は。伯圖様以來御戒と申明

文。上井日記も有之候へは。切支丹宗は。日新様右之御禁歌より。伯圖様も被為戒置。其後御以來之御禁制には有別儀間敷。

一向宗之儀も。御禁止之明文。慶長二酉二月。初て上井日記より相見得。誰様御以來と申事は不詳。乍然慶長二酉二月。惟新

様仰出に。一向宗之事。先祖以來御禁制之儀に候之条。彼宗

跡に成候者は。可為曲事と有之。同四年八月之起証文には。御

代々御嫌ひ之儀候条。一向宗に會以罷成間敷事共相見得。右之

御先祖様。誰様を被為指為被仰御詞に候哉。明白之見及無御座

候。然共。日新様御禁物之歌に。是亦同様被為詠置候得は。右

御逝去以後。伯圖様。貫明様。惟新様迄は。最早年間及四十年

候間。日新様御事を。先祖以來と被為書候哉。又は。恕翁様御

代。石屋開山にて。福昌寺被召建候時分。応永六卯二月。谷山

宇宿村御寄進状之内江。彼御寺は。相承石屋和尚之尊意。御弟

子次第可有御相統云々。若違背之者。不可元久為子孫と被為書

置。其以後宗派に付ては。御代々様右法脈相統之高僧。御崇信

被遊来候間。右之御事を。先祖以來。又は御代々と被為書候哉。

難計。乍然御當国江一向宗入来候は。永禄五年比。真幸之北原

民部杯より。上力光佐上人振威勢居。元龜元年。織田信長被為

征伐之。天正四年も同断にて。同年遂に致降参。太閤代相成。

同十五年。西征にも附来り。文禄元年。五拾歳にて過化之由。

左候へは。前文永禄五年。北原杯此宗に被引入候時分。光佐式

拾歳之年に相当信長江及拾壹ヶ年敵対仕候程之威勢に御座候間。

門徒共諸国江差廻し。宗旨相弘め為申も。右之光佐代より盛に

為相成敷。北原又は幸侃杯は。決て皆光佐代に為引入事相違有

御座間敷。左様之勢ゆへ。日新公御事。禅宗御悟道為被遊御方

にて。深く御成め被為置候半。其上御国辺鄙之僻習にも御座候

哉。上使御對書之内。當国江相伝候一向宗之風儀は余国に相替

宗派不宜段。古来申伝候と欺為有之哉に覺罷在候。

御宿坊源寿院より使僧を以。御国元にて一向宗御禁制之由緒。

承度旨申来候付。左之通御記録聞合せ返答。

御国元一向宗は上方筋之宗旨に相替。新宗と申候て邪法ら敷障礙をなし。同宗之親み強く。徒党を結び。君臣之礼を背き。父子之分もなく。無作法に有之。仇をなし候儀も御座候付。御代々被成御禁制候。何比より之儀に候哉。年來之儀故。御当地にて年鑑等相知れ不申候

右任御問合。相知れ居候趣。書記進之候。此段為可得御意如此御座候以上

安永七戌十二月十五日

東郷喜三次

源寿院様

左も御座候敷。諸旧記にも。悪党に候書記来。勿論初て致信仰候北原杯以来。其宗に入ざる者は可討果事共取企。或は幸仇杯之様。譜代恩顧之君恩をも忘却し。御国家を傾覆せん事迄相謀り。皆々無程及滅亡候得共。其惡敷余風今以流来候哉。古来御禁制存。世上に絶間無之事。畢竟愚昧之者共。只本尊計致信仰候事を存。君父之責き道理も不相弁処より。御法度杯何共不顧姿に相見得。乱世共に御座候得は。皆幸侃心底之族共可申者共にて。太平之御世とは乍申。御国民にて御國中に乍能居。二心を抱き。他国之間者に成居候儀同前に御座候へは。盛に成立事は。氣之毒千万に奉存候。乍然科銀等無滞相納。却て御益筋哉に申説も有之。是決て本は彼宗旨共より如申触説に可有御座子細は御禁止之御国民を引入印に付ては。右之向に申敷。万一相願候て及科銀候共。門徒中より可致出銀管候之趣などにて哉。引入候向にも可有之敷。左様之処より。右式存外之説も有之には無御座哉。民は所令より所好に従ふと申事も承及候間。却て御益筋など申説。何れ根切不仕本に相成。日新様御以来之尊慮には不相叶事共には無御座哉。如此事共は古事探とは別段にて。我式恐至極可申上事にも無御座候得共。先日任御弁先。此段も任筆より。何分にて先年一渉り見覚。本書不写置候引書等。俄に借集。見届候事難及手。誠に乍不案も間に合迄如此御座候。返々も他見御勘弁。御一覽後は早且御返冊

奉希候。不図見当。追々補訂をも可仕。就ては全無御心置。漏誤之事共は。差付御取直御書入。尤先日御咄之旅座状等も。御内々御写見せ被下度。猶又再考候て。補入仕置度。何も宜奉願候

午霜月

伊地知小十郎

竹下寛左エ門様

此宛。本には書候て。紙にて張隠し有之候事

去七日之貴札。九日之夜八ツ時分に参着申拜見候。然は爰元長江浦之樋口筑後。同村之内中堀之源兵衛。中福良内樋渡之弥兵衛。一向宗本尊格護為申由。任御書面相談仕候て。右之本尊指上申候。然処に彼者共五人組に禍敷申付候へは。其内長江浦之内的はの七兵衛と申者。本尊格護為申候由申出候て。本尊指出し申候間。同前に持参申候。右諸道具。別紙小日記を以指上申候。御受取可目出候。巨細之段は。彼使沼田式部左エ門可被申上候。右使為中途相添指越申候。御下知無之候得共。為増如此候間。早々御返し可被成候恐惶

明暦二年丙午三月十三日

伊地知佐左エ門重清

三人 白坂 左京篤林

西田 和泉時通

カゴシマ

宮里五右エ門殿

正行

若松助左エ門殿

久昌

殿用飛札候。仍かごしまより沼田式部左エ門只今帰宅被申候。宗旨改所より御状参候間持せ申候。我々江も状参候間。写御覽之為持せ申候。并書寫して同前に進上申候。何共御帰宅之時分。細々可申入候。御留主之儀候得共。任書物様子相尋可申覚悟候。是亦為心得候恐惶。

明暦二年丙午三月廿日

三人 同上

伊地知主膳様

加久藤移地頭なり実父の新納加賀忠清地頭所大口なり

一書令啓上候。仍爰元助左エ門と申者。一向宗本尊格護為仕由申出。此節指上申候間。小者之持介へ本尊仏具等持せ差上申候。尤助左エ門持參可申候得共。九拾余之者にて。座中も歩行不罷成候。当分齊藤為右エ門屋しきに罷居被申候付。即為右エ門へ申付。相添差上之条。御請取可被成候恐惶。

明曆二年三月十九日

三人 同

宗跡奉行

若松助左衛門殿

同

宮里五右エ門殿

鰐用飛札候。仍爰元江一向宗本尊格護仕候もの。先日書立を以被仰聞候間。即申付候。本尊も出候。御指図之外にも多々御座候。成程相改申候次第に可差上申候得共。今ちと改申候て於成事は一度に所中之分指上申度候。其故は。多人數參上申事難成存候。本尊出候者之内に。歩行不罷成者も御座候。又子共不持者も御座候。加様成者。如何仕可申哉。御意次第可申と存。御尋申上候。細々御報に可示給候恐惶。

右同

三人 同 上

宗跡奉行

宮里五右エ門殿

同

若松助左衛門殿

先日書立を以被仰越候。一向宗之人數。本尊諸道具持參被申候御請取可被成候。然処に爰許見被申出本尊諸道具被差上申者御座候。右同前に持參申候。小日記別紙に書立進上申候。被届御覽尤に候。猶追々可申上候恐惶。

明曆二年三月廿九日

三人 同 上

宗跡奉行

若松助左衛門殿

同

宮里五右エ門殿

一書令申候。仍一向宗改之儀被仰越候付。所申相改候て。本尊諸道具持せ上候。其内に歩行不罷成もの。或は子共無之ものは。組中其外名頭江持せ申候。隨に御請取可被成候。尤我々召列候て差上可申候得共。未所中改申候之条。書中如茲候恐惶。

全 三月卅日

三人 同 上

若松助左衛門殿

宮里五右衛門殿

去三日之御状。爰許江十三日に大口より相届。令拜見候。仍一向宗本尊格護候書立被遣候。則申付本尊道具格護仕もの為持上候。松本坂之下之乙名六兵衛と申者。歩行不罷成候て。同村へ罷居候喜左エ門と申ものへ持せ申候。中福良なべの村之大藏と申者。女房の親致格護候仏道具御座候。尤大藏江可持せ候得共。当病故。子之助三郎江持せ申候。本尊無御座候。成程糺明仕候得共。上之式には其上此大藏と申者。前々の様子然々不存之由申候。右兩人之組之者相添可差上候得共。時分之儀に候間。先々持せ申候。何ぞ於御用は。重て指上申すべく候。將又本村之千兵衛後家。同村之藤兵衛。致糺明候得共。本尊諸道具少も持不申候由申候之間。万事糺明仕候。相究次第可申上候。為御存知候恐惶。

明曆二閏四月十五日

三人 同 上

宗跡奉行

若松助左衛門殿

同

宮里五右エ門殿

先日書立を以被仰越候。一向宗本村之藤兵衛。同村之千兵衛後家
爰許にて成程。礼明仕候得共。本尊格護不申由申候。併千兵衛後家
仏器等ツ否。柄巻ツ出申候。尤後家可差上候得共。今九十計にて。
歩行不罷成。祖母にて候之条。名頭之四郎左衛門江。右道具二ツ
持せ申候。藤兵衛は何色も無御座由申候之条。五人組老人相添。
其許江差上申候。於御用口がら可被聞召上候。為存知候恐惶謹言

閏四月十六日

三人 同 上

若松助左エ門殿
宮里五右エ門殿

請取

一 仏巻仏道具相添

右は十四五ヶ年前に。憶に受取申候。此度御改稱敷御座候。就夫
如斯候以上

明暦二年申三月廿六日

吉田町之

五郎二郎

加久藤永江浦松本之

弥介殿

右之書物。鹿兒島へ差上申候間。如此写申候

中六月三日

一 書令略上候。仍先日伊地知佐左エ門罷越候時分。一向宗本尊致格
護候もの書立被遣。則歸宅仕礼明仕候。

一 地口八千左エ門うし一つ。仏器一つ。打ならし一つ。差上申候。右
八千左エ門相果候。子の千左エ門持参可申候得共。当病にて。組
中之赤崎内蔵直持参申候事

一 永山之市右エ門に礼明仕候得は。手前には本尊無御座候。乍去秋
原甚右エ門下女之は。本尊諸道具一節預置申候。其本尊は。先日
右之はへ返し付にて。即差上申候間。彼方より請取。今度取付
候。指上申候。并与中之書物同前に持せ申候。御覽可被届候。尤
市右エ門右之書物持参可申候得共。老跡之者。其上病人にて。歩

行不罷成候間。与之者江持せ申候事

一 長江浦之助八。本尊格護為申由候得共。爰許成程礼明申候へは。
親以来より本尊格護不申由。与之者其外所申之者申候。親之兄市左
エ門と申者。本尊有之候。其本尊。松本之弥介如為参之由申候間。
弥介江相尋候得は。其本尊吉田町之五郎二郎と申者へ相渡。請取
置申候。今度持せ上之条。能々可被届御覽候。助八申分。細々書
付指上申候。并与中之書物持せ申候事

一 中島之佐吉母。本尊之事。是は先日林田全左エ門母前より指上候。
請取仕候。右左吉は。本左エ門弟にて候間。御日記御消可然候事
右之通於爰許親敷致礼明。如茲改届申候。為御存知候恐惶謹言

明暦二申六月三日

三人 同

若松助左エ門殿
宮里五右エ門殿

一 書申入候。仍前に被仰道候一向宗本尊出。千左エ門五人組書物
并中島之佐吉母前に差上申候。本尊請取之写。先日失念仕候間。
此節遣申候間御覽可被届候恐惶。

同六月十一日

嚙三人 同

若松助左エ門殿
宮里五右エ門殿

加久藤慶案帳

爰許衆中野久尾六兵衛。兄之孫介。去々年宗跡御改被仰付候刻。

本尊指出申候。就夫六兵衛事。兄弟之儀に付。其元孫介生付要敷
候付。知行原敷を請取。當時奉公被申候間。自然有本尊孫介に名
付られたる儀も候はんやと。此節地頭伊知地土。贈正頼なり以下同より稱敷穿鑿
被申付候得共。曾以其宗跡にて無御座候。巨細之儀は。有筋之書
物六兵衛被指上候。少も別儀無御座候。若後日訴人共有之。相違
之儀候はば。至我々其沙汰可承候。為後口之如茲候以上

万治二年三月十九日

伊地知佐左エ門重清

三人 西田孫兵衛時定

宗跡

御役所

同爰許衆中萩原神右エ門名子之母。去々年宗跡御改被仰付候御。一向宗本尊差上申候。就夫主人甚右兵衛格護にて。名子之母に名付被指出たる儀も候はん哉と。地頭より稱敷鑿穿被申候得とも。神右エ門其宗跡にて無御座候。巨細之段は。甚右エ門より有節書物を以被申上候処。少も別儀無御座候。去々年御改之時分。永山村之市右エ門。本尊格護仕候間。可指上候通。御改所より御指越被下候。市右エ門江鑿穿仕候得は。我等本尊は先年指上候。其以後萩原甚右エ門名子之母指上候本尊。一節預置候由申候て。互に証文取替被差出候て。市右エ門申達候。然時は神右エ門其宗跡之取行為仕者にて無之。若屬より訴人共御座候て。聞召被上儀も御座候はば。至我々其沙汰可承候。為後証如斯候以上

万治二年三月十九日

三人

宗跡

御改所

爰許衆中柚木万左衛門下女之母之本尊。去々年指出申候。就夫万左エ門格護には。御改之時分。下女之母へ名付被指出候儀も候はんやと。此節地頭より穿鑿被申付候付。有筋之書物万左エ門被差上候。少も相替儀無御座候。万左エ門其宗跡之取行。此中仕不申候通。五人与中より書物差上申候間。御吟味之上を以。其科御免被下候は仕合に奉存候。若其宗跡之取行為被仕候と。脇より訴人共有之候はば。至我々に其沙汰可承候。為後証如茲候以上

三月十九日

三人

宗跡

御改所

爰元衆中池田与助被官藤兵衛。一向宗本尊去々年指出候。就夫与助親子間に格護仕。御改之時分藤兵衛へ名付被指出儀も候はん哉

と。此節地頭より稱敷鑿穿被申付候。有筋之書物。与助前より被指出候。少も別儀無御座候。此中一向宗之取行會。以与助不被仕通。五人与書物相添指上申候間。御吟味之上を以。落着之処被仰付可被下候。若取行仕たる坏と。訴人共有之候はば。我々に至り其沙汰可承候

三月十九日

三人

宗跡

御改所

一書申越候。然は其許一向宗人数何某。家内何人と。銘々書立。早々可被差上候。勿論男女書立可被申候。聊延引有間敷候。恐惶謹言

万治二三月十九日

相良 主税

平田藤右エ門

喜入久右エ門

小林 野尻

紙屋 高原 綾

薄辺

横川

吉松

加久藤

飯野

吉田

穆佐

倉岡

變衆中

覽

銀子二枚

右は去々年一向宗御改之時分。萩原神右エ門名子之母之本尊。市右エ門預置申。御改所前に本度に返し付候間。科銀可申付由被仰越候間指上申候。此外には無之。若亦承り候はば後日指上可申候

四月

三人

宗跡

御改所

一書令啓入候。仍其許末良村之内井手之上道書。百姓へ。此元一向宗半人池田千左エ門。戸高与兵衛。被召付之由。先日御郡座より被仰越候。就夫右兩人居所見廻として罷越候間。庄屋衆被仰渡

可然やうに頼存候。秋中爰許作敷取納仕舞次第可罷帰候。猶期後音之時候恐惶

万治二八月三日

三人

栗野

御囃衆中

又内。又々被官。一向宗本尊。并道具差上候者。人数面付帳急度可差出音。八月二日之日付にて。宗跡改所より以廻文被中越候。相違口限之様に差出候外城も有之。于今延引之諸所は。必今月廿九日限に。其首尾可被仕候。若口限相延候はば。至囃中可及其沙汰者也

同九月十八日

中務

藏人

溝辺より倉岡迄十七ヶ所。

囃中

右之状。九月廿日該の時に参候。則飯野へ持せ申候。一書申入候。仍て爰元一向宗半人覺左工門。其元鳥巢村之内。松ヶ迫門百姓江被召移之由被仰付候。就夫罷越候間御引渡頼存候。恐惶謹言

十月四日

三人

羽月御囃衆中

一書申入候。仍て爰元一向宗本尊出。湯田水流。藤八郎前に。南郷名之内。水流屋敷百姓江被召付候。然処に御藏入永山村之内上平田門に被召附候百姓。右水流屋敷江被召付たる百姓申候。藤八郎事。何方へ被召附候哉。為可承指越候間。細々可被仰聞候。恐惶謹言

万治二十月七日

三人

山付御奉行

一前一向宗之儀は。帳面札にも前一向宗と片書被仕。手札可被出候事

右之趣見届。所々江次第可被仰渡候。若改衆未罷越候はば。囃衆被写置候で。改衆被越候刻。可有首尾候。聊延引有間敷候。万治二亥十月十四日

囃衆

北郷 又次郎
北郷 作左工門
川上 将監 判
島津 三郎 石工門

(原表紙)

天保六年乙未正月草之

御当家様就一向宗御禁止愚按補遺

伊地知季安

(原寸縦二四・六糎、横一六・六糎)

旧文集

平視故曰御座候

旧伝集

右の旧記も有、抛事に候半御生害記に明白相見得、左に写上申候。

發生害記

暗衰故旧之朋有言曰熟夫以晴衰無犯罪会此咎有大故先是天正丁亥

如之何

尚江為被遣置壹冊に有之南浦文集にも左之通御座候

貼紙

朱書一字下ケ補答之

朱書

町内家譜

白尾園柱
著撰

久察忠棟反意 久保忠恒之二公素惡忠棟明矣平攘錄公薩摩相

幸侃亦素敬大明意欲抽兵密逃呂宋淡水等處旁觀成敗又圖書編云
虫
「秀吉如結薩摩州將幸侃逼令州官 義久殺其弟中書以自明 義久不得已而伴為降」其心未嘗一日忘秀吉也其中書家久似謂羽紫秀長嫡家久然則家久之死亦幸侃所構惡歟乃至幸侃之叛逆密通秀吉弑公之二弟明人猶依稱之幸侃之罪惡可謂貫盈乎本朝異域矣世說謂久保君祖巨濟亦幸侃與焉「天正十九年五月廿二日久保君賜幸侃盟書」至 義久樣義弘御前如有讒間又曰就其方之儀萬一有讒間云々蓋有所為而授之且疏忠棟上落記其感福傾公侯噫非忠恒手刃之則社稷為老賊危矣豈乎久幸為忠恒公使於 義久公上誓章其旨深矣

南浦文集

一 歲久

太閤殿下西征之時歲久有瘵瘵之病而不得出頭時有一讒者以為非其疾漸漬而不察所謂浸潤之譖也 太閤亦不念讒口鑽金之戒令細川幽齊不正其罪而害歲久歲久不幸而陷身於鋒刃命矣

右通文之和尚一讒者与被書置候茂前文忠棟為申事無紛義に可有御座左候而前件忠棟之祖父忠明生於肥後と申事共愚拔仕候に忠朗祖父大和守倍久者伊集院家七代大隅守顯久弟にて宝徳二年二月九代忠國公顯久を御攻被遊候御顯久子弟一族召列肥後國に出奔仕其孫筑前守久雄代に相成御國之様所參仕其子兵部少輔忠増杯者直に幸侃へ隨身役為仕筋に見得候間右之忠朗出生仕時分迄者其父大和守忠公茂顯久江相付肥後に為罷居事無相違儀に可有御座然者天海和尚之俗姓茂忠明家來筋にて肥後より為參と申説茂弥其通に可有御座口天正十五亥三月從豊後御附陣後忠棟逆心之程 金吾様隨に御見聞被為在天海和尚に御取次 童伯様江被仰上候事茂前々年より内通仕居候て前年九月上方江遍參仕居候出家共御注進申上程之事候間金吾様に茂決て御見聞被為在候儀左茂可有御座然処天海右次第大事之密語却て幸侃へ洩告候事共存外之至右次第大和尚さへ及表裏諸人心底難斗乱世に御座候

故何れも幸侃威勢相畏れ内々午存 童伯様維新様江惡逆之事申上人無之左様之折柄鎌田政近比志嶋國員被遂言上候忠節無比類趣伊勢貞昌細々書付を以為被申上上勢ひ旁被考合せ申事に御座候尤右次第金吾様御身上さへ幸侃へ相洩候得者太閤へ取入候て及一大事候間深々秘密に被仰談式拾余入御心安衆中に誓詞を以諸人幸侃に不致合様極内分 御取締為被遊事共今更被思知候事々御座候

古戰場記

一

天正十五年四月六日秀吉公の舍弟羽柴美濃守秀長 後母大和 大軍を進て吾か日州に攻下り云々同月廿一日伊集院幸侃を人質に出し有信をして高城を下城なさしめ五月朔日鹿兒島に御帰陣なり分註に云軍散して後六月五日家久秀長に於諸郡野尻郷初て面会せられし時秀長鷹毒を藥に和し勸め害せしなり

前件惡逆之次第にて推考ふれば中務家久様茂秀長会面之席にて毒殺せられ候事決て幸侃秀長の陣屋に人質として詰居致議言候趣ありての事なるへく右御兩人様者其頃御連枝之内にて茂格別御頼母數名將に被成御座候間敵方に内通し謀計を以悉く相斃し候次第今更迎も中々憤怒に難堪惡逆に御座候

旧伝集

一

伊集院右衛門太夫忠棟謀反之存念有之しかは又市郎久保被遊御座候ては御勇將にて被成御座に付難儀存候哉高麗におゐてある時明早朝いつれも敵陣江趣へき由候然に久保の御道筋に掛橋有之候処に忠棟より橋けたを引はつし置かれ候に久保いつもの御くせとして人に先をせられましと思召また夜のあけざる内に御打立被成真先に馬にむちをくはへ御渡り被成候に橋より源谷川江御落込御死去被成候時御死骸見苦敷候とや有川雅樂助貞世事後見として相

付おられ候か後見として相附居無念の至りとて彼地におゐて自害せられしとや世に御病死被成候ともいふ説有之候へは実右の次第にて御死去被成候半歟右の悪謀源次郎より致し候半と存候

右の旧説古来言ひ伝へたる事にやきたかなる明証は見当らねとも雅楽介貞世は伊勢貞昌の父にて父子共に其頃朝鮮に従軍なりしか貞昌は久保公の御遺跡様に御伴し帰られ貞世はなほ朝鮮に居残りて横島といふ所にて死せられし訃音を貞昌帰朝の上に聞かれし赴き貞昌の係伝に見へ且久保公御家督に立せられ持明夫人と御昏礼の時段々色々入組ありし事共貞昌書おかれ久保公御他界の御左右初めて栗野に相知れ候時分此上は忠恒公を其御蹟に立せまいらせまたまた持明夫人と御取合被遊候御談合にも幸侃段々入組為申こととも新納旅庵の書おきに相見へ左あれとも新納拙斎録田政近申勝ていよいよ忠恒公をは儲君に建まいらせ直に朝鮮に渡らせ給ふ時など竜伯公・維新公・忠恒公比志島國員録田政近伊集院抱節などお互に深く誓約あらせられ國員等三人は片時も御側はなれず忠勤を竭されし事共これおもひ合せ剩忠恒公も朝鮮にて掛衛門橋に臨んでいと御危難の事なと在たるに御中間上野大左堅く御馬を挽き止たる忠節によりてその難を免れ給ふとて御褒美に姓名を改め賜ふて橋口對馬と名のれるてふ事かたかた考へ觀れは久保公右やうの实事もやありて後車の戒めに段々忠恒公には御心つかひ遊はし右次第御念をいられ彼の逆賊らか術中を遁れ給ふにはあらざる歟旧説区々していづれと研究も叶はねはそれそれ写おくのみ左の如し

貼紙朱書

一 又市様高麗にて御誓言者御馬被召たる所に伊集院幸侃罷出拝見いたし候に幸侃被申たるはさてきて御上手に而候おそれなから此船のかちを御とはせ乍恐奉拜見度と御所望被申上候成程飛せへくとてかけにてひらりと越ければはめ被申候重畳候得共此かちをおとしをき此上を飛せて御見せ被下度と申上られ候得者成ほと安き

事そとて又御馬をかけにめされ候にかちのきわに御馬ととまりければかくを入れ御声をかけられたれば御馬立あかりかちに前足をかくるやと見へたるか飛越倒におち御馬のくら輪に而御むねをうちたれば御前に詰居候面々茂あつと申たるまでにて御いきたへ申何とも言語に絶たる御仕合にて有と川上十郎左衛門我等に直にかたられしと碓山次右衛門殿被申候千郎左衛門殿はかふらひに二拾三歳にて渡海いたし候よし後に入道して芳庵と申候

一 光久公御意候正宗の道具は当家にまつきらひ候又市様御落馬にて死去之時きされたるも正宗隈城之仏主の橋にて落去の砌も正宗きされ候不古之事故われなとも御さしなじと御意候誰人の被申たるはわすれ候

元文元年七月 日

山田四郎右衛門

伊勢貞昌系譜

一文録二癸巳九月八日 久保公於朝鮮國唐嶋御病死奉附骨貞昌帰國殿親雅樂入道任世貞真蒙家老役義弘公朝鮮國之供奉文録於眞島死去聞其赴音屈居于飯野

右の雅樂助貞真即ち旧伝集に有川云々あると同人なり 但此事貞昌申状にも見おぼゆ重て考べし

大村士平國會藤兵衛文書の抜写

一 於高麗又市様御煩被成候て御陣中にて御藥參候間夜日御そばに罷居御藥をせんし候て上申候然共御氣色不相直候

己五月晦日

祐書

右會藤兵衛先祖八代少右衛門と申者 惟新様 黄門様江御奉公仕候に付 又市様御病氣之節御奉公相勤候由書付有之段吏官筆抄に見当然共御怪我之事は無之候不審也

旧伝集

一 忠恒公御中間橋口何某於高麗御馬の口を取參候に付掛橋有之御渡り可被遊申候付て先御待可被遊よし申上同役之御中間へ口を渡し橋をふみ見候得は橋けた落為申よし候夫より脇道を御通被遊候と也然に右之御中間に御褒美の御感状を被成下乎今子孫格護いた

し有之由也

右之説寛延二己正月浅川新左衛門安長書出を按ずれば小異あり其略云御中間上野大左衛門朝鮮何方城貴之時敵追討被遊城内に逃籠候敵を直に御馳込被遊度勢に候処御供衆も不被追付大左衛門御馬の口を引留居再三放せと御意烈敷候へ共堅く取付候内に城内よりぎりぎりと言して城の橋を釣上候て樓門之扉に成候由其時御褒美有之姓名を橋口對馬と被下備前則光之御添指揮領被仰付候趣相見得 但 忠恒公とは無之 惟新公と書記有之然共其頃之古書とは不相見得百五拾余年以後之書付に而弥無誤もの共難申事に御座候

旧伝集

一 川田駿河殿兵道至極妙にしてかけ鳥にても法を唱られ候得者地に落候よし也ある時伊集院幸侃宅江殿様御成被遊駿河とのも御供にて候処に幸侃前以赤かねの飛鳥を庭の木末に打付置殿様江申上候は駿河は飛鳥にても法を唱申候得者おち申候山あの木に有之候鳥を駿河江おとさせ御覽被遊間敷候哉と被申上候得者落させ候得との御意にて御座候間彼鳥を落され候得となり駿河殿法を唱られ候得共鳥にて無之故落不申候に付火の印を被結候と也然者右の飛鳥赤くなり候て流れ落たる由候幸侃謀反の前駿河殿被居候ては成かたく被存候哉饗應いたし毒害いたし候由也

右の旧説にて中務家久を毒殺せしも幸侃秀長の陣屋に人質たるの時謔言しての仕わざなるは疑あらし尤駿河守義朗の死せるは文祿四末七月廿四日とあれば幸侃もはら謀逆の頃に当れり謂ある説なるへし

旧伝集

一 秀吉公九州御動座相済御帰乃節日本に馬鹿か式人有之と被仰候由宅人は先秀吉にて候此遠国まで大軍にて地の利を得ざる敵国江来たること不覺にて候今少し六ツ敷有之候はば兵糧尽候へは得歸る間敷候夫に付宅人は義久にて候遠国まで大軍に參て候秀吉の地の利を得ながら今少しこたへ候はば兵糧につまり敗軍無疑候何れ

是も秀吉か天運にて候と被仰候またその時伊集院右衛門太夫忠棟早く降参にて候日州表の敵衆へ兵糧を送り申たるよしに候

右の旧説御國にも伝へけるにや中井氏の日本逸志にも太閤の西征に本願寺光佐上人を引列られしに西国右未徒の一向宗ともより兵糧を続けたるによりて今に至り薩州領内は彼宗門を禁止せられける趣書のせたりよくよく符合する事にて疑ひもなき説なるへし

(朱)

「朱物徂來か鉾録第十三戦略の段にも左の通見へたり

上云 道將法ノ三ハ即人ノ上ノ事也道ト云ハ令民与上同意可与之略 死可与之生而不畏危也ト云リ先王ノ道ハ云ニ及スタトヒ五事ハ本道ノルイ一向日連ノ宗門ノ宗門ニテモ是ヲ以テ民ヲ一致サセ生死ヲ一ツニサスル事ヲ云テ畢竟人ノ和ノ事ヲ道トタル事也將ト云ハ大将ヨリ部將マテヲ云法トハ兵制編伍懸令陳法戦法ノ類皆法也上下一致シタル上ニモ將アシク法疎カナレハ一致モ一致ノ徳ナキユヘ別々ノ事ノ様ナレトモ畢竟人ノ和ヲワリヲ云タルナリ天ノ時ト地ノ利ニ随ツテ手当モカハリ方略モ品分ルル人ノ和ニ就テモ陣平カ問ヲ用テ楚ノ君臣ヲ離間シ田單カ許ヲ用ヒテ味方ノ士卒ノ先祖ノ墳墓ヲ掘起サセ又秀吉ノ島津攻ニ彼家ハ人ノ和ヲ專ラナル故一向ノ上人ヲ用ヒテ人ノ和ヲ奪ヒタル類ヒ是皆人ノ和ノ上ニ就テナシタル戦略也將ニ各人柄各別ニテ良將ニモ合戦ノ仕様ニ得手不得手アリ法モ其將ノ仕込其家風ノ替リニテ軍法ニ差別アルニヨリテコノ五ツヲ以テ戦略ノ目錄トシテ了簡スル時ハ一切ノ事モルル事ナシ

右やう忠棟など太閤の戦略に乗て兵糧を続けたれとも猶「京勢」續つまりにて今暫く御防戦あらは御勝利の事を見切て忠義を抱き節操を変せざるは新納拙齊にそありき忠棟早く降参して日州より出船して 貫明公に馳歸り和降を勧めまいらせ太閤の陣營に御指出ある筋に肝煎ける情実は其年五月七日 松齡公より本田下野守宛にて仰上られし御書にも粗相見得且忠棟石田治部少輔を同心に

て拙齊へ和降をすめける事は同月廿四日拙齊書中に出たり事長
けれと皆左に写おく時の形勢想ひ知らる

猶々高原「吉田」「若」「可被召退由相心得」「庄内へ追々

以御使御頼之由重覺被仰越候而肝要候彼境も今迄は御味方之由
聞得候彼は無油断御賢慮可目出候拙者彼一通「便罷帰」関白

様へ御指出之由候誠一大事之儀に候へとも急に差寄候て参候間
先以可目出候然し福智三河守歟さては石田「」「西人之間に

一人御家景にめし留候て御指出候やうに御調儀專一候乍不申此
度御指出之儀誠に一大事之儀候条能々御立願な候て可目出

候
乍重言御指出なき「深々敷御立願肝要候急度令路入候仍忠棟
之事従日州出船之由此元到来候今程者其元へ堪忍候と哉」「居候

歟舟預度候
入来院之事題目之在所にて候之条典既差籠候て堅御番可然候由
從金吾被中越候尤之儀候条早速從御前被仰渡典應差籠せ候事不可

有御油断候
「真幸之儀者日州菱刈通達之境に候間京衆細々罷通候彼衆物語様
子承得候分も家景手強差答候はは無事之調儀之真旨可事」「相聞

得候間渾分手強御分別肝要候
「邪答院之事堅固に持答候する由從金吾承候乍去」所之衆迄にて
は諸事罷成間敷条固者伊集院肥前守被仰付被召籠候へかし江成談

合可被差答之由候之問是も直に被仰付候而可目出候
「飯野之事随分手強可持答覚悟に候乍去当所之儀者城惠候条自然

埋草なと仁候て取寄候はは則時に可相廻候左候ては御家景も可及
「一大事候之条此元差答候する内々諸篇急速之御談合聞」

「此度日州於御安堵者官崎之事霧島へ可為御拜進由御立願可目出
候さては高原之儀も同前に可有御寄附御折念肝要候存分之儀共候

之条申事候此等之段御披露所仰候恐々謹言
朱書

「天正
十五」五月七日
義珍御判

朱書
「御家老」

本山下野守殿

朱書
「親貞」

猶々籠城之儀被聞召付庄内近辺迄も被佐惣御加勢之御企無比類
御心さし申ても申ても尽しかたう候京勢頼つまりに成長陣成間

敷雖見及候上意背かたき故に一和に可罷成候誠口惜次第候已上
如承候至大口関白殿御馬被出候先勢者曾木天堂尾に今日「廿四」着

陣候洪水故に候歟川を未渡候然処に京衆石田治部少輔殿忠棟以同
心無事之懸引從菱刈本城衆候分申念尺防戦一篇に相定候之処自

太守様者新納右衛門佐殿從一式庫様者伊東右衛門佐殿以御異見度
々に及仰候趣者関白殿可罷出之由候御而殿共に御差出之上者弓

箭者不可然之由被思召候其故者御料仁様又一郎殿様為質人指出
御申候慮外之扱共仕候ては即御敵たるべく被思召候すると被仰出

候条不及申出頭に相定候下城之分け申達候万吉恐々謹言
朱書
「天正十五年」五月廿五日

滝間越後守殿

土持大膳亮殿

三階堂阿波守殿

御返報

持明様御上落日記

「天正拾五年九州之防戦成立候事 関白様大友家之為加勢大車を
引率し関之戸ヲ被成渡因茲豊肥筑之士率京勢に悉成合候故而北表

迄 関白様被成乱入然者薩隅日之衆至日肥而口雖勵戦功無其甲斐
日州之捨諸城被引退されは薩摩守殿歴然之雖御好一言之無御理京

勢に被成傾間不及是非太守様五月六日鹿兒島を被成御打立同八日
関白様御陣所川内太平寺へ被成御差出云々

右やう忠棟のみにあらず歴々の薩州家さへ太守公に一言の御伺

もなく京勢に傾き却て案内せられしも前以てより忠棟同やう内通して光佐か門徒に傾きをられしならん愚聞ことあり去る享和の前後歟此一向宗御禁止の発起を起されし時き久保左平次でふ人よろつ写集たるものに太閤入のむかし出水長島などの奴原此宗門にて一箭も支ることなく京勢を案内して川内まで引入れたる事のみ相知れ余はさだかに知れざりしとか聞およへり決して宗門方にはその事詳なるへし

慈眼公御筆にも肥後表者出水より早く使を出義虎太閤へ被申入何云子細もなく川内迄押入せられ無正驍候故 竜伯公被成落髪太閤公御陣へ御参とあれば前年九月河上舟伴子共出家などより御家系の中に京かたからくり付候人多く笑止の由を注進せし赴にも合へれば幸侃同やう一向宗にて内応せしは疑ひあらし重て猶糺すへきなり斯く御家系共歴々内応せる衆多ければ 武庫様金吾様忠元など前文の通に忠策を廻されしも皆空しく水に成たると見得たり其時三州の人々 竜伯公の御髪を削て川内に出給へるを聞て涕泣せざるはなしと現在その形勢を親しく見聞せし長谷場越前入道か勘游集にもかき侍れば 竜伯公御兄弟をはしめ奉り其時の憤怨何にかは帰すへき皆是悉く忠棟と忠辰か宗門に淫惑して君臣の大義を忘れ 太閤の光佐をつれるに傾き靡けるに由りての禍害なるにや彼而賊は其家を召亮さるのみならず永く一向宗を禁止せられいよいよ日新公の御實明をあふかれしにあらずや然あれは彼一向宗に数寄の小座敷など詠おかれしは則以呂波の御歌にもろもの国や所の政道は人にまづよく教へ習はせと詠せられし御ころはへにて御禁止のいと辛かりし箇条を誰も最易く人々心に能々おぼへ居て御法度を犯す罪人の国や所に多く出来なん事の無かりしやうにとの御戒めに詠しおかれし御歌にもあるへし但し右の古日記薩摩守とあるをば 慈眼公は義虎と書き給へとも義虎は三ヶ年まへ天正十二年乙酉七月廿五日に卒して其子忠辰の時に当れり御朱印江泉又太郎とあれとも山野に遁れる古棟札などには薩摩守とを見ゆれ忠辰死せる年にて推せば太閤入の年は三十五歳に當りて

いよいよ疑ふべくあらず偶然の御誤なるへしよりて併せて恐なからも弁するなり

一 出水脇本浜の前に樫乃浦と歟いふ所にちと登り上れる小岡ありてそこにむかし一向宗寺の健居ける跡とて今もなほ礎など遺りけりとそ左ありてまた脇本にをれる土人早水清助でふものの義父が時き時き其家に伝へもてる本尊を先年収公せられし事もあるとなんその仏などいと年経たる古仏にて近世の物にあらざりしと聞たり此等の事にて薩摩州家の出水あたりを知られたるむかしは一向宗の行はれ居たる証拠の援にもなるへし重て糺すへきなり

旧伝集

一 重言ながら太閤様江御率公何様にも存候処此節之心掛無に罷成遅陣之事故紀明之時如何様成科に茂当り候半と存計に候 竜伯様無御存事に逆心之者どもより仕くづさるる迄に候逆心を企候者之事後は頭然可申候事

五月五日

義弘

枕枕

参

右は文禄元年壬辰五月三日高麗釜山浦に着せ給ひてはしめて川上参河守忠智入道に賜ひし御書の抜書也逆心を企候ものと仰せられしは幸侃なるは明らけし御憤怒の程御書辭に溢れ見得たり

一 旧典抜書と歟云へる物にて見たるやうおほへし事ありよくはおほへされとも申侍らん慶長七年 慈眼公 内府公と御和睦ありて十月始めて大坂に上着ましまし十二月二十八日御目見も済せられ翌八年正月御暇にて下らせ給ふ此御滞坂の時き本願寺より使僧を差上たれとも御家は彼宗門御禁止とて欺御受なかりし事をも書たるもの見おほへたる哉にもあれとも暗に記かたし重て考へし

一 毎朝の御条書に子細有之とのみ書せられむかしより子細を糺されざる事愚今かうがへるにそも幸侃か反状を始め申上しは鎌田政近比志嶋国貞のやう伊勢貞昌書おかるれとも天正十五年亥

三月 金吾様大海和尚に取つき仰上られし事をは生害記に載せられたるを始めなんあるならめそれより慶長八年卯八月幸侃か子源次郎忠貞を滅さるまで十七ヶ年の間は第一幸侃等が陰謀を悪み給ふ故にこそ一向宗も禁止せられしと見ゆれとも其御趣意を彼等洩問ては却て事を生ぜんとの御賢慮にて御趣意の所は極く隱密にせられて只御先祖以来の御禁止とて表向は仰山され内実は彼宗門に陥り諸士多く幸侃心底に傾き陥らん事を別して御念つかひましまし忠義にて二心なき親密なる諸臣に仰含められ御取締ありし事ならん然ありて彼忠真一族を討滅されし以後はあからさまに仰出され禁止せられても禍を生ずる程の敵は絶へたる事なれとも十七ヶ年許極く隱密にせられし深き御趣意因循して世換り人亡びて漸く御趣意の程もつる世に隱没したるにはあらざる歟左ありて宝永二年乙酉の夏 淨国公御家督後始めて御暇給はらせられ九月朔日御着城ありて其年の霜月十五日御袖判の御条書に斯くなん見当りぬ

一 兼日從 公義被仰渡置候御条目之趣且又時々被仰出候御法度之旨堅固可相守之就中幾里支丹宗之儀御太禁之事候条自然隱居儀聞付候はは早速可申出候一向宗之儀者子細有之当家代々令禁止之条不可有違犯事

右やう仰渡されしぞ今いふ毎朝御条書の始めならめ愚嘗て聞けり此御条書の起草は御家老島津帶刀忠雄勤めさせられしと歟聞およへり此御下国の御供にしあれば謂れある説にや重て博古に訪へし此起草せられし時き子細は知れ居つれとも事長ければ約めてかかれし歟將た知れすしての事歟其詳なるを聞かず然はあれとその時代の史官いかさま伝へられし事のありけるにや此冊の開端に採載せおけるやう毎朝御条書に子細有之御禁止と御座候は幸侃故にて御座候と心ある人概記しおけるならん愚今斯く考へ言ふにいと徴とするに足れば彼是と写し集めて意にうかふ節々聊か演述し侍るなり博古の君子取て研究せは幸甚なり
一 三才図会を按に御本願寺開山親鸞聖人姓は藤原氏皇太后宮大進

有範か子にて小字は若松丸名を範実といふ六歳にして孤となり伯父若狭守範綱か養子と為り幼より顯敏にして濟度の志あり養和元年九歳にして叡山の座主慈鎮和尚の室に清蓮院に入り剃髮して少納言君といひ悉く台教の旨を究め建仁元年二十九才にして源空上人か教弘める専修念仏の法を信じて源空を師とし事へ名を神空と改め同三年四月九日六角堂觀音の靈夢を承て行者宿報設女犯。我成玉女身被犯。一生之間能莊嚴。臨終引導生極樂と云ふ四句を授られしと夢みて奇とし語らす是より先きに九条関白兼実公も源空を信せられ入道して月輪にまじまし世に月論神閑と申すは是なりある時念仏行者に僧俗の差ひあり哉なし哉と問はれしに源空上人対へていへらく一切善惡凡夫得生と申せば何ぞ聖凡の差別あらんと神閑悦ひ愁あらは我女を上人の弟子に択らひ妻はさしめ末世の惑ひを解んと仰たりければ源空諾して神空をして在家一同の宗旨を立しむ神空固辭して從はず源空申けるは汝觀音の靈夢あるに非ずや我にも其告ありと共に語れば一字も異ならず竟に元久二年神空年三十三の時き神閑の女玉日姫とて時年十八成けると取合ひ神閑の花園なる五条西洞院に居て名を善心善信と改しめそれより念仏問盛んに行われ安閑坊作蓮坊など云へる輩貴賤男女群集し剩へ宮女の中より受戒して尼となるものありて土御門帝の敕聞に達し大に逆鱗ましまし善心三十五歳に成れる承元元年二月住蓮安樂の二坊か首を斬られ源空は土佐に善心は越後に謫せられ五ヶ年めに當る建暦元年勅免あれとも善心なほその法を弘めんか為に在留して諸国を巡歴し越後に五年下野に三年常陸に十年相模に七年又名を親鸞と改めて從ひまなふもの勝て計へからず高田の専修寺を創め其外二十四輩と称して校葉日々閑東に盛へ貞永元年洛に帰り弘長二年十一月二十八日九十にして遷化とあり鎌倉にて北条時氏傳覽の僧に一切経を校合せしむる時き親鸞も其一に加りて諸經要文教行信証愚秀抄文類聚抄和讃正信偈などいふ書を著はして僧俗の勸行を導かしむ四男三女あれとも末女の如信上人法義に慨ふとて法をこれに伝ふ第二世此なり奥州に在て盛んに一宗を弘む三世覺如

年二十一にして開祖の跡を見んとて正応三年関東北国を巡り行状記てふを著す世に御伝書といふは是とかや五世純如にて博識秀才の名あり越中備前郡に瑞泉寺てふを建て周円上人の号を賜へると也八世蓮如また博學多識にして東北の諸州を廻り門徒の安心を改め処々に道場を設け和字の書翰もて愚昧の人を知り易らしむ後に集めて五卷とし世に御文といふは是なりとそ寛正六年山門の僧等に憤られ大谷の道場を破らる時潜に開山の影像を大津の近松寺に移す文明三年北陸に赴き越前の吉崎に一字を建居ること五年金沢城主富樫政親てふは日ころ高田派を信せしもの也下間安芸恨みて伐ん事を謀けるに政親聞て急に吉崎を攻む蓮如怒てもと安芸が巧とて安芸を追放し文明七年八月若州小浜に奔る政親勝に乗り国中の門徒を滅んとして互ひに戦争すること十四年長享二年政親自害して一族亡ひたれば富樫が領地は皆本願寺より知行せり大正三年信長取蓮如若狭より丹波を経て摂乃富田に暫留りまた河内の出口村に滞留する二年近江の金森道西等力をあはせて文明十年山科の坊舎を建て延徳元年隠居し明応五年森ノ御坊を大坂に建つ同八年八十五にして教す此より宗門一統し日を逐ひ盛へて中興と云へり十世証如十歳にして嗣家老下間筑后守及びその弟民部北国の門徒を誘らひ恣に諸所を押領す天文元年江州佐々木六角輝正定頼法華宗の徒類と山科の坊舎を焼亡す時証如十七にて摂乃野田に敗れ走る敵進撃して危しあたりの百姓等その宗門にて防ぎ戦ひける間に証如は小船に乗て進れける時戦ひ死する百姓二十一人自筆の感状を与へて其より毎年八月九日には法華事あるとぞ是より先き文龜元年後柏原帝踐祚しまして二十ヶ年を過れとも応仁の兵乱より朝廷衰へ大札を行はせらる程の料乏かりけるに西三条前内府の執奏にて証如僅に六歳の時御即位料を調進して大永元年三月大札を行いせられ又天文五年後奈良帝の御即位料をは大内義隆か調進せし不足をも補ひ進らせし兩度の忠功は天下皆感賞せしかや十一世顯如上人即名は光佐にて証如か子なり証如短命いたる感賞をも蒙らす天文二十三年辻化して翌弘治元年光佐十四の時後

奈良帝の奉書を拝す同二年正月万里小路秀房を勅使にて二品親工号の宣下勅書を賜ひ永録二年十二月正親町帝加へて御門跡の号を賜ふ親王の号は此より永例となれると也同三年十月本願寺僧徒十ヶ寺には院家号を勅許となり

翰海集云日州真幸の住人北原方家中の者其逆心を相構て一向宗と云へる惡党類に罷成り仏神三宝を違背して此宗に不成者を討果んとせし程に各是を聞付て日向に走る人も有り疏麻に落去る者も有り方々へ逃散す此刻を見及て北原方の悍者に白坂美濃守とて踊地頭有けるか宗論故北原方に心替りそ仕る囃喉郡の地頭御番衆を被差籠御奉公を被申白坂の一党者皆以同心也去間栗野吉田馬岡田吉松役所役所に御番兵を申請て我も我もと忠貞を被抽然処に北原方の被官者同名伊勢守同名新介横河表城を取構へ奉対守護方被致弓箭依其無余儀軍兵被差向麓村を取破り板城戸に攻入りて功岸に詰上り城主北原伊勢守同名新介是を見て兼田定めし心ざし輪廻すまじとて賢人二君に不仕と大音揚て名乗りつつ今を限の事なればあな無難や妻子共何処の国の惡党の手に懸り果んより逆縁なから我々か手に懸て有ならは二世の本願たるへしと手に手を取りて差殺し切捨て念仏を廻向して茶屋の口に切て出て寄手の武者に渡り合ひ手柄を碎きて合戦す鹿兒島の住人進出たる兵物は本田刑部少輔相並びて滝間美濃守と名乗て太刀下に分捕す各も疵を蒙り退きぬ続く兵物指合て敵余多打留て即城を攻落し数百人の討頭を御大将の懸御白勝吐氣武送も過ぬれば諸軍兵の齊者申計もなかりけり斯る処に貴久様と義久様の御證には菱刈方の当時忠勤を被致彼の横河を被下て永くの率公を御頼有べしと重々御恩賞を被宛行処也

但翰海集は長谷場越前守宗純入道眠純が慶長八年十五八歳にして著述する所の古書なり御当家と宗門との御合戦は見始なるか

右の事を季安按るに永録四年北原氏十三世又八郎兼守病死せし

時き兼守は従祖叔父北原民部少輔兼理その嗣となりて一向宗を信ける時の一乱にて伊勢介父子が籠城して死せるは同五年六月三日の事なれば弘治永録の頃光佐段々天朝の寵遇を得て親王号や御門跡の号など勅許ありし事とも聞及びて民部少も此宗門に傾き入れるなるへし因て考援の為に此に写し入おくなり

古老夜話にいつ 日下部景衡著

○真宗一揆の時小栗又市帰参する又市胸を源君御取被成其方儀宗旨可替哉無左候に於ては即座に突殺なりとて御脇差をぬかせられ又市少しも不驚御手討に逢候とも宗旨替へ申儀者難成のよし申上る其時源君おのれか様也ものはころしても無益とて御突はなし被成候其時又市申上けるは只今宗旨を替へ法華宗に罷成候源君御手討にても難成旨申上るにたに今になり法華宗に可成とは何如と被仰ければ上に御手討に被可成ほどに宗旨替へよと御意にては命無御座候とも難成御助被遊候御札に即法華宗に罷成り候なり

一 落穂集云永録六年九月元康公召洛藤十郎に被仰付三州佐々木の辺岩を構へさせられ候御人夫の兵糧不足なるに依て同郡上宮寺領の米を押取て宮治か館へはこひ入れ普請人足の飯料とす時に上宮寺の僧徒等大きに怒て國中の一宗を招き集て評議致しけるは開山上人以来当国三ヶ寺ナケ寺勸修院家ノ第一三州土呂家ノ本宗寺アリ又開山直第六老僧ノ中三州如意寺玄海願願寺等の儀者格別の訳を以守護不入の地と被定置候処今度宮治か所行非道の至り且は宗門の恥辱なれば其通にては難差置旨相談一決して野寺針崎の兩寺を初め諸寺の惡僧共寄集申旨兵杖を帶し不意に宮治か館へ押入るの間宮治か家人共少々出合是を防といへ共惡僧等大勢乱入して終に件を酒井雅樂頭へ申達るに付正親其次第を申上るによつて元康公には腹立不糾して雅樂頭に命せられ上宮寺内の惡僧の帳本たる僧徒を斬罪に被仰付依之國中の一向宗の僧徒并俗民那共に至まで是を憤て一戦を企て今川氏真へ志を通する因侍をかたらひ兵を揚んとす 御当家御譜代衆の中にも宗門

信仰の輩には一揆の方へと罷成御敵對申族も有之しかのみならず吉良の義照御敵對に付御妹譽荒川中斐守殿にも義照に同意有其外桜井の松平監物上野の酒井將監太草の松平七郎なども一揆に組し其外の御譜代侍衆宗門方人とし野寺佐々木寺内に精籠り御敵對申輩凡三百余人に及へり其頃にも編殿藤太郎は今川氏真へ一味して三州上の郷の城に取籠けるを同国竹谷の城主松平備後守清善儀は藤太郎と同胞異姓たりといへとも日頃隨一の御味方たるに依て早速竹谷より兵を發して上の郷の城を攻撃処に初日には清善勝利を得て城兵七十余人を討取次の日に至り一戦に利を失ひ寄手余多討れたる由岡崎へ聞へければ元康公早速御出勢被成名取山に御陣なされ伊賀の忍の者を以て上の郷の城を襲はしめ給ふによつて城將鶴殿藤太郎同藤助を始悉く討死して城終に陥るに依て岡崎へ御馬を被為入一今年表秋御名乗字を御改被成家康公と奉申るなり

一 同年十月廿五日針崎の逆徒等上和田の城を攻るよし岡崎へ注進ありければ則御出勢被遊上和田表へ御進發候処上村庄右衛門一揆方の勇兵蜂屋半之丞と鐘を合せ挑戦ひ蜂屋少し退候処に水野藤十郎重忠詞を懸て蜂屋を追ふ蜂屋とつて返し忠重と戦ふ手時家康公重忠を御援の為に御自身蜂屋に御向ひ被成を見て蜂屋恐れ奉りて敗亡仕るを松平金助進て是を討んとす蜂屋又返し家康公の御事は御主君なれば仕あれおのれらを何とおふべき候とて鐘を以て金助と迫合終に金助を突倒し蜂屋乘懸て首を取らんとす家康公御覽被遊又蜂屋に御懸り被成候へは蜂屋金助を捨て逃去其後一揆退散につき御馬を被為入

一 同年未だ岡崎を御出勢被遊大久保一党をして針崎の一揆を拒き候様にと被仰付御自身には小豆城によらせ給ふ処に一揆の兵岡太平より勢を引て歸り去る御味方の先勢坂中にて行逢一戦におよひ一揆勢の中佐橋甚五郎を初數輩を御討取御勝利を被得岡崎へ御帰陣被成也

一 永録七年正月逆徒之輩と小豆城におゐて御一戦の刻逆徒の方よりの鉄砲御馬の手綱に中るといへとも御恙なし家康公御腹立被

遊敵軍の内に御馬を被乗入候に付て逆徒等悉く敗北仕候と也同月十一日針崎野寺の賊徒等上和田の岩井岡の城へ取結候に付大久保一党拒て城代大久保五郎左衛門同七郎右衛門兩人共統を蒙り籠城危難の旨注進申候に付則御馬を被出其節逆徒方の鉄砲御鎧に中るといへとも御恙なし此時中根善藏逆徒方渡部半藏と鎧を合互に鎧を捨太刀打となり勝負不決時に鶴殿十郎三郎渡部を討んと走り寄処半藏が父渡辺源五左衛門半藏を援ひ来て終に鶴殿を討取然る処に川澄大助源五左衛門に打てかかる源五左衛門は川澄とは取合す家康公を見懸奉て突て懸候処切の内藤甚四郎弓を以て源五左衛門か両股を討貫候に依て則時に倒れ其手重くして終に死す主君の御為に伯父を討つ旨御感賞有り諸人は是を嘗けるとなり爰に逆徒のうち夏目次郎左衛門儀は其身の武功も有之親族多き者にて已か知行所の内に屋敷地の如くなる要害を構へ其内に住居仕り近辺たるによつて松平主殿助と迫合罷在候処或時主殿助手勢を率して不意に押懸木戸を討破り火急に押入ければ夏目大に周章して守防の手段を失ひ妻子を召連土藏のうちへ取籠め候を主殿人数を以きひしく取囲み其赴を岡崎へ御注進申上下知次第に夏目を成敗可仕旨相伺候処 家康公御聞被遊主殿助御忠節之段は御感被遊但し夏目儀土藏の内に逃入罷在を殺害とあるは鶴殿の内の鳥を殺すも同然の儀なれば其儘助命致し差置候様にと被仰出ければ主殿承はられ其始一向打殺候て言上可致を余りに御慈悲過たる仰かなとは被存候へ共既に御赦免と有上は是非に不及とて人数を引取ければ夏日は藏の内より罷出岡崎表方を伏拝み扱々かかる御慈悲の深き御主人を疎に奉存御敵対申上たる悔しさよと申て泪を流し其日より宗門の勤として持仏堂へ参候ては何とそ屋形の御用に立て相果候やうに御守り有之給り候へと高声に申けると也然るに其意願のとなり遠州味方ヶ原御一戦の刻御身替立候も同前の御奉公を申上其場におひて討死を遂ると也扱亦一揆静謐の取持に掛りたる面々誰かれと申中にも其最初は峰屋半之充なり子細は半之充儀大久保治右衛門同新八郎兩人に出合て申やうことを初其外の面々に於ても何

を一つ殿様へ対し奉り申恨も無之処普沼か理不尽の致方其上御家老酒井殿の片落なる被申付様と有儀より事起りて御譜代の御主人に對し逆心者の名を蒙り候段今更後悔千万とは申なから何とぞ可罷成儀にも候はは土井針崎野寺の三ヶ寺共に以前の如く御建立被遊今度御敵対申上候面々之儀をも何事なく何れも御免被遊候様に御座有度旨申に付兩人返答被申候者被申聞趣尤に候へとも左様に何かし願ひ事有之候ては中々御聞届可有之とは不存候へとも先承り候趣をは内談いたし可申とて兩人岡崎の御城へ罷上り蜂屋か申旨御聞に達候処大縣御合点被遊候へとも三ヶ寺を其儘建立被成候儀者御同心不被遊三ヶ寺共に被却被成悉く掃地に被遊并逆徒の中に於ても其罪の輕重を御正し有て夫々に御沙汰可被遊との仰に付兩人も免角の儀を申上る儀不罷成処に大久保淨玄儀も右兩人と一所に御前に罷出傍に罷在て右の仰を蒙り御前に進出只今の御意之趣も御尤には候へとも左やうに被仰候ては事の埒明兼可申候間權那共願中通三ヶ寺をも先御建立被遊此度御敵対申上たる者共之儀も其罪の輕重によらず一同に御恩免被遊無事を御調有て片時も早く敵國へ御免向被成御手の広かり候様に被遊御尤に候御手さへ広狩候へは何やうにも被遊よき事にて候拙者儀此間の騒動に親族共余多逆徒の奴原にうたせ其恨少なからすといへとも殿様の御為には替へ可申やうも無御座と申上るを御聞被遊其方老人の思ひ寄て中儀を御同心被成間敷様も無之間如何様とも可致やうに其方共取計ひ候やうにとの仰に付事済追て其趣を被申渡候へは御敵対申たる侍中泰と申て悦合候と也

依之吉良殿荒川殿儀も居城を出降参あられ候へとも御赦免不被遊候故上方へ被登吉良殿は江州の佐々木承禎を頼おはしまし候か芥川に於て打死致され候となり荒川殿儀は御妹譽とは申なから而度までの逆心なれば終に御免無之是も河内の國にて病死致され候と也上野の城主酒井將監事は其身御家の一老職とある申妻もなく一揆と同じく御敵對被申候に付別て御にくみ深く終には御佐言不叶申候に付今川氏真を頼み駿府へ罷越御親族の中にては松平監物計

を御敵免被仰付候と也其後今度御敵對申たる侍中の内にて名有面々百人余りを岡崎の御城へ被為召一同に御目見被仰付其節御直に被仰聞候は今度其方共儀は三ヶ寺の荷担いたし御敵對申段不届之至りと被忠召候然共能々御思慮被遊御覽被成候に人間は尊きも賤きも今世は仮りの宿りにして来世と有は永き儀なり然は我等儀を仮の主人とおもひ弥陀如来の事をは永き世の主人と存るに付ては宗門之儀を大切と存も一理有之儀と被思召に付御敵免被成下上におひて毛頭も御心に留させられず間面之儀も今度敵對の儀を被打忘以前に心に立歸り少も隔心なく御奉公を被相属尤に被思召候間此趣を其方共へ一昧したる末々の者共へも申聞せ何れも致安増候やうに可仕旨被仰渡ければ各謹て御意を承りたる面々老若共に感涙に堪兼 御前を罷立候となり

右被仰渡儀は其時代の儀を書たる書物のうちにては見当不申候へとも永井日向守殿手前若き時分古き仁の物語にも聞置候と有之淺野因幡守殿へ難談あられ候旨承候に付実儀にても可有御座哉と存書のせ申処なり

一 右永祿の頃薩州山崎久富木村北原西の間に西国寺と云一向寺ありしとて于今阿弥陀堂あるとそ其嚮口の銘に永祿二年大村郷北原村西福寺御堂前名某と歟見へるとなん所の人伝けるは此等は一向宗にて淡谷家没落の後御取除との赴なり季世按に淡谷没落とは永祿九年正月河内守良重か時其妻は薩州家義虎の姉にて良重日比狩を好んで内に居らざる人として妻の爲めに弑せられ男子なかりければ同年二月より入来院重豊祢答院を支配せられしか共院内の人々服せず守護方に申上て御手に入れると見へれば其時没落せしは明らかし然あれは永祿の頃には祢答院にも此宗の寺ありしならん重て糺すへし

右の事其季安按るに弘長二年親鸞辻化より永祿六年までは三百年に余り三州には直弟の老僧共か開きし寺ありて旦那も盛へ居て 神祖御譜代の歴々さへ宗門信仰の士は御敵對いたし五度におよび 御出馬二度は鉄炮まで打掛たる一揆なれとも乱世一方

ならぬ敵を受させ給ふ折柄なれば博く衆和を得けるを第一の御賢慮にて右やう是非なく懷せられしならん左ありて此一揆も我が日新公御在世の時なれば 公の頃よりむかしは山門または富樫との乱あるはまさしく天文元年公の御時代彼等法華宗との戦ひ近くは北原民部が宗論遠くは此三河の宗門一揆など皆聞伝へられ此等を国に入れるは実に亂階危難と堅く寺向宗も法華宗も禁止せられしならん是皆光佐時代に當れば此に寫入おくなり

元龜元年三好笑岩が一族摂州に起て信長を討んとす是より先き信長本願寺を滅さんとせし事あり故に光佐も亦た三好に應ず時き江州にては朝倉義景淺井長政山門の衆徒らも皆信長に敵す天正元年八月信長義景と長政を殺す

季安聞くことあり朝倉義景より伊集院忠棟に書簡を贈りて謀を通せし事ありてまさしく其古筆の状をば小浜彦九郎持をれると歟嘗て頼たると歟小浜氏語けるとの咄を聞けり義景も光佐と一味歟に見へれば忠棟か上方に外交せしも天正元年以前より事は明らけし一向宗と為りしも久じき事ならん

また野田福島に向て光佐及び三好細川を攻ければ光佐木津難波城を築きて信長の太軍と戦ひ数年決せず信長和を乞へとも光佐聞かずよりて信長より内奏におよひければ近衛前久公なと旨旨を伝へて天正八年四月和睦を成し紀州鷲森に退き去らしむ

朱

「此時の事にや天正七年の秋 信長より前久公を媒として我 貫明公にも書問せられしを翌八年の正月 前久公その臣伊勢内幡守貞知に齎らして至らしむ本願寺の事も見たり

雖未相通令啓候仍大友方と鋒楯事不可然所詮和合尤候歟將又此向事本願寺令緩急之条誅討之儀申付候然大坂可退散由依懇望令敵免到紀州雜質罷退候畿内無殘所屬靜謐候來年於芸州可出馬候其刻別而御入魂對天下可為大忠候尚近衛殿可被仰候者聞筆候恐々謹言

八月十二日

信長

嶋津修理太夫殿御宿所

右の書に本願寺紀州雜質に退去せし事のあるにて前編に書おける天正十三年十月太和大納言秀長より紀州雜質の人松本刑部に謀て其同族松本和泉を伊集院幸侃へ差下し貫明公に速に和降を勧させけると云一件且御一家の内より京方からくり付の衆行之と云上井日記の一件又太閤西征に本願寺光佐を召列来ければ幸侃など兵糧を続けたると云 旧伝集載逸志の誤などと考合すれば秀長疾くに光佐と謀りて雜質の人を幸侃に使つかはし門徒の親しみをもち内応させつらんには疑ひなき道筋とおほゆれば此に書入おく前編と併せよみて玩味すへし

斯て同十年信長また大軍を遣してこれを攻め光佐既に力尽きて進退きはまれる頃しも六月三日明智光秀かゝるに信長自殺せられし飛脚来て寄手皆返散してければ幸にして其危難を免かれ同十五年太閤秀吉公に属して西征に従行し其年泉州貝塚に移りまた攝の天満に住す同十九年太閤の命にて西六条に御堂を建て八月五日移徙す今いふ西本願寺是なり寺領は備四十石と見へたり翌文禄元年十一月二十四日迂化年五十と云へり光佐の妻は西三条殿の女にて細川晴元の養女と為り光佐に嫁す実は晴元の室および武田信玄の室なとの妹なりとぞ三男あり嫡男は十二世教如なり次きは佐超といふ西六条御堂の南にある興正寺の開基なり次き光昭といふ越前本行寺に住す母尼教如を悦はす退けて末子光昭を立ん事を秀吉公に訴へ文禄二年台許を得て教如を境内の裏に隠居させければ門徒とも光昭を表といひ教如を裏といふて出仕することの却て表より勝りけると也母尼尚忌みて境内を逐ふ然あるに慶長七年神祖恩遇を教如に加へられ老臣等に教如が再住を謀られければ本多正信彼宗のに盛へるを見て東西に分け二本寺に成さんと申上られ東六条に新堂を建させらる今の東本願寺是れなり亦た三品法親王門跡大僧上を勅許せられしことも皆西本願寺の如しといへり。

一 近ごろ文化八年親鸞上人五百五拾回に当れる時き大師号を願はれしとて左の通京尹より仰渡されし

東西 本願寺

興正寺

仏光寺

専修寺

其外

開祖還回到付大師号之儀被相願右範真善心は優婆塞同様之事に付大師号被相願候義は恐入事に候依之不被及御沙汰候一跡源空上人勘氣被請候身分に而御僧と者難申事に候差留候に者無之候得共親鸞上人と被唱事還慮いたし可然旨被仰出候

九月

酒井讃岐守中渡し

右の仰渡まことに氣味よく感じ侍る事共なり妻帯肉食など俗躰同やうの身持にて上人と唱られ候事何事ぞや況や大師号実もつて恐入らるとの御事御尤の至なり且差留にては無之候へともとの御詞つつしんで慰按をめぐらしみるに彼宗門は 神祖御譜代御由緒柄の面々迄も信仰すれば忠節を忘れて君臣の義を背き既に一揆に覺して屢敵対し奉て神祖みづから五度におよび御出馬あらせられ其うち二度は鉄炮にまで中らせられ戦国の砌にて敵國へ御出馬の妨なれば是非なく御赦免しおかれいと手強き勢ひは右の落穂集のみならず島原一揆の時板倉内膳重昌の上使に撰はれ発向せられけるの日柳生但馬守宗矩の申上られしにも宗門の一揆ほと死を一途に揃へてむつかしき物はなしと藩翰譜にも見へるやう中々手隙を取らせられ信長の時には拾一ヶ年におよひ敵対すれとも信長の武威でさへ攻めぐまれ内奏して宜下のうへこそ和降しつれ然あれと終に信長却て明智に弑せられ太閤の時結句その西征に列られ彼宗門の党を竊に誘らひ大軍の餉糧を募り続させらるの類何れの名将も差留られぬ勢ひ是非なきか故に斯くは仰出されしならんしかのみならず妻帯して家を立るの道は本より五倫の聖教にして何ぞ優婆塞表俗を仮られすとも神祖の時より程朱の学ますます行はれ是に過ぎたる法あるへからず就中 後光明帝御幼年の時より識見しましたして私学は牀の

みにて用なきやうなれば天子諸候は第一人民の上に用あるの学こそよけれと始て程朱の新講を聞せられしと小説にも出たれば只国家に彼宗はと無用の物は無けれとも実に今更差留られ難き勢ひおもひ知らるる事なり然あるに我薩隅日はかの永録中北原伊勢などか横川に橋籠て御敵対せし頃より日新公御英断ありて禁止させられ御代々御旧政に遵はせられ彼宗徒共発興する事を得せしめ給ふは誠以て難有美政にて肥後の藪先生等が感賞せしと云ふも実々然あるべき事なるへしよて思ひ出すまにまに斯く写集め聊か筆に任せ愚説を附て旧冬呈する一冊の補遺と名つけて拝呈すること爾り

乙未正月二十八日

伊地知季安拜

竹下君足下

附言

文化九年新納時升江戸におゐて尾張侍統家田多聞か麹町貝坂の屋宅を訪ひしに折節数多の門人集会の席也暫有て公儀御徒白附高倉助右衛門といへる人退城より訪来り一紙を出し先生に示し今般親鸞上人五百五拾回忌により門徒中より大師号を願ひしに今日箇様の仰事あり珍敷事故写来るといふ其文左の通

聖護院宮江

親鸞事俗鉢優婆塞向様に付上人号茂憚入候大師号不罷成候

右一紙各披見し先生初め誠に心口能事と深賛し且門徒共不入事を願出大に恥を添たりと各一笑しぬ其時先生薩州には古来より門徒宗禁制之由聞及ふ果して然るやと問れし故薩州者邪蘇宗同様に禁制にて宗門方といへる旨響ありて密々に其法に入る者を撫察し罪に行ふよしを詔りたれば一座一同に感服し薩州は先君に目の明たる人有之早く邪教を禁し誠に善政也今より後天下に害をなす物は此宗門にありと先生も深く賛嘆せられたり余固にても心ある人は如斯此方の禁制を賛美する事故斯に記す

時升按するに高倉写来る之仰渡者源文酒井候之中渡しより文面甚易簡なり高倉源文を略し大意を抄し来るやおもふに老中の仰

渡者高倉の文面にて酒井候門徒に命する様潤色を加へ申渡せしにやあるべき又云京都の四明散人迂夫論を著し國政の要務を論す其内親鸞氏之教天下に害ある事を詳に論せり七日本書を抄して附録に備ふべし今爰に略す

時升

有馬立に付

一向宗寺領衆自力立

中村丹波守 津田八千右衛門 小者 源右衛門 國田市右衛門 内藤右衛門

合三人

右者寅の正月十六日より二月八日罷帰候

但壹人に付廿三日つつ

合六拾九日

内田大学介 國田市右衛門 池田八千左衛門 久米方左衛門

右四人

右は寅の正月十六日より二月十八日に罷帰候

但壹人に付三拾三日つつ

合日数百三十二日

西田市左衛門 右小者 源兵衛尉

右式人

右者正月十六日より三月八日迄但壹人に付五拾三日つつ

合百六日

合日数三百七日

寛永十八年

二月十二日

右之差出は私先祖伊地知季右衛門加久藤移地頭之節寛永十五年寅正月嶋原御加勢立有之手勢三拾余人并加久藤衆主従九拾五人其外右鉢寺領之自力立迄都合百五拾人計召列參陣為仕時分之日數差出にて右

之一向宗寺領衆と有之は寛永十二亥年一向宗御改被成候御本尊出候士衆は知行屋敷被召上候て寺領にて候も大口十二宮伊予文書に有之寺領にて可有御座候然者亥年より寅正月迄四年に相掛御勘氣御赦免

無之と相見得申候夫ゆへ自力立為仕に可有御座右寺領之功にて御赦免被仰付候哉其段者見及無御座候得共同様自力立に召列候檢地寺領衆之内に白坂左京亮と申人有之其父大炊左衛門系圖之伝に庄内御檢地奉行五代勝左衛門殿に隨身其後寺領被仰付然處有馬障有之走付たる依功御免にて知行半分被返下候趣相見得候間此類に茂被仰付候歟朱書一向宗寺領者御免無之百姓に被召成候茂有之よし也然共寛永十八年加久藤高帳に右一向宗自力立衆之名前無之候に付ては檢地寺領之列には不被仰付候歟と存按御座候右之書留午持居此中申上殘候故迫加如此申上候

盛香集卷之二

一 御家に一向宗御禁止之儀はいか成故といふ事きたかに知れる人なし或云寛陽院様と御舎弟又八郎との御同年にて又八郎との御惣領と成給はざる事を御母堂一向宗にて有之か深く無念におもひ調伏せらる大ゆへ 寛陽院様御足の御なやみましましける此時被禁じという説あり時代相違有て覚束なし老人の説に幸侃一向宗と見得たり其故は 義弘公御東方にて踊興行の有りに幸侃赤き踊衣裳を為持とて借に遣されしにいろいろ難波して借し奉らざりしに 惟新様聞召一向宗は人にものかさざるにやと笑はせ給ひしと幸侃御手討は慶長四年なり其年一向宗禁止せられ幸侃野心より事起りて一向宗は禁せられたるにやと云々

右調伏の説は左も為有之由にて御母堂の近親鎌田一族遠嶋の事見当申候是亦一向宗にて候はは何分にも御家には惡逆の宗徒と被思申事候又八郎殿御母堂の甥鎌田伝左衛門者惠石島に伝左衛門弟彦左衛門は屋久島に流罪者系図にもあれは調伏の一味にてや旁証なき事にあらざりけり

覺

一 竜伯様被召置たる法度已下周捨可入之事付御内之作法出仕已下此跡に不易やうに可有分別之事

此間四ヶ条略す

一 於鹿兒島神水之事付一向宗法度之事

一 信心之儀被捨間敷事

又三条略す

慶長四年夏

右通また見当申候 惟新様仰出に可有御座盛香の幸侃御手討其年に禁せられ候と聞かきせしも右之事に相当候半

出水移衆中次第不同

本田六右衛門殿宮原左近入道殿此間多人數も

出水一向宗牢入 一向宗牢入

築地甚右衛門殿 格山竜兵衛殿

右の人衆は慶長四亥年朝鮮御軍功にて出水高城御拝領の節移されし衆なれば右同年夏の御法度に靈顯して牢入せしならん

一 種子嶋国上村浦田の湊に浦田明神とて一島の宗廟あり社殿樓閣も美しき構なりけるに文正忠仁の頃に及て三島改宗の命ありしより朽荒て二百余年は空しく廢圮せしを元文三年再建したる赴き縁起に見ゆ今季安小根占社家黒木右近か文書を按るに忍熊皇子むかし種子益教に天降まして二島の衆を救はんと託宣ありけるとて両島ともに勧誘し來けるに長祿三己卯年に浄土宗と日蓮宗と江州安土と云へる所に相論せし故にて日蓮宗多く此兩島に流罪せられてより日蓮の法を敬信せしを此神納受なく則二嶋を退寛正二辛巳十二月十八日此の小路大浜と云る所の江岩の嶽に飛移給ふとなり云々翌正月元日申午の日に黒木左門田代の河原に二本権現を勧請せし來山細々書記たるにても法華宗の神社を廢しける時の勢もおもひ知らるれば 日新公の父母先祖の祭日とを忘れ或は仏神を輕んずる宗旨は禁止せられけるといふ事にもあひぬる証拠なれば亦ここに粗載せおくなり。

朱書

一 一向宗御禁止一件補遺可補入置事

伊地知太郎兵衛覺書

一 又其比大和一向宗之仏具先年より公儀江取納不斷光院下に有之を我等に被下帰忱仕其道具地かねにして思様に作り申云々

右者阿多内膳琉球地頭之節太郎兵衛鹿府江罷登古より通融爲仕
加治米銭相捨候て御物過分御損失に付琉球通用之鳩目銭に申受
候時分右之伝目にて茂作方爲被仰付と見得候明曆比之事に茂候
半

伊集院俊矩言行聞書

一 仁左衛門殿紀明奉行之時病氣にて出勤不被致候節新宗僧南泉院
へ来り居て人を誘之由聞得候に付同役衆紀明被致候得共不誤候故
本尊を出し被見候に新宗仏にては無之候然共疑不暗嶋に御遣し被
成筈にて山川迄差越其時仁左衛門快氣にて出勤被致ければ右の咄
共あり其仏被見けるに新宗仏無別条事にて候由仁左衛門殿被申候
者各者他仏と被仰候得共是は他仏にてはなしと被申けるに又々皆
被見けるに其時者前とは違ひ他仏にてはなかりける由なりそれよ
り追手にて其僧は海に打込候由其僧者魔法にて人の目をとらかし
置けれども仁左衛門殿目には及はずとなり

右者近代二才衆集置候物に見当無覺束も被書置申候
又右とは別時之事に候半左之通一向宗流人見当候付被書置申候

朱書

「大島代官所古帳云」

大嶋江

西本願寺堂達

法玄寺
願 敬

右同

開蔵寺
雲 貞

一 喜界嶋江

右者今度京都より薩州江流人式人流罪被仰付候に付右嶋々江使船
次第船牢にて足解式人一つ幸領相付被遣管候左候て於島方者代官
罷居候郷中江外固堅囚いたし其内に小家相調入置閉入口外江番所
相調番人三四人一つつ不明様嶋人との内見合を以可被附置候此旨
先達て申渡候事候間無延引嶋便之節可被申渡候流人被差置候所右
阿島代官罷在候郷中へ見合可調置候流人格護等之儀者迫て書付を
以可申渡候尤於嶋方者御物より朝夕一汁一菜輕き賄被下候

右之通可被仰渡旨御勝手方江可相達候

八月

本

右之通被仰渡候間得其意此書付相達次第早速より流人入置候小家
并外開番所相調方其外諸手当無間違様可申渡置候
此旨可申渡由右平太殿御差図にて候尤喜界嶋江者別達て被仰渡候
間其元より被相達に不及候以上
但海上故同察式通申越候

朱書

寛保三年

亥八月十日

木脇實左衛門

大嶋代官

日高次左衛門殿

追て流人之儀跡便より被差下候て可有之条其内諸調方相濟置候
様可被申渡候

今度京都より 公儀流人式人被差越候付当三拾八歳西本願寺堂達
性玄寺懸敬事大嶋江被遣置候於嶋者代官罷居候近辺江外固堅囚い
たし其内に小家相調入置閉入口外江番所相調番人三四人宛不明様
嶋人共之内見合を以可附置候平日且閉入口可鎖置候事

一 朝夕輕き一汁一菜之賄被下候問其節者番人相附可差通候

右外誰人にて茂流人被差置候所江出入かたく無用申付候右流人阻
江徘徊之儀者猶以停止申付候事

一 右流人当分者衣類も致所持候至以後不相渡候て難叶節得差図候
上魚相成衣類調可相渡候事

一 病氣等之節医師差越候儀有之節者附役之内老人差越様子可見屈
候用事相濟候はは哲にても不能居様可申渡候事

一 右流人者別而惡意深才勘之者候付右通欠落等不致様と之事にて
致外開番人被附置候条自然番人共より不便之儀坏と存違惡意之儀
共曾て不仕何角物誑等茂不致様堅可申付候尤常式流人同前之者候
間取持等致儀致問敷事

一 御当地江往来之時節且又嶋中之儀都て委敷儀共流人江不中問様
稠敷可申付置候事

一 流人江一類共より互之書通かたく令停止候事

一 流人内にて刃物取扱候儀かたく停止申付候条會て相渡間敷候事

一 流人万一欠落之志にて田を破出候はは其段便船次第御当地へ可申越候尤様跡書を以早々嶋中江改方申渡近嶋江越相捕候はは本之通入置其首尾可申出候若又刀属等盗出致敵対相捕候儀不及手候はは討果にて茂時宜次第相計其段可申出候且又変死又者致病死候はは附役横目江死骸見届させ葬置左候て寺証文取變死病死之訳委細書付所持道具相改有無之訳以書附可遂披露候事

一 右之者一向宗にて候付浄土宗に改宗申付差越候間以後宗門に付疑鋪仕形有之候はは可遂披露候事

一 平日之所行等氣を附相替義於有之者可申出候事

一 一向宗之儀別て御禁止之事候右流人被差置候所江諸人一向通融不罷成事候得共其上嶋中之者共江右流人にたよらざる様にかたく可申渡置候事

一 右流人被差置候に付て者代官附役之間時々見舞不締無之様可致下知候事

右条々堅固相守之大形之儀於有之者急度可及沙汰候此書付代官代合之節儘可次渡者也

寛保三年九月

御家老座印

大嶋代官

流人愚敬江申聞置候寛

一 大嶋江愚敬遣置候於嶋者致外田其内に小家相調差置候間田より外江出候儀堅令停止候事

一 類共江致書通儀堅可為停止候事

一 御国之儀一向宗子細有之段前々被禁候付此節浄土宗に改宗申付候条於嶋も随分相慎一向宗之志會て致間敷候事

右条々違背致間敷者也

寛保三年亥十二月六日

右之通申渡置候間得其意代官代合之節可次渡者也

寛保三年亥十二月六日

御家老座印

大嶋代官

証文

西本願寺差達性玄寺

当三拾八

浄土宗

愚敬

前一向宗

右者此節京都より流罪被仰付候処一向宗にて候付浄土宗改宗被仰付大嶋江被遣置候条後年札改に付て手札申請候節前一向宗之訳手札肩書等可申渡旨亥十二月十四日三崎平太取次御証文を以被仰渡候付後年手札改之節右之趣手札帳面共無紛記置候様可申渡候以上

寛保三年亥十二月十六日

御勘定所印

大嶋代官

右為差引証に茂不相成事御座候得共書被差出候間先便差上候一向宗御禁止愚按補遺之冊末江注冊子被添置可被下候尤私方へ外に扣無御座候間被為濟次第好便御差下可被下儀万々宜奉願上候以上

壬七月十二日

伊地知小十郎

伊集院喜左衛門様

(原表紙)

安永九子十二月

(朱書)

一向宗

時々被仰渡候御書附写

(原寸縦二六・九糎、横一九糎)

写

一向宗之儀前々より御禁止被仰渡候処右宗旨之者不相絶候に付
自身申出之儀宝永五年十二月委曲書附を以申渡同六年七月再篇申
渡其以後自身より申出候者は誓詞申付一往者相減候処近年又々取
行之者及多人數不可然事候依之宗門改方江申渡趣行之諸外城者
興頭横目江宗門方加役申渡向後稠敷相改候様申渡候間亦以先年申
渡置候趣未々迄茂不致忘却様堅可申付候此期山伏神子門長類占祈
禱いたし一向宗を勧候者或為有之由候右牀行脚托鉢なといたし方
々行廻り候類之者共不謂占祈禱いたし一向宗之心宗杯と申触し右
宗旨勸入御法度之妨に罷成候段別て不届之至候間向後者法元不違
占祈禱杯を仕候者於有之者屹与可及衆候儀

末々山伏并弟子之類

未々社人神子門長類

寺院より為結縁袈裟衣を免置候者類

念仏坊

平家座向

地神座向

子安觀童守

右類行脚托鉢罷出候者共其法式之門首支配頭より稠敷逐吟味
無筋祈禱占等仕一向宗之心宗杯申触候儀不仕様堅可申付候

他国より入来候六拾六部行脚又者為商売入来候旅人共江祈念占
等頼候儀堅止申附候

一向宗自身申之者共此期省宗門改方より衆儀取掛御用触申渡候
砌不道所より申出候て茂白身申之筋取揚采由候得共衆儀取掛候以
後申出候て者自身申之詮方無之其上一向宗御制禁之儀者毎度被仰
渡候得共本尊致所持蜜々取行候者有之候故御衆儀候上急度被所嚴
科等候得共非分を存自身より本尊等差出有触申出候はは其科を可
被差免旨先年被仰渡置畢竟自身申之者一向宗根切之等候処其通に
茂無之却て右通難道御自身より申出其科を被差免候様有之候て者
緩せ之様成行別て何如候故向後者一向宗之聞得に付て宗門改方よ
り衆儀に取掛候てより自身より申出候て茂差て取揚無之等候尤悔

前非宗門改方より衆儀不申渡内自身より申出者々跡々之通取揚可
被成候右に付て不諭之儀無之様入念相礼可申山旨宗門改方江申渡
此段茂未々不洩様可申問候

右之通向後稠敷申付白今以後忘却不仕様組中並地頭所私領明
所之外城江茂不洩様可致通達候

享保十年巳

御城代嶋津

八月

將監

金山根帳附山方様其外旅人江祈禱占等相頼亦者為致宿候間得茂
有之宗門付て疑敷儀有之候采向後旅人牀之者江祈禱占等相頼候事
旅人宿外旅人江為致宿候儀兼て申渡置候通堅停止申付候且又御領
國中神子はき無故筋を以占祈禱いたし候儀先年堅停止被仰付候諷
訪神主より一流者免為取揚置事候得共程過大形成行候采右牀之儀
無之様地頭領主支配頭並主人より堅可申付候

右之通表方江致通達御側方御勝手方御隠居御方江者写を以相
達諸外城江茂急度可申渡也

宝曆七年丑

御家老樺山

十月

左京

陰陽道

兵道

神子門長

子安觀童守

淨光明寺支配本願之者

右者人家來寺門前亦者百姓類之輕者共兵道為陰陽道神道方輕
作法林江少々致稽古候由にて為差師匠茂不相知本式之伝法茂
不致夫々一道之訳茂不相知色々取更祈禱等敷呪等いたし候も
の有之正法筋茂不相知別て不相応不宜候間所嚙役人横目其外
宗門方役係之面々氣を付不限僧俗右牀之者於有之者可差留候
作其上右牀執行いたし候者有之候はは相礼当座江可申出候尤

神子門長之儀者先年御禁止被仰渡置候に付而者致執行候者無之旨候得共程過候得者自然者神子門長之業取行候者有之候はは堅可差留候且子安觀重守之儀茂右同断相心得可差留候淨光明寺支配之本願齋打房と称諸所差廻り由候右本願江者淨光明寺ならひに一宗之寺院より証書相渡相廻る事候間自然右書付不致所持相廻候者有之候はは是又可差留候前文之通り申渡候上右縣致執行候者於有之者所役之越度可相成候一向宗締方に付紛鋪候間緩之儀無之様可致旨被仰渡候間此段申渡候

明和四年

亥二月

一向宗御制禁之儀毎度被仰渡事候処于今本尊等致所持宗旨を弘致執行者茂在之甚以不可然事候故分て申渡趣在之候宗門方加役之儀者専心掛石鉢執行之者無之様平日致締方万一疑敷者在之候はは早々可申出之処間者脇々より致露顯其所加役より不申出も在之大形之至候所中江右鉢之者出来候儀畢竟加役締方不相届兼て宗門方江被係置候詮茂無之候冬向後随分可致出精候末々之者々愚痴に在之候処より沙門類之者色々謀候得者間違右宗旨に相成遂御咎目候儀不便之至に候向後御法度之旨致得心候様加役共より兼々委敷申聞置乍其上致執行候者々早々申出候様諸所加役江屹と可申渡候

右可申渡旨宗門改方江可申渡候

明和五年子

御家老樺山

十月

左京

諸所

地頭

領主江

一向宗御制禁之儀前々被仰渡置事候処に于今本尊並書物等致所持居密々弘宗旨候者茂有之甚以不屈之至候御家御禁止之宗旨に候得者縦何様執着之者有之候て茂一切執行之儀者無之旨候御法度之旨を不致得心候存候処より右鉢之者茂有之応其仕形屹御咎目被仰付就中衆中之儀者数代相統之家おも被取

禿不解事候畢竟無故儀お存違候所より右次第如何候条此混衆中者勿論下々迄仰渡之旨を屹と相守候様役々より可申聞候
一 沙門類之者又者旅人抔病家走入祈禱等いたし一向宗に志し候へは致平論事之由申聞相すめ候儀有之由右鉢之者有之候はは其訳早速役々方江可申出候
一 右宗旨之本尊並書物道具等内々致所持居候者此節非分を存自分より有鉢申出於差出者其科お免し手札肩書及沙汰間鋪候間不隱置可差出候

一 百姓共一向宗に志候付て者専五人与之者不氣に付候て不叶儀候間其与中之儀者兼て稠敷申聞置万一疑敷儀茂候はは早速役々方江申出候様に申渡与中江右宗旨疑鋪者無之段五人与掛合之為致印形毎年八月限宗門改方江可差出候乍其上緩之儀有之候はは五人与越度相成御咎目可被仰付候

右条々先年より分て被仰渡趣有之委由申渡候得共程久敷連々緩に成行致執行候者設々有之候畢竟右宗旨頭取之者色々と謀り申聞候に付存違致執行筋も相見得甚以不然候此以後右鉢之者於有之者一篇御咎目可被仰付候右に付て省宗門方加役ならひに訴人中江茂此節分て申渡旨有之候間右之趣を以末々之者迄茂不洩様屹申渡様所役々江可申渡旨宗門改方江承置候様可申渡候

明和五年子

十月

御家老樺山

左京

一向宗頭取又者本尊持之者を密々致訴人候はは級雖同類其身之咎を被差免直本人之科銀為御褒美可被下候

一 御城下三町之儀茂町役之内より宗門方加役申付置年々八月限不密成者有無之訳首尾書並互与中掛合印形諸外城同然申付中宿者之儀は近所掛合為印形宗門改方江差出候様申付候

右之通申付候条支配中並諸外城迄不洩様如例可申渡候

安永五申

御家老喜人

正月

主馬

右同小松 帶刀

写

一 前々より諸所囑役人等頭横目之内各人一つ宗門方加役申付置所中一向宗執行之者有之候はは可申出旨申渡締方之儀毎度被仰渡置候をも於諸所執行之者段々有之候加役之者共より右仰渡之旨をも所中の者共其時々申聞致締方候はは右鉢執行之者無之等候処畢竟勤方大形相心得候所より不相止及多人数執行いたし候所も有之別て大形之至候間平日随分氣を付向後加役之者共其年々三度つ行廻末々迄被仰渡置候趣致得心候様委敷申聞時々其首尾可被申出候左候で首尾無所被仰渡置候はは宗門方より可致沙汰候

一 六拾六部並山方縁其外何を付差越居候旅人之内折念占等いたし一向宗に引入候儀有之由候間随分氣を付締方可申渡候且行脚躰之内に茂宗門疑敷者可有之候間是又氣を付若し右鉢之者有之候はは在所名元等委敷承届早々宗門改方江可申出候

一 諸所にて講と名附男女相集宗門疑敷儀茂有之由候右鉢相集候節者其所引請居候役人又者下役之者共之内に茂氣を付疑鋪儀茂候はは加役共江申出候様被申付置猶又加役共随分氣付不審成儀有之候はは申渡候趣時々申渡等候得共猶又別冊相下候間書写被相渡候様是又申渡宗門改方江可申渡候

安永五申

八月

御家老喜人

主馬

右同小松

帶刀

一 一向宗訴人共隱居家督又者死候者有之候節其段宗門改所江申出養子差越候者々前以囑役人共より是又宗門改所江可申出旨先年申渡之趣有之候処間にも不得御差図て養子差越候者有之別て如何之いたし方候間向後無間違可得御差図候

一 家督並嫡々之者万一不得差図養子差越候者有之候はは相当之御咎目申付候上本家江可差返候

右之通諸外城私領江不洩様に申渡訴人中江者宗門改方より可申渡旨可申渡候

安永六西

十二月

御家老小松

帶刀

諸所

地頭

月番

御用人

町奉行

郡奉行

宗門方加役之者共其所中締方致出精候はは宗門手成不成立替候処畢竟役々大形相心得候所より執行之者多々有之節相見得候間其所にて執行之者有之露頭いたし候節加役之者共江御咎目向後重く可申付候繼不致露頭候て茂兼て所中不締之聞得茂有之候はは是又相当之御咎目可申付候

一 訴人之者共其事茂大形有之候はは加役之者共に準咎目可申付候訴人外之者不依誰人一向宗執行之者申出候はは恥と褒美可申付候

一 名方之儀者其村庄屋引受罷在事候得共處兒島並諸外城庄屋役之者共宗門之儀茂專引受兼て致締方不審成存寄茂候はは近名者宗門改方江申出諸外城者其所加役共江早々可申出候若請込之村中江執行之者有之致露頭候はは加役共江同前咎目可申付候

一 諸外城私領囑役人組頭横目宗門方加役者人一つ申付置候得共此節より兩人一つ申付候間氣を付可致締方候左候て郡見廻並浦役之儀茂当分に加役にて届兼候所茂可有之候間所役々申談其訴申出候はは重々可申付候

右者一向宗御制禁に付て者先年以来段々分けて申渡置趣茂有之候得共今以執行之者不相止候に付右之通申渡候条可被申渡旨申渡宗門改方江者承置候様に可申渡候

安永七年戊

二月

御家老小松

帶刀

宗門

改方江

一 一向宗自身申之者々其料を免手札肩書之沙汰及間鋪旨明和五年
子十月申渡且致訴人候者々雖雖為同類其身之料を免直に本人料銀
為褒美可被下旨安永五年申正月申渡置候得共至頃日訴人並自身申
之者無之候右之旨忘却者不改管候得共大形成行候儀可有之候条以
來田舎廻り之節者於諸所右之次第下々之者共迄致得心候様可申聞
旨猶又委細可申渡候

右可申渡候

安永七年戊

御家老小松

三月

帶刀

一 於諸所一向宗執行之者有之節者加役共より宗門改方迄申出管候
処百姓相交居候得は所違郡方江首尾申出候所も有之候得共右宗旨
之儀者兼て申渡趣有之別て被入御念事候間若執行之者在之候はは
一切不申散随分致隠密夫々支配頭江申出不及早々宗門方江可申出
候此旨諸外城私領江申渡御役人眼承置候様には是又可申渡候
戊戌月

御家老小松 帶刀
右同暢洋 仲

一 一向宗締方に付て者先年以來及度々分けて申渡趣有之候処其
旨を不相守令以執行之者不相止甚不届之至候依之此節より都て之
御咎日重く可申付候

一 一向宗不審之者宗門改役又者其所加役共より於所格護申渡候節
親類与中並上番迄召付事候由候処至頃口白害又者欠落之者及多
数候畢竟加役共大形申渡番人共不念之所より右躰之者有之候已来
不審之もの格護申渡候節隨分致隠密其所役所又者地頭假屋之内
不差障所江召置親類与中並為上番儘成衆中兩人つた代合昼夜不寝
之番付置上番之者専入急緩せ無之様可申付候乍其上大形之儀於有
之者番人並加役迄茂嶋と御咎日可申付候

一 致欠落候者蜜々御國中江入来宗旨相勤候に付至今執行之者不絶
筋相聞得候間右躰不審之者見得來候はは相捕早々宗門改役所江其

首尾可申出候若見逃又者相付致執行者及露顯候はは其身者勿論加
役迄茂是又嶋と御咎日可申付候間此旨未々之者迄も不取違様加役
共より可申渡置候

一 宗門改役より宗門不審之者格護申渡候節末番人不附置内致欠落
候有之由候畢竟所役々大形取計同類之者聞付為知候て致欠落儀茂
可在之候間以來右躰不審之者有之候節者隨分致隠密御用筋緩せ無
之様可念入候万一年此上大形之儀於有之は役々可為越度候

右之通諸外城私領鹿兒嶋並町浜寺門前江不渡様地頭領主並月番
御用人其外支配頭より委可被申渡旨申渡宗門改役江茂可申渡候
安永七戌

十二月

右同山岡

市正

毎年五月十一月宗門改役所江首尾申出次第

一 一向宗締方之儀年中五月十一月二度所中行廻り先達て締方仰渡之
趣申渡候届右月限内可申出旨被仰渡趣承知仕候依之所中行廻り先
達て被仰渡置候締方御書付之趣百姓末々迄諒聞且口達にて茂得と
申聞候に付此段御届申上候以上

月 日

正や

宗門御改所
右之通書認宗門御改役所江直に差出管安永九年子十二月宗門御改所よ
り被仰渡候事

右之通宗門改御役所にて直承知仕候万一首尾月限内不申出候得者御
断申上管也

一向宗御禁止に付て者毎年執行不仕段与合中印形為致番所江八月朔
日差出事

(原表紙)

御影講素乱略記

尾
寺

(原寸縦二四厘、横一六・五厘)

夫鹿兒島県下南方郷鹿龍村ニ於從來本宗婦依ノ檀徒ニ面講アリ古ヘ肥前教法寺住職秀山某^{異途}組立テタル講ナリ一ヲ明信講ト稱シ講頭二名一中村吉太郎一家弓吉兵衛ト云共平民凡千三百戸余ヲ所割トス今時^{統一}御影講ト唱ス講頭士族永野幸七郎ト云^{古法難出来ノ時ニ御正意方}多クノ本^{ハ役方ヘ訴人シテ}尊出令^年老タレトモ其性慕恋ニシテ殊ニ異ヲ好嘘詭ヲ吐露セリ而モ凡千七百戸余リヲ統制セリ愛ニ明治十一年十月十六日予別院ノ命ニ依テ該区ニ投錫ス同日別院派出ノ小池尾寺ノ前君ニ値ヘリ而君人ヲ避テ馳進曰近來該区内御影講々頭ヲ始東派ノ爾アルコトヲ探搜セリ依之再三明信講問ニハ所々説教聞鑑候ヘトモ御影講問ハ唯一ヶ所モ講頭ノ束縛ニ依テ説教聞鑑不致數度備促仕候ヘトモ慶繁トカ何トカ申分ヲ致甚不都合ノ至ニ候察スルニ秀山婦依ノ古執ノ徒ニ候ヘハ本派不帰依ノ原因ハ全クタノム一念ノ信相ニアリ加ルニ之專念寺泰義順巡回ノ節高座上ヨリ永野コトヲ罵詈致セシトテ太ニ奮激セリト云フ同講區本派婦依ノ信徒ヨリ憤ニ聞ケリ且ツ世士ノ者ミリ永野ハ三業古執ノ魁タル者ト吹聴ス此レ明信講ノ奴等ノ所為ナリト云テ大ニ敵視セリ其ノ毒氣ヲシテ番役世話方等ニ吹キ懸ケ竟ニ本宗不帰依ノ邪路ニ陥ル此永野不帰依ト唱スル由縁ナル歟ト小池尾寺ノ對話ニ依テ予始テ該区景況ヲ概畧ヲ聞ケリ依之最勝講ヲ以テ御影講ヲ本派ヘ固結セ令ルモ一策ナリト三名示談ノ上飛脚ヲ以テ別院ニ報知ス已下景況故僕一名ニテハ認メ付難ヲ以テ教職一名ヲ派出アラシコトヲ乞ハシ鎌數氏出張ス其砌該区一法ノ景況書ヲ別院ヘ上申スト云々同十七日小池尾寺ノ前君ニ離別ス^{小池氏ハ知覺郷ニ赴尾寺氏ハ坊ノ坪村ニ出發ス}同日御影講々頭永野ナル者ヘ呼ヒ状ヲ遣候処翼十八日午後三時ニ永野トシテ一名來ル永野儀ハ久敷病氣ニテ打臥候仍之巨細ノ御用ハ私承リ候ト申出候間説教聞鑑候段申向ケ候處無儀承諾シ罷歸リ申而口問ヲ隔^{催促部合ニ及ヘリ}兩名來本月廿六日小湊村某宅ニ於テ慶繁ノ砌ニ付御影講ハ唯一ヶ処ニ統該シテ説教拜聴致度段出願候間予モ一往案外ノ事故安着仕候依之屈指廿六日ノ來ヲ待得無儀説教竟尤モ於其女人講取結ノ事モ粗交談仕置候處随分宜シキ景況ニ候依之十月三十

日鎌數君到着スルヤ否ヤ直ニ永野ヘ僕ヨリ最勝講取結ヒノ説教聞鑑申達候處一日間ヲ阻テ永野代理ト稱シテ三名來テ曰御影講問ハ戸數ハ千余モ在之候ヘトモ皆貧乏ノ者エ御受難申ト云々鎌論曰尼講ハ何ソ金錢ニ関スル事ニ非ズ女人ノ爲御法御引立立ノ御趣意ナル事懇々説諭ノ中端々一転シテ曰西本願寺ハ不帰依ニ付テ御申上ケ候ト云々僕尋曰御影講問ハ統テ不帰依ナリヤ將中ニハ本派婦依ノ者モアリヤ三人カ曰統テ不帰依ト申事ニテハ無之中ニハ婦依ノ者モ在之候鎌ノ曰講頭永野ハ本宗婦依ナリヤ三名曰ク講頭ハ余程ト西派ニ付クヨフ心配仕候ヘトモ門徒カ承知不仕ト答鎌曰サレハ永野氏ハ本派不帰依チハナヒカ三人語ス鎌又曰ク各々ノ三人ハ婦依ナリヤ不帰依ナリヤ三人カ曰三名共ニ不帰依ニテ候鎌責テ曰三人共ニ永野氏ノ代理ニテハ非ヤ然ハ永野ト各方トハ意趣格別ナルヤ三人理ニ伏シテ軛シテ云ク成程講頭永野モ西派不帰依チ御座ルト云ヘハ鎌ノ曰何事云云ゾ竜頭蛇尾ト申シテ尾リト頭トト一口一口問違テハ頓斗相手ニナラヌト云テ野蠻ノ者ニ困窮スル事ヲ歎セリ云々鎌曰然ハ其本宗婦依ノ者ニ最勝講ノ御趣意ヲ申聞セ候間何方ニテモ不苦候ニ付講問一般ニ布達致シ與レ候様頼談ニ及候處三人異口同音ニ爾ハ最一往引取永野ト篤打合セ其上下否ヤ猶御報知可申上ト云テ婦狀ス僕等兩人共ニ可成丈手ヲ分チ固結ノ為最勝講印鑑御影講問ノ方ヲ先ニ致明信講ヲ後ニ廻ス覚悟ニ候處右件ノ次第ニ付御影講決着迄先ツ明信講ニ於テ枕崎ニ三日上ノ釜村ニ兩日小湊村ニ一日ト漸々ト最勝講致執行候御影講々頭代理トシテ兩日間ヲ經テ十一月六日四名來テ西派ニハ不帰依ニ付先般差上申置候名簿帳御下渡可被下願候ト申出候間案外ノ事ニ付驚愕仕候^{此日藤間説教ニ出ス鎌數一名ノ応接ナリ}鎌ノ曰ク各方ノ不帰依不帰依ト申サル其ノ事故ハ本宗ニ付如何ナル処カ不帰依ナルゾ真俗二諦ノ中テハ來世得脱ノ安心ナリルヤ將今日交際上ノ事ナリヤ余程ニ結問スレトモ不帰依ノ事故トテハ更ニ無之トノミ外ニ何トモ不申四名同音ニ唯不帰依ニ付名簿帳御返却奉願ト相募リ候鎌諭シテ曰ク各方カ唯不帰依不帰依ト計リ申シテモ何か其不帰依ノ廉無之シテハ我輩ヨリ別院ヘ上申ス事キ事出来難シ傳ハ各方カ煩ヲ責ニ彼ノ

娘ハ嫌ヒヤト云テモ其ノ廉ハ不立処ニ姿ハ好ケレトモ縫針ノ手
仕事カ一向出来ヌ故嫌ヒヤト云ヘハ嫌ヒノ事故カ明瞭ニナリテ双
方落合カ付カ如シ今モ不帰依ノト云テモ其ノ廉ナキトキハ別院
へ上申ノ仕様カナヒト種々説諭ヲ致候処四名カ曰然ハ御影講問ノ者
ハ統テ禽獸ト見ナラシテ是非名簿帳ハ御下附下サレト云於之何トモ
カトモ醜休究タル風情^{波々々々}鳴鼓攻モ然リト吐息セリ鎌曰各方ヲ禽獸
トハ逆テモ見難キ故能自反シテ大道ヲ踏マネハ第一朝廷ニ対不相
濟事ニ候各方ヘ一寸尋曰我身ヲ禽獸ト見テ呉ト云ハ今度本宗ヨリ名
簿帳下ノ儀ハ人間ノ道ニ非ストハ篤承知ノ事チヤナアト云ヘハ四人
一同赤面シテ噤止ス鎌曰各方チハ示談難出来ユヘ一ト先引取ラレヨ
何レ講頭永野ヘ面会ノ上夫取計ヒ申ヘクト暇乞シテ退出ス十一月
六日午后六時藤岡小湊村御影講平門徒士族藤原家ニ至テ尼講取組ノ
説教開筵ヲ示談ス小湊村ハ御影講第一ノ要地二百戸余リノ中明信講
ハ總三十戸計リ依之一日モ早ク該村御影講百七十戸計リヲ最勝講印
鑑ヲ渡本宗ニ取止ント欲スレトモ其ノ手ヨリオキヲ以テ直ニ藤原家
ヲ借り受人ヲ雇ヒ小湊一般ニ説教ノ会所並時間ヲ舐サセ候然ル処幸
雨天ニテ還テ詳參セリ<sup>藤原氏ハ御影講ノ平門徒ニシテ大ヒニ本宗痛依且
ツ小湊ニ於テハ第一等ノ富家ニシテ且ツ人堅ク得</sup>
ル事モ亦第一等ニシテ^{深ク藤岡御影講ニ依ス}同月七日鎌數ハ枕崎村最勝講説教藤岡一名ハ小
湊ニ至リ最勝講ノ御趣意并ニ御影講取組ノ意故ヲ譬説杯ヲ以テ大ヒ
ニ斤量致シ候処翼八日ハ一村中大ヒニ感シ櫛ノ齒ヲ曳カ如ク講頭永
野方ヘ東派転派ノ儀ヲ相断御影講過半本派ニ固結セリト云事同村中
川高橋而將ヨリ報知ス<sup>高橋氏ハ本ト郡城産ニテ最後才初鎌數氏面会シテ本
派ニ固結ス先般御影講ノ惣世評掛リ近來評シテ平門</sup>
徒トナル○中川氏ハ藤岡照會シテ本宗ニ固結ス此又秀才ニシ
御影講惣世評掛リ今辭シテ平門徒トナル兩人至テ親友ナリ<sup>同夜小湊村ノ
景況ヲ聞ナリ鎌數氏大ニ小躍シテ直ニ同村中川高橋藤原等ニ謁シ更
ニ復説教開筵致ント其儘同村ニ至リテ又藤原氏ノ宅ヲ借九日午後二
時ヨリノ説教ヲ約シ大ニ都合宜ク相察候爰ニ策ヲ仮設ス面談ニ讓同
九日小湊村ニ至テ聞ニ八日昼ヨリ今朝ニ至ル迄東派出張尾関勵貫ナ
ル者一名来テ御影講番役ノ所ニ於テ説教致先時金山村ノ様ニ至ルト
云々依之早速書翰ヲ以テ掛合申候書面写別番云々尾関返書別番云々</sup>

小湊前馬鎌數氏<sup>説教赴御影講問一般禽獸ト見ナシテ名簿帳下ノ事次ニ祖訓
一代御苦勞ノ事ヲ弁シテ骨肉ニ天無二ノ御影ノ事東派分
流本派ノ事ニ付テハ教如上人ハ薩州御先祖旧君ノ為敵ノ事今更転派スル者ハ
累代先祖ニ背キ現在ノ親ニ背キ天無二ノ御真影様ニ背キ善知識ニ背キ理ヲ審
ス後藤藤岡重チ安心ノ邪正ヲ弁ス駭ス爰ニ於テ東西未分狼狽躊躇ノ
輩多ク本宗ノ趣ヲ聴聞シ頑固ノ醉ヲ酸ス者日夜葉書ヲ以テ更ニ本派
ニ帰依ノ段願出ル事一昼夜ニ凡ソ<sup>次ニ枚日ノ
ヲハリニ</sup></sup>

○東派出張尾関勵貫ナル者ヘ遣書面写

未謁鳳眉候ヘトモ御多祥ノ段舊羅仕候然者該区内ニ於テ從來本宗
帰依ノ信徒ニ御影明信ノ兩講問之則名簿ニ照準シ御名号并印鑑一
般ニ配属致置候近來御影講之内不帰依ト唱ヘ我等ハ禽獸ト見ナシ
テ名簿下渡呉候様出願ニ付不段依ノ廉再三尋問仕候ヘ其右等ノ趣実
ニ醜休究タル風情ニ付可成丈説諭ヲ加ヘ其ノ上ハ不帰依ノ廉々明瞭
次第直々別院ヘ上申致シ夫夫処分相濟候迄ハ御影講問一般本宗ノ所
割ニ候依之他派ヨリ猥リニ踏込候テノ説教ハ今日交際布教止ニ於テ
大ヒニ義務ヲ失錯シ加之該区講問一般人氣動揺ヲ相醸第一維新ノ御
旨趣ニ悖離致シ自然斗槽ノ場合ニトモ相移リ候様成行候テハ実相門
ノ罪人御中ノ虫毒懺愧スルニ堪タリ殊ニ又当県下ノ如キハ戦後不遠
ノ地且ハ野蠻古執ノ徒不勤候ヘハ如何ナル法難出来モ難計候間先別
院処分畢之上ハ本派講問ヘ愧リニ入り込説教ノ儀ハ断然御見合可然
段及通知候也

十一年十一月十日

鹿兒島本願寺別院派出

鎌數講談
藤岡寛音

東本願寺出張

尾関 勵貫殿

尾関返書写

如御通知御派之儀ハ不帰依ノ由ニ付弊派ノ説教是非聴聞仕度由願出
候ニ付出張仕候事ニテ強テ弊派ヨリ出張致書ニハ毛頭無之依テ貴派
ヨリ該講ヘ御説教可被成候當派ノ義ハ只人民ノ帰向ト申テ願出候ニ
付出張仕事ニ候也

東本願寺出張

訓導 尾關勸實印

十一月十日
鹿兒島本願寺別院出張

權少講義 藤岡寛音殿

訓導 鍊數講義殿

九月訣区景況猶又飛脚ヲ以大畧別院へ報知ス

別院回答ノ写

其郷内御影講問者本派へ不帰依ヲ唱シ東派へ転派之景況云々申越之趣了承右ハ不容易之義於日數相懸リ候共聊無懸念精々尽力亡畢之此段回答候也

鹿兒島別院
事務出張所印

東派出張尾關氏不遺書面写

御返翰添玉睡ノ趣薫誦仕候然ハ就其書不審ノ廉々尋問仕候間作御面
到御并解憑申候

一 本派不帰依ト称シテ貴派ノ説教出願致候ハ誰ナルヤ姓名御知セ
可被下候事

一 南方郷鹿籠村ハ從來本宗信徒ニシテ貴派之印鑑名号拜受致候者
一戸モ無之段ハ御承知ノ上御出張被成候乎將該区内ノ現狀頓斗不
心得ニテ御派出ニ相成候乎ノ事

一 飯ニ譬例ヲ設曰寺檀ノ際ハ地主ト田畑トノ如トシ本山ハ地主ザリ
門徒ハ田畑ナリサレバ如何程田地荒蕪ニナリシトテ子弟等已ノ力父
兄ニ言ノ届ナクシテ他人へ耕作ヲ出願スト雖人其ノ父兄ノ許可ナ
クシテ直ニ鋤鋤ヲ以耕シテ可然乎今足下ニ本宗不帰依ト云テ數万人
出願スト雖交際ノ義務ヲ知ルノ教職ナラハ本派ノ講内ニ一言ノ掛合
ナクシテ狼リニ巡回説教ヲ促スハ地主ノ許可ヲ不受シテ他ノ田地ヲ
耕スニ異ナル事ナシ寧ロ卑劣ノ心術ト云ハサルヲ得ン乎僕等強ニ并
難攻撃ヲ好ニハ非ザレトモ貴派ノ為ニ吾講内姑息ノ徒大ヒニ陋説ヲ
固守シ且先根ノ謗ヲ吐露シ人氣動揺ヲ嘆候間難默止テ掛合申候也

十一月十一日

三枚目
前ノ次キ
四十余名各皆篠原中川ノ手着ヲ以届出候然処面日間ヲ経テ
又小湊村ヨリ説教招戴ス鍊數氏出張ス鍊曰小湊村ハ己ニ落城セリト

云々篠原ハ枕崎村某宅ニ報恩ニ至ル十一日別番通東派ノ僧ニ重テ書
状ヲ送ル○本月九日態ト飛脚ヲ以坊ノ津ヨリ尾寺氏ヲ招キ先般ヨリ
ノ手続ヲ以テ昼夜ノ分チナク一村毎ニ至リ種々手着シテ本宗ニ固
結セ令メ直ニ其村々へ説教開筵致大ヒニ尽力ヲナセリ十日尾寺止筵
村明信講番役与助宅ニ至リ所々手配リノ為麓土族前田氏ヲ呼何角談
判云々同日午后上釜村説教所ヨリ篠岡鍊數氏ヨリ談判有之候使者
來向所へ參着小湊村中川西名來リ語ル由縁ニヨリテ小湊村篠原氏其
外對四五名ノ士族連中ニ懇々長々説諭午后七時ニ歸リ一里程在方ノ
瀬戸口村ニ至リ山神与助老人ノ心配ニテ報恩講ト号シ入込人民呼集
メ説教説諭懇々終一宿ス翼十一日午前六時園下村番役梶木仁之助呼
同村一田二十九人ノ名簿請取爾処止宿所瀬戸口村番役寺瀬戸甚助
永野小七郎養育ノ恩丁實請居候者ニテ永野へ難別意者ナル故へ同所
名簿差出ノ儀束縛致居候間其意推察候故同日午後四時迄居坐リニテ
相待同村惣代へ申附名簿早ク差出候様申達候処惣代申候様ハ今朝早
ク番役ヨリ差出シ候筈ニ致置候へハ早速致通知候爾処番役寺瀬戸甚
助ヨリ三十八戸ノ名簿請取爾宿致右面村ヨリ弥々御影講ハ相殘候堅
日ノ説教口時ヲ約返ル十四日十五日下ノ園村ト瀬戸口村トハ共ニ御
影講問ナレトモ尾寺ノ働ニ依テ篠岡鍊數面名説教ニ至○御影講問出
張先ニ於テ搜索仕候へハ過半御名号并印鑑頭ヨリ未タ相渡不申サ
レハ永野小七郎ノ企謀ハ果下開教ノ際ヨリ病根アル事ヤ必セリ本月
十日鍊數君戸長出張所ニ至リ副戸長兩名ニ對御影講素乱ノ趣ヲ口達ニ
テ届ケ出候○十三日鍊數氏戸長役所ニ至届書ヲ出写 御届
御管内南方郷鹿籠村ニ於テハ從來明信講御影講ノ両講間ハ本派信徒
ニテ候処近比御影講問不帰依ニ付齋歟ト見ナシ名簿御下ケニ相成度
段出願候ニ付唯今取調云々申ニ候間自然御手數ニモ相成候哉モ難計
存為念此段御届申上置候也

十一月十一日

南方郷戸長事務殿所御中

右ノ通相届二時間計戸長ト對話スニ付テ示スニハ戸長長キ布達シテ説教
誘導コレアル取テ示スニハ佛法大ヒニ政治弊益ノ所以ヲ詳説ス四ハ東派古主

ノ敵ナル事ヲ石山軍記等ニ出テ互ニ寛談ス五ハ御影講聞素乱ノ次第且ツ從來
慶味僧古執ノ異安心ニ東派雷同シテ誘導スル事ヲ了タニ弁セ云々六ハ女人
講設立ハ男女混交ノ弊害ヲ避ルノ一策ナル事ヲ論ス七ハ葬式并ニ祖師報恩
講民家執行ノ所由ヲ弁畢ス

鎌數氏戸長役場ノ帰リニ麓ト学校取締久木田実登宅ニ至テ法話ス同
麓池内半左エ門宅ニ至ル懇々説諭ノ上麓ニ於テ一日説教開籠ノ尽力
ヲ依頼置候処同口直ニ談合ヒ岩田諸右エ門宅ヲ借り受十八日午後一
時ヨリ説教出願候此レ偏ニ鎌數氏ノ尽力ト大ヒニ感掌セリ○三名屋
夜ノ差別ナク一村々々御影講問番役中ハ一統永野カ毒酒ニ当テラレ
再三呼ヒニ遣セトモ一人モ不來偶々番役世話方ノ家ヲ尋面會セント
処スレハ皆農業ニ出浮留主ト唱ヘテ出合ヒ不申依之一村々々ノ平門
徒ノ内魁タル者又ハ人望ヲ得タル者ヲ搜索シテ其ノ者ニ着手シ御影
講問ノ景況ヲ巨細并解シ種々善巧ヲ以テ説諭ヲ加ヘ而シテ竟ニ説教
開籠ノ義ヲ依頼致シ一席聽聞ノ徒ハ多ク本派ニ固結致候何如程ニモ
講頭并ニ番役方束縛シテ講問ノ者ハ説教ヲ不聞剩ヘ東派ノ僧ヲ呼ヒ
本派説教ニ異シテ専ラタノムノ詞ヲ主張シ運想談ヲ以テ秀山古執ノ
徒ヲ引入ス或ル知覺正意ノ同行ノ噂ニ先般知覺郷東塩屋某宅ニ於
テ東派尾闕勘眞ナル者出張ノ時同派帰依ノ者ヨリ尾闕氏ニ尋問シテ
曰タノム一念ト信スル一念トハ同カ異カラ聞ン事ヲ欲シタル時尾闕
ノ曰タノム一念ハ伏因究竟ノ極速ノ一念信スル一念ト云ハ第二念報
謝上ノ事シヤト申シテ助ケ玉ベトミタヲタノム思ヒノ外ハ更ニ余言
アル事ナキ杯ト申シテ偏ヘニ古執ノ機嫌ヲ取り草ヲ布テ午ヲ曳ノ金
口ニ附合セリ思ニ実々祖門ノ罪人トヤ云ハシ獅中ノ虫毒トヤ云ハシ
慨傷ニ耐タリ○麓池内某ノ日近日隣村御影講問東派ノ者内用アリテ
吾宅ニ來用談華テ同人ノ曰ク一昨日ハ永野小七郎ノ世話ニ依テ東派
出張ノ御使伯ヨリ表具附ノ御名号并印鑑肩綿珠數屬子ヲ先礼金ニテ
被下誠ニ難有杜合ニ候ト申ス事ヲ報知セリ○同麓岩田某ノ報知ニ曰
東派帰依ノ逆徒共本派女人講取結事ヲ罵曰西派ノ御使僧ハ今般女人
講ヲ組立一日ニ兩三度モ會合致サセ五錢十錢ノ冥加ヲ貧ルトノ惡評
ヲ吹聴シ言語ニ絶タル事ニ候然ルニ東派ノ御使僧ハ夫レニ反シテ一

村一村ノ説教ノ時異加錢ハ皆其処ノ世話方番役ニ被下一錢モ取ラズ
シテ説教ヲ御聴セニ預ル事余リ勿躰ナギ事ト且ツ又南方郷ニ追々説
教所建築ヲ致シ候節タリトモ一錢モ門徒ニ掛ケ不申統テ本山費ヲ以
テ建立スル杯都合宜ク弁解致ス由ニ候木派説教場建築ニ付テハ毎戸一門
二門ノ差立志ヲ附ル杯ト吹聴ス
○東派尾闕ノ返書ニ付直ニ別紙ヲ遣○右ノ通十四日尾闕エ尋問伏遣
候処數日ヲ経ルト雖更ニ返答ナキヲ以テ猶催促状ヲ遣シ候処十三日
未明ニ知覺郷東塩屋ノ方ニ立去タトテ使者空ク帰ル○爰ニ尾寺氏ハ
十三日未明ヨリ上族安藤明信講ニシテ平民高瀬正意ノ者テ力ノ者

御影講問 板敷村中原村統ヘテ御影講无教同様ノ密地殊ニ永野親族
凡八十戸余 縁家多シ然レトモ少々ノ因縁アルヲ求メ大ヒニ苦辛シテ敵中ニ斬
リ入毎戸ニ踏込出達コソ幸ヒ名号ノ利剣ヲ震テ大概本派ニ誘引ス
午前八時與敵ノ儀中飯モ夕飯モ共絶午後八時薩摩名物ノ芋ニテ夜十
二時頃宿ニ帰テ満腹セリト三名同音ニ談ル忠勤感スルニ余リアリ○
尾寺吾世上ノ風説ヲ告テ曰ク白沢村ナドノ噂ヲ聞クニ今般出張ノ藤
岡鎌數ノ兩人高座上ヨリ永野ヲ始メ御影講一統禽獸杯ト罵リ甚々怒
激イタシ居ルトノ風兌アリト云々僕等驚愕スルニ耐タリ我輩ヲ禽
獸ト看做シテ名簿下渡只トハ永野代理ノ四名ヨリ出言ス然ルヲ翻對
シテ僕等ヨリ禽獸ト申シ触スヨフ吹聴シテ首々転派ノ徒ヲ固執セシ
ム右様種々ノ怪説ヲ設ケ或ハ唾誕ヲ吐テ已レ等コソ本宗ノ事ヲ罵詈
讕誘ス反シテ可知○枕崎村ノ内ニ御影講凡ソ二百三四十戸アリ此ノ
所ハ明信講多端アルヲ以テ巡回毎ニ能ク説教ヲ聽聞ス故ニ此節永野
方ヨリ教度ノ使ヲ立呼寄セ候ヘトモ東派転派ノ義ハ同意不致段番役
至テ斷然申届ケ已ニ一昨日最勝講印鑑并名号様名簿ニ照應シテ此ヲ
相渡候別紙名簿左之南方郷御影講ノ村名左ノ通り
枕崎 中ノ釜 小湊 岩崎 大塚 丑野 田原田 菅野 松崎
下り山 駒ヶ満 間登 山崎 白沢 板敷 中原 山ノ口 木口屋
松下 宝珠庵 下苑 瀬戸口 宇都 金山 齒嶽 麓
○右ノ村々ハ三名カハルカハル入込每人ニ説諭ヲ加ヘ御名号并印鑑
ナキ所ニハ夫レ皆相渡シ候事全ク尾寺氏久敷此地ヘ滞在シ地理

ニ委ク且知首ノ同行多キヲ以テ着手ノ都合大ニ宜シ○十六日小湊村
明信説教鐘數氏出張ス○十七日於枕崎角力興行ニ付説教止ム同日東
派ノ伯来テ十六日小湊村御影講番役ノ所ニ於テ説教致セシ事ヲ聞ク
右人曰十一日先生方ヨリ本派出張ノ尾関氏ニ難詰書ヲ贈ラシ処返
答出来ザルヲ以テ知覺郷ニ去リ同派ノ僧ト交換シテ此ノ節ハ東西ノ
旗鼓相對シ筆鋒ヲ散々競ヒ紙上ニ於テ戰鬪ノ希望モアラン歟ト察ス
ト云鐘數曰勝敗ヲ幣上ニ求メ耻辱ヲ実地ノ間ニ招ヲ不知目前一時ノ
利ヲ并シテ却テ千歳ノ笑具トナル事誰カ此等ノ妄想ヲ憫笑セサラン
ヤ僕等筆陳ヲ汚スト雖一翰ヲ贈テ精斤ス次ニ云々 東派出張ノ使僧
ニ遣ス文面写

粵ニ足下小湊村ニ入冠シ説教ノ由ヲ聞ケリ由テ呈一札候響ニ貴派出
張尾関勸貴公該区ニ来本宗講内ニ於テ説教被致候間再往以愚翰掛合
候処一往ノ返答ノミニテ僕等尋問ノ条件ニ付テハ數日間ヲ經ト雖モ
于今何迄ノ応報モ無之不得止更ニ得芳意候則尾関氏ニ呈セシ如ク該
区内ニ於テ從來御影明信ノ兩講アリテ共ニ本宗結社ノ者ニ候処近來
御影講内ノ内口面黒情ニシテ陰謀ノ魁者ヲ初本宗不依ト唱ヘ剩ヘ講
問ヲ鼓舞誘導致シ頗ル禽獸ト看做シテ名簿下ケ渡與候様出願ス噫嘻
講問ノ者彼レガ奸測ノ毒業ニ墮眩シ陰謀ノ詐術ニ陥ル事ヲ毫モ之ヲ
顧慮スル不能ハ実ニ憫諒ナリト雖講頭ノ為ニ庄制セラレテ一日モ本
宗ノ説教ヲ不聞藉々然トシテ不平ヲ囑シ喃喃々手トシテ陋説ヲ固守ス
ルノミ如是ノ際ニテ歸依不歸依ノ差明了ニ取調云々中ニ候ヘハ不日
ニ鹿兒島別院ニ上申ノ上不歸依ノ徒ニハ夫々名簿下ケ渡シ断然ト本
宗社外ニ相決候迄ハ本宗講問ヘ張リニ他派ヨリ入込ミ説教ハ今日交
際上ノ義務ニ於テ些ト不都合ニハ無之哉僕等為ニ一譬諭ヲ説シ夫レ
甲ノ學校ノ生徒同校ノ教員ヲ忌テ乙ノ學校ノ教員ニ從事セン事ヲ願フ
時乙ノ教師何トカ謂ハン察スルニ甲ノ教師ハ掛合ノ上故障無之則ハ
引受ヘシト云々基ヨリ人道ノ權衡ヲ守ル識者ナラハ甲乙共ニ本分ノ
義務ヲ尽サスハ不可有足下今御影講問ハ此本宗講社タル事ヲ識知
セハ縱令ヒ數万言ヲ以テ説教出願スト雖義務ヲ有スルノ教職ナラハ
東西雄雌ノ畔ヲ弁解シテ談区内ヲ速ニ去リ足下講内ニ説教スヘシイ

カニ人民ノ帰仰ト雖義務ヲ離レタル不羈自由ハ万国ノ公法ニ非ル事
論ヲ待タザル所ナリ諺曰柱馬ノ高飛歩ノ餌食何ソ思ハサルノ甚シ
ニモ尾関氏ニ示ス通り自然五ニ筆陳ヲ馳駁シ鬪場ノ場ニ至リ候テハ
聞教不遠且戰後ノ地位ナレハ何如ナル妨碍出来モ難量候フ聞此書被
閱アラハ省察ノ上莞爾トシテ飛錫アラン事ヲ希願候也

鹿兒島本願寺別院派出

訓 導 鐘數 謙讓

權少講義 藤岡 覚音

東本願寺出張

右藏大什殿

○十一月廿日午后三時尾寺中釜村惣中村良八宅ニ至リ談判云々戸主
良八申様明后日中村作次郎森盛助ト拙者ト三名ノ名簿差出シ候由約
定相決候爾ル処廿三日午前七時ノ頃口右三名ノ名簿請取同午后七時
上釜村明信講番役山神與助着手ニテ中釜村御影講右三名ノ外残り同
所講問ノ者中へ転派有無談判云々同夜七時過ぎヨリ枕崎村ヨリ壹里
半計リ在方金山村ニ至リ士族吉見次郎助宅ニテ田布川村明信講番役
其外士族五六名呼奇セ金山村御影講戸計左 転派有無ノ談判終夜致
一泊翼廿四日午前九時帰ル

雑(覚書・その他)

一 「列朝制度」卷四十（都城島津家所蔵）より

宗門改

切支丹改林之義御尋被成候は、面々宗旨檀那寺相究証文取置生子も同前に檀那寺相究申候而五ヶ年に一度つつ宗門改と申候而御入証文寺証文見届木札名書宗旨附仕國中男女不殘渡置申候是を手札と唱申し國中に而縁与又は住所を替申候節は右の手札に札元より証文相添え其居先よりも札元之証文取置申し乍其上毎年人別に宗門改同度つつ堅固に仕其支配頭より役所へ書物相調申候

宗門改之支配は誰某仕候哉と於御尋者家老之者老人引受支配仕其外下役段々に御座候左候而改無別条節改証文切支丹御奉行様へ毎年八月相調候節家老三人之印判に而差上申候 一一向宗御禁制之事於御尋者當國之一向宗は上方筋之宗旨に相替新宗と申邪法らしく障礙をなし同宗のしたしみ強く徒党を結君臣之礼を背き父子之分もなく無作法に有之の仇をなし候義も御座候付代々制被申事候 上使御答書宝永七年

二 覺書

都城島津家所蔵

覺

一 御当家御代々一向宗制禁之儀乍存右宗旨執著之者本尊致格護外面は彼宗旨にあらざる作法にて内心は欲輕宗旨之族多々有之之由依無其隱此度被入御念御改被仰付候事

一 右宗旨之者誠不知御國恩不顧被処死罪流刑密々に引彼党類背御國政罪科太深重也因茲近年稠敷雖被仰付候此度は御心持有之故被差置先例御慈悲之御仕置候間難有可奉存候若不守其旨族は可為各別事

一 如斯難有不憚御政道本尊持之者偽を以申掠輩於有之は當座に搦捕其趣早々可遂披露事

一 乍重言一向宗御禁止之儀當 太守様新被仰出儀にて無之於干今

一 緩疎候は 御氏神之御尤難御通被思召上御神慮題目之御法度候事一就所々御改横目衆而人宗旨之者而三人案内者として差越候間於公領は暖衆可被罷出又給地之在所は領主役人之者罷出入念本尊仏具書物以下に至迄取集可差上事

一 本尊持は不及申惣様宗旨之族は其所於祈願所起請文可申付勿論誓紙並前書之案書越候間具可被為誹聞事

一 此度宗旨相替証拠には何れの寺に付何宗に罷成由書物可取置且又其寺之檀那帳に可書載事付彼族右相替之宗旨不致真仰一向宗に於立交は無有赦從仕持可被令披露万一脇より相知候は仕持可為越度事

明曆二年申二月十二日

宗鉢奉行所御

三 同

都城島津家所蔵

覺

一 毎度一向宗改之儀無油斷様ニと雖申渡執心深々敷輩者色々偽事ニ而本尊並道具書物之類隨證候其段訴人申出ニ付穿鑿頃目ニも右品々多差出候尤所々暖横目五人与迄懸合之書物出置如此仕合曲事深重ニ候得共右宗旨之者ハ親子兄弟も不存もの在之と聞得候条縦各懸合之書物被仕置候ても宗鉢所より訴人之申分ニ付其趣申越之刻嚴其沙汰仕置可申出候若前ニ懸合之書物仕置候とて其違目ヲ存大方之改被仕候はは別て可為越度事

一 本尊持之者近き比ニ自分より品々差出輩士ハ科銀迄を申付其分ニ召置候町浜百姓以下者科銀をも指免宗旨可相易通申渡相返し候向後亦可為其分旨可申越事

一 前方本尊差出候者共へ相付候門徒之儀にて不申出人多由候暖横目組中より相改者人ニても於申出者可為忠功事付近年本尊諸導具差

出候者並門徒之者誓紙未仕輩在之由候間此度札改之刻可申付候間
左様ニ可心得置事

右条々堅固ニ可被申渡候也

寛文五年三月拾九日

勘解由
又左衛門

藏人
又書

如右今度諸外城へは以候使申渡候鹿兒島之儀別て御念遣ニ被思
召上候間彼条書之心得にて各与中家内之人数入念改可被申付左候
てきりしたん宗並一向宗相改候通懣ニ書物仕可被差出者也

巳四月廿八日

勘解由
又左衛門
又書

四 覺書写

高山町役場所藏

写

一向宗御制禁之儀毎度被仰渡候処於今本尊致所持刺密々宗旨を弘
致修行者共有之由沙汰之限ニ候御家御禁止之宗旨ニ致執着候儀者不
忠之至甚以不可然候自今以後於致修行者可被処断科候雖然非分を存
此節自分より本尊等於差出者其科御免可被成候且又内々ニ而右宗旨
之頭取をもいたし候もの此度有弊於申出者御褒美可被下之候右ニ付
而者段々御家老中江被 仰付趣支配頭之面々致承知未々之者共迄不
相渡様可申聞旨今度被 仰出候

十二月

以上

五 証文

寺尾文書

証文

入来

一札年三拾八歳

入米志摩家来

浄土宗

山崎伝左衛門

一同 三拾二歳

右同

右之 女房

一同 五歳

右同

右之子 山崎 磯千代

右此方家来にて候処ニ当分各与中古川半左衛門借屋へ中宿仕罷居候
被召證可給候

一彼者町へ罷居候内相応之奉公可相勤旨申付置候事

一彼者御法度之鬼利支丹並一向宗にて無之候事

一彼者町へ罷居候内出合入組共御座候共町御法様次第可被仰付候若
町中にて入組不相済及御披露候ハ何時も此方へ召寄可致格護候為

後証如斯御座候 以上

元禄六年西七月廿日

役人 頼田 久左衛門印

右同 寺尾四郎左衛門印

鹿兒島築町

古川半左衛門殿

与 中

六 寛政十一年二月
「山崎郷泊野村宗門手札改帳」(宮之城町役場山崎支所々藏)より

(前文略)

一式拾九歳 前一向宗 禪宗

右新右衛門 妻

但右之者一向宗執行仕胸替被仰付候者にて前一向宗と此節可書
戦前宮之城役人証文見届候

右妻事宮之城申川村原田門名頭休之裔從弟長藏女子せんきく為縁
与入来候宮之城役人証文古札見届候

(後文略)

七 「内之浦士族名籍編集録」(白坂正一氏所蔵)より
明治四年辛未二月

唐仁原庄右衛門家

平姓

景元

庄右衛門

為海岸防禦加永四辛亥從加世田被移安政二年乙卯六月三日死

二代庄右衛門嫡子

景則

源右衛門

天保七丙申三月三日誕生母加世田土青木小兵衛女
源右衛門事一向宗依科世代被召放當郷北方村百姓被仰付
候段慶応三卯七月山田司取次以御証文被仰渡候

右同二男

景時

熊襲邊

弘化三年丙午四月三日誕生母同前

三代源右衛門嫡子

景満

初十郎右衛門

文久元年辛酉四月八日誕生母尾辻喜四郎女
十郎右衛門事依親科身分被放置候処今般從朝廷重科者

迄も都て大赦被仰出本来之身分被覆候段明治三庚午正月田畑平之丞取次以御証文被仰渡候

(原表紙)

日新菩薩記

(原寸縦二七糎、横一八糎)

日新菩薩記

日新寺八世泰円守見僧集抄

日新菩薩者清和天皇之種姓薩隅日總七箇國之太守 忠久公之後胤九代 忠國公之孝孫 忠幸公之次統本末骨肉之尊父 又四郎殿是亦忠國公之孝孫也蓋 又四郎殿常謂無子孫自歎曰我父河內守殿平生插惡業令殺衆生物命之罪過今既版我我何補之而享子孫隆盛之天命乎。暗念諸惡私棄而打鐘起除惡積善之願行矣惟辰天下大飢饉於是開慈悲甘露門施行八本而後入田布施三獄之宗前祈誓月月丑時參詣所以希子孫昌盛也此及三年祈願成就之半夜於山中有白衣裝束之神人後六個圍遶前後相告汝方可得文武達道之男子云畢而化去翌夜妻妾妙芳公託靈夢々中相三獄山俯仰：近前變成白飯入懷中了睡夢即覺・懷胎誕生男子（明應元年壬子年九月廿三日降誕名第三郎殿氏神伊作大汝八幡大菩薩月々誕生行別而九月廿三日之月法）今之日新菩薩是也長而仰三郎左衛門尉殿敬其容貌身閱手足大々高々美麗甚奇妙眼晴明鏡於台髮毛散櫻欄之葉溫而厲威而不猛文武兼備以修己治人之道先致其知識正心修身齊家欲治國而入軍陳則不為刀杖之所傷殺所對敵皆伏幕下設起惡心自然退散設有強敵刀箭所傷打之則如以石擲則果無成難者于時相模守殿孝子三男四女各隆於上美於下而非人之所能及也因之嫡男 虎若御曹子為太守 勝久公之尊子就位崇敬修理大夫 貴久公令執當家統領十五代之權尊誠正信故無願不成就終無常至理以求菩提化衆生之悲願年輪四十一而剃髮法体諱号 日新齊公來見善知識參禪學道具仏威儀細行異号為梅嶽常潤在家菩薩乃學名字創建常潤禪院從是時々勤興起仏闡神社祭如在祭神如神在至誠精勤依於仁游於藝教人民利益之仏心恭誦書者与書帙而接之賞管絃者与金石糸竹而接之好弓馬者教範習兵法接之如是應機接物敬事而信節用而愛人是故近者說遠者來時人見聖代矣

① 御名乘忠良

之種姓人王五十六代文德第四御子御母大皇太后藤原高子年号貞觀治世十八年御年八十一号小尾御門法名素貞

藤原神代天兒履根命裔也昔神代始天兒履根尊令下地神常州鹿島之明神也清和六男

第一陽成院 第二貞親王 第三貞景 第四貞保 第五貞平 第六貞純

源氏此六番貞純親王始源家之先祖也

越前若狹伊勢信濃

親王大将大臣判官自是号嶋津法名得仏

法名大岳善公。妙芳公。法名梅窓

法名大年道登 齊名一顯。中相三獄山想ハ不著

法道称越山超公

法名德瑤

論語曰溫一益 聖人全体渾然陰陽合德故其中和之氣見容貌之間者如此

御法名大中原等庵主

依仁論語四 私欲尽去而心德之全也工夫至此而無終三食之進則存養之熟

無過而非天理之流行

礼。采之文。射御書教之法皆至理所寓而日用之不可闕者也

敬事而信節用而愛人使民以時 論。治國之要在於此五者務本之意也論七

被其沢則悅 聞其風則則來 然必近者悅而後 遠者來也

孝行並作善之事

諸行第一孝儀ヲ先シ御父御母ノ御為ニ高野山ニ入神月拜金襴ノ袈裟二衣裏書ニ嶋津相模守殿御寄附ト記セリ並黃金ノ幣二流金襴ノ幡廿五流灯明堂ニ定灯今ニ至テ昼夜燭々タリ

月々御先祖往生ノ日ニ六十箇ノ僧供養セラル此ノ中登超芳三公ノ縁口ニハ童護卓ノ書宿ヲ請シテ自尊牌ノ御前出仕棹椅ニテ御手長意慢無之然御才七十七臨命終時霜月十一日大年登公月忌ノ日ヲ迎ヘ細行威儀ヲ具テ御牌ノ御前ニ出御セントシ玉フニ肢躰自由ナラズ近臣左右ノ御手ヲ扶ケ掌ケ腰躰ヲ抱キ仏前ニ倚セ進セ御膳ニ手ヲ掛ケ御手長ノ模ヲナシ給フ乃抱ヘ立テ水晶簾内ニ引籠ラセ進ラス

此事見聞ノ人皆感歎セリ

諸所ニ一向宗起テ父母ヲ輕ンシ仏神ニ疎ズル者人間ノ作法ニアラズ
是等ノ徒党成敗ニ根ヲ斷テ葉ヲ枯サル事惡逆無道ハ天魔ノ所行
天下國家ヲ乱ス此ノ魔賊ヲ誅滅スル政道ハ身ヲ忠孝ニ砕キ心ヲ守
社ニ繫テ子孫長久ノ隱德ヲ積ム人道ソ人之有道也如木之有本如水
之有源無本而有末者末之有也其根蟠空劫葉榮今時或ハ原泉ハ混々
不舍昼夜有本者皆如是然ルニ本ヲ蔑ニシテ何ゾ後アラシヤ因之神
明仏陀ヲ忘レ父母先祖ニ背ク輩ニ於テ制禁ノ辛カリシ事祥左ノ御
詠

魔のしよいか天眼おかみ法華しう

一かふしうにすぎのこさしき

紀州根来寺ニ御父御母超公登公芳大師ノ入牌月拝金欄ノ袈裟ニ衣裡
書ニ

島津相模入道殿日新公御寄進トアリ

加世田ニテ今泉寺ヲ始メ六坊御建立此ノ中ニ仏堂ヲ立テ巡礼觀音大
士千手三十三体城都ヨリ御下シ点眼安座ノ供養諸宗ヲ動ス並今泉
寺ニ金欄ノ幡二十五流

福昌寺ニ釈尊八相画像再興金欄ヲ以ス別テ十六羅漢ノ画像十六幅寄
附セシム表給龜甲ノ紋

同塔頭花舜軒建立本尊無量壽如來如來安置領地水田三町寄セラル鹿
兒島如來堂創建本尊弥陀三尊安置

坊之津一乘院繁興仏具等ヲ改メ金欄ノ幡廿五流塔頭一々御建立並同

津ノ仏寺神社創建再興

蒲生實光ツハ幡宮御建立ノ御誓願ヲ以テ即時ニ打平ゲ即時ニ御建立

御遷宮ノ口白銀幣帛一流御拝進

鹿兒島諏訪大明神宮御再興社頭神物皆ナ改之黄金ノ幣一流御寄附此

ノ巾大小仏閣神社總テ修理ヲ加ヘズト云事ナシ

伊集院ニテ仏寺神社御建立仏神領隨分御拝進比倫ヲ絶ス

伊作諸寺家御建立別シテ八幡宮再興御興以上ノ飾リ金銀ヲ以シ領地
ヲ寄附セラルル事五社分限在之

加世田五社ノ興起代々修理ノ為メ一々ニ神領ヲ寄セ飾々祭祀ヲ專ニ

シテ國家興隆ノ本ヲ努メ給フ

同益山八幡御興ノ裝束神前ノ莊嚴御興シ下リノ時ハ其ノ光リ草木ニ

映ス其レ御拝進ノ門元十ヶ所先ツ年頭元三ノ祭詞ヲ勤ル門元ヲ元

三田ト号シ二月朔日祭詞二月田三月三日ノ御祀リ三月田五月端午

ノ祭礼五月田六月夏越シノ祭リ夏越田八月彼岸般若經読九月廿五

日大祭礼諸役者苦勞ノ輕重隨分領地ヲ附セシム霜月朔日ノ祭リ霜

月田ノ門ヨリス右四時ノ祭祀時々ノ御供四十八膳奉獻

同宗廟廣屋大明神ノ興隆宮原十二町御神領トシテ年中十二月ノ祭祠

月々ノ儀式全右

野間大権現ノ興起神物ヲ改メ白銀ノ幣帛御拝進年々正月廿日ノ祭礼

是レ回ノ君主ニ御対面ノ神慮歟依テ殿中庭前ニ神宮ヲ嚴飾シ奉請

之終日ノ音楽神明ノ慮リ深秘ノ議ノミ現前スルニ人中天上舌ヲ卷

キ心ヲ割ク

阿多ノ五社再興何モ神物皆ナ改之

出布施ノ諏訪大明神宮並仏寺神社御建立比倫ヲ絶シ又

同金峯山三社ノ建立美々敷キ事言語同斷古來今ニアラズ白銀ノ幣帛

二流御拝進

御家郷方々諸堂社三年回リニ檢者筆者ヲ巡シ修理敗壞ヲ記取シテ糾

明賞罰無縁ノ堂社ニハ領地ヲ寄セ修理ヲ加ヘラル

於阿多後父 犬年道登公ノ御為メ一山ヲ開キ給フニ岸涯ヲ斬リ広メ

岩石ヲ引キ平ゲテ仏地トシ七堂ヲ造畢シテ本尊千手觀音薩埵ヲ造

立シ 登公ノ御影ヲ画像ニ入レ現在近習臣等ノ形像モ亦在日ノ伺

候ノ如ク御前ニ写シ本尊薩埵ノ座右ニ安置シテ千手山大年寺ト号

ス点眼供養ノ日世財ヲ抛テ旋門ヲ開キシ孝儀ヲ歎美シツル事末法

ノ今ニ至テ伝語ス

御影堂 加世田ニテ梵刹創建ノ御志シ何地ニ立テ繁興アラシヤト心見勘校シ

当地ヲ取テ鐵子初ヨリ普請ヤム時キナク田ヲ填メ溝ヲ塞ギ土ヲ築
キ平ゲテ宮殿ノ次第上ミヨリ下モ馬屋ニ至テ皆板葺ニ造畢シテ常
潤院ト号シ本尊長谷寺觀音大士弥勒釈迦ノ三尊長安ヨリ御下シ安
座点眼ノ日門前ニ市ヲ成ス榮耀此時ニアリツ當住不異和尚一頌ヲ
製シテ唱ヘラル三仏異名同一体中尊点眼共生光現成常住不遷底鳥
甕双眸照十方

後日御影堂修造了テ尊像安座左右六道ノ教主地藏大願王一千体並石
浮圖十三基御堂供養ノ調和郡臣悉ク万歳ノ詞ヲ移シ詩ヲ賦シ歌ヲ
詠テ半ハ此ヲ感悅シ半ハ彼ヲ感歎ス

菩薩二首御詠

見ぬ夢のさむるまぐらはいたつらに

萩のかれはのかせや吹らむ

願以此功德普及於一切我等為衆生皆共成仏道ノ心ヲ

世に広く妙なる法をもろとも

おほふことのあさ衣かな

是時諸財皆ナ院裡ニ寄附シテ曰ク此ノ土ハ闕滅世界諸國諸所盛衰

転変如手翻覆依テ此ノ一書ヲ留ム

奉寄附

薩洲加世田庄内之事

合大浦名長田之門

右所志者依法華万部

読誦之儀建立一字堂

安置地藏菩薩並石塔

永代不可遺却之者也

天文廿三木虎年二月二日

嶋津前相模入道日新御判

保泉寺

住持盤忠 衣鉢禪師

其後チ大浦名ニ柴内門津貫名ニ川床門ヲ寄附セシム此ノ兩門ノ置

状ハ当寺回録其ノ時剋焼失セリ是ノ日家財校割總テ焼失ヌト雖モ
御堂尊像不焼ノ徳アル事在世ノ日治心修己ノ精神不生不滅ノ法門
ニ入テ金剛ノ正体タル故ナリ因之思之未來永々尊体ヲ仰キ見ル事
眼前今ノ如クナラン

① 御終父

② 龍護山日新寺

③ 右(論七)所謂祭神如神在之御勸是也

④ 大學 其本乱而未治者不矣

⑤ 隱微ヲ積ム人道 孟子 得道者多助失道者寡助之云云親戚畔之助之云
天下願之

⑥ 孟子原泉混混不舍日夜盈科而後達放乎四海有本者如是是之謂取爾

⑦ 子孫ノ事也

⑧ 日新君後父一職

⑨ 徙移日御能七番皆御一身之功業狂言六番以砂石集御製作

⑩ 御繪堂

⑪ 後世

伊集院ニ梅岳寺創建尊容ヲ彫刻安座シ捨田五町ヲ寄セシム菩薩宗門
ノ大事参シ了テ法ヲ三枝和尚ニ嗣ギ令彼住持故此ノ法意モ亦 菩
薩ノ正脈タリ

加世田保泉寺客殿再興 菩薩自山田山ニ杣入り楠一本ヲシテ十六日

ノ普請タラシム斯ノ中御飯屋ノ栄花美々シキ事妾婦連床別タラズ

御一族縁者其外近習男女ノ宮仕不信従スル者ノ鳥ノ数々飛ガ如ク

八方ノ太道ニ通イ座生祝物糸ヲ繰ル振舞ノ休時キナク寺中造管ニ

及モ亦然カリ 菩薩臨終ニ至テ嫡家大臣撰議評定ヲ遂ケ保泉改テ

日新寺ト号シヌ

加世田治平稻荷大明神ヲ先シ鬼門ノ方ヲ勘ヘ安置シ天ノ時ヲ取テ

聖君ノ御所ヲ開闢御主殿創建其ノ上方ニ神社ヲ造リ稻荷本地ノ尊

容六休玉城ヨリ負戴シ來シテ御遷宮神領水田一町神主山法師日々

香ヲ盛り花ヲ捧テ拝見スル事懈ラズ

加世田來巢ノ皆道ニ六地藏建立上段ハ弥陀ノ三尊下段ハ六道ノ能化

住ノ車輪念仏ヨ書キ巻立テ別テ闕死衆ノ假名実名其ノ小者衆付テ打死ノ者ニ至テ書乗セラル巻物一通ハ念仏ト齊ク巻籠メ一通ハ弥陀地藏ノ懷中ニ籠テ供養ノ日和歌一首ヲ詠シテ押サル

一切の罪もきえなむ弥陀地藏

四十九の身の四十八はん

七月十六日ノ朝大ニ彼ノ六地藏ノ前ニテ大施餓鬼ヲ勤行シ菩薩出御セシメ戦亡餓鬼御手ニ繋ケ一々ニ名字ヲ喚テ盆水ヲ奠リ給イシ是ヲ戦亡施餓鬼ト名テ未法五濁亂慢ノ今ニ至テ怠慢ナク修セラル雖然其ノ地藏ヲ崩倒ス於是日新寺八世泰円僧再興セシ形模ハ三層

威音前今時日用

ノ石廟ヲ造ル上段ハ空王殿鳥兜ノ兩照天子中段ハ釈迦如来弥陀葉師觀音ノ尊体是レ即チ日新菩薩大天尊容ト觀念シ御法名ヲ銘ム下段ハ幽冥ノ教主六体列行右ノ尊歌ヲ鐫メ点眼供養ノ日国家安全衆生濟度ノ願文ヲ唱フ

諸仏安座拜点眼

①摩石刻

本体無相何垂迹 各掛垢衣坐劫石 願

睨于落生日月光 大千世界影赫々

情観破過去久遠事諸仏住於大神通現威神之力能令一切衆生離一切苦一切病痛能ク解一切生死之縛破生死魔軍諸惡悉摧滅火不能燒水不能漂惡規普接取安養極樂是此大悲願力豈有古今異乎因之起石廟觀之諸仏及六道能化住此塔廟現其神力于時擊鼓鉦以華香恭敬供養歌頌仏德尊重仏恩思其可得功德如上所說能令無量一切衆生誘引四禪天上安宅

切實四海清平 三國盛衰 現治怨讎皆成慈心

來生仏想弥有利益 畢竟如何見諸仏現成開闢

桃唇紅李花白

阿多加世田ノ兵乱万瀬川鎮守ノ渡ニ至テ箭軍サ逸物ノ射手ニ鏖ヲ揃ヘ指シ詰引詰射立ラレテ阿多ノ地ニ引退キ打向イ睨タル所ニ追係破入ル猛勢ヲ射向ケ下瀆テ散々ニ責戦イ敵數十人打伏セ分取高名此中肥後掃部左衛門宮原年人并尻四郎左エ門討死ニス此ノ死地ニ

於テ彼等冥途ノ灯トシテ六地藏造立其貌ヲ明々タリ

弓箭ニ諸臣許多戰死ス彼ノ精靈ニ朝夕香ヲ焼キ奠リ惻愴シテ成仏セシメン念イ内ニ在テ色ノ外ニ顯ルルハ其子孫々ニ至テ領地ヲ任セ彼等ヲ見給フニ双涙ヲ忍ビ彼ヲ撫サシムルニ股肱ノ如ク愛セシ其奉猶シ父母ノ如ク慕イ申スノ実ハ寝モ覺モ身ヲ捨テ骨ヲ粉ニセント思フ心ニ仁君ノ御心ヲ占ムル人々身命ヲ惜マス武威ヲ勵タル心ヲ子孫ニ語伝ヘタ々其ノ骨髓ヲ統來テ今更ラ武進ニ於ハ薩摩衆ト答レアル事偏ニ菩薩ノ慈悲心中ヨリ妄心ノ怨敵ヲ退治シ本性ノ仏心ヲ諸士ニ寫シ置カレシ勇猛ノ精神強剛ノ正信迷ハザルノ道ヲ至今參差セズ

毎年七月盆中御先祖ノ靈燐在日御前ノ御振舞威儀廻行五体ヲ地ニ投シ御崇敬言葉ヲ以可述者ニアラス次ニ諸臣戰死ノ精靈并一切ノ靈冥ニ御弔ノ施設給テ不可議不可得ノ心行奇異ナル風情而夜千灯或ハ万灯籠ヲ要ス是時御家郷ノ繙素皆細工ノ上手ヲ選デ万般伎巧堯舜禹湯文武以來ノ有様興亡盛衰ノ軋變哀榮愛惡ノ形容ヲ作り顯シ魂帰棚上ニシテ灯火ヲ挑ケ出ス処ハ犬ノ馬場四面ヨリ始來巢ノ皆道左右櫛ノ櫛ヲ並ベ終リ日新寺常潤院ニ至テ光明燐燐タリ然ル間タ貴賤郡集シテ是ヲ爭見ル事市鄽ノ如シ

福昌寺ニテ過去帳三幅用意シ弥陀如来ノ形像三昧面図ニ入レ下棺ニ所々合戰死亡ノ者ノ実名假名ヲ書乗セ付テ討死ノ小者ニ至ル迄テ不殘記彼ノ精靈御弔ノ為ニ戰亡領ト号シ水田三町戰亡帖ヲ合テ寄附セラル依之代々ノ住持職毎朝ノ行事時々ノ供養變易ナシ田布施常珠寺ニ於モ亦水田二町亡領トシテ塔頭ヲ造立シ時々ノ法事懈怠ナカラシム

加世田日新寺ニ戰亡領水田三町過去帳ヲ調飾シ右ノ如ク戰亡衆ノ名字ヲ書乗セ日々盆水ヲ酌七月盆中供養施餓鬼斷絶ナキ者也毎年節々阿多加世田ノ僧侶ヲ殿中ニ聚メ仏法商略真言家ニ於ハ論議法談其學得ノ深旨ヲ心ニ聞明メ發明ノ人ヲシテ寺家ヲ領セシメ僧俗隨分恩賞アル故ヲ宣言スラ教賢妬賢者殃及三世進賢寶賢者德流

子孫云ヘルヲ看ヨ人上ニ毀譽賞罰アリ賢愚禍福アリ皆此レ我ニ在
テ他ヨリ出ズトノ御教ヲ以テ家々ノ芸能ニ誇テ学ニ勸ミシ故ヘ宗
々ニ許多名アル人興テ繁昌タリシハ 昔薩ノ内証万法一如法界一
心ノ悟ヨリ一切ノ人ヲ吾一子ノ如ク撫育シ給ツル慈悲深重ノ御情
ヲ忘レラズ至今時々汗涙ヲ流シ感慨多シト見タリ

加世田ヲ打テ一和ニシ皆道ノ往還昼夜休時ナシト雖モ阿多境ノ大河
ニ支柱シテ渡船ヲ相喚相待テ此ニ艱難ヲ経 君聞之憐ミ給イ民ノ
上トシテ民ト樂ヲ同ウセズンバ民ノ父母タラシト悲願ヲ起シ長橋
作興ノ企テ先ツ善橋ヲシテ便トシ板橋高サ數段横三間余欄干數柱
ノ飾リ木帽子金物ニ和光ノ影映シテ万民犬馬ノ往復滞在ナク極重
ノ惡人モ苦海ヲ避ケ險塗ヲ忘ルル方便千仏ノ見解他ニアラズ是以
テ諸臣ニ示サル吾往生ノ後チ御用ノ追隨ニハ此橋興隆ガ程度大施
タルベシト説々聞キ知ラシメ終ニ供養ノ日臨濟曹洞宗天台真言家
一等ニ橋上ニ混雜シテ法花説誦了テ大墓ヲ築キ高顯樹ヲ建ラル其
文句云極聖自心無妙理 拳頭応化即三身

大家真道天真仙 本是山中一古椿

忍世界胆部洲大日本国西海道薩隅日洲大府君日新齋主掛冠於神武
門以來悟仏祖無上菩提心地而離三界輪迴迷身所以道鬚髮人之所重
也最先剃除尊貴人之所敬也儉約其身然後準擬必竭而勤修仏之四弘
誓願久矣一日忽然原平衆生無辺誓願度之一句而未來遠定彼岸現在
近定此岸矣以四柱三万六千地軸而為柱矣以縱橫四十里劫石而為梁
矣世界平等而為橋板矣以新定機而為釘樞矣至万物一鉢生仏不二之
理而畢功焉弘誓之力偉哉正當橋木梁供養之日謹集山門列刹之
耆宿命真言一宗之諸徒而誦誦法華者也 竊以 大願主藤氏 忠良
公 外施惟情内抱至仁常樂我淨之四德護連城壁慈悲喜捨之三昧
大法輪智梯慈航渡驛馬石橋略約度我度人若向無寒暑則偏中有
正今當熱時熱殺則主中并資燭々大火欲西流颯々微涼弘量塵可尊當
來福報奇哉現成果因蘭盆已過秋晏時淨離然與磨即令臨橋上底之一

旬子來耶是不來是上不用諸賢利齋下何受六道沈淪
于時天文十四年乙巳初商口大願主忠良合爪

① 僧祇劫者八百四十里石以淨居天衣鉢時也又

八百里城中滿芥子取時也云々 智論万百劫石白由旬城云々 一由旬
大小乘不同有之小乘六町一里十里曰一由旬大乘六町一里四十里為一由旬
也而大乘十六里為一由旬事有之也或云摩訶劫說入論增減劫明廣四十里高
八十里盤石天三人一年一度下大梵三珠衣下料足三銀重衣ヲ以摩々悉摩
尽一劫ト云也次增減劫世界建立最初人壽命八万四千歲也是が百年一減シ
云々十歲ニ成ルヲ一減ト云也又十歲百年一増云々壽命八万四千歲成ヲ一
増劫云也如此増減スル事八十度在ルヲ一劫ト云也如是人若八万四千歲ヨ
リ十歲迄減末每刀疾飢三災云事在之是ヲハ小三災云也

② 孟子 告齊宣王曰君之視臣如手足則臣視君如腹心君之視臣如犬馬臣則視
君如國人君之視臣如土芥則臣視君如土芥

③ 孟子 為民上而不與民同樂者亦非也樂民之樂者民亦樂其樂樂民之憂者民亦
憂其憂樂以天下憂以天下然而不主者未之有也

④ 七尺曰咫

⑤ 常殊寺七世俊安和尚燒香師也

⑥ 以淨居天衣被摩石也

⑦ 雲門云

我愛昭陽新定機 一生為人拔釘板

⑧ 仏果自性常住也 仏果無上安樂也 仏果無我大我也 仏果自性清淨也

⑨ 千和美下欲識他運金滿一城不博此玉也王乃為巡城摩

⑩ 趙州僧問如何是有橋師云渡驛渡馬云如何是路師云ケケ々度人

何国者トモ知レズ此ノ境ノ海上ニ走來破艘シ愁涙ニ沈ム事蓋耳触テ

乃チ虚船ヲ新造シ与ヘ粮ヲ恵デ婦孺ヲ勸シ施仁至德遠島ニ流ル選

年流球国ヨリ礼謝ノ使節并封書宝貨奉ラル進上

新春之吉慶千祥万瑞珍重

鳥之百姓依難防逆浪其津於片浦破船故御造作罷成候猶以被下渡船

安着旧里恐悦不些之旨御懇切不及是非候 仍為使節差違善寺令致

渡海表禮難為不腆之万物

一、三十両 黄金

一、三十斤真南番香 一、三十端線織地 一、二十斤紅糸
一、二十斤白糸 一、二十斤五色 一、五十端白布 此外
密砂精綠醃種々藥方進上之委細月泉長老可被達台聰者也

萬渚多幸恐惶不備

進呈 島津日新齋台閣下

小湊ノ津ニ於テ曉天ニ南蠻船岩上ニ走リ上テ破却セリ大船ニテ人数
三百余員ノ財宝天下ニ在ユル程珍物幾千万ト限ナキ故ニ所々ノ人
勢牛馬ヲ催シ財物ヲ搬事夜以日ニ次ク其後テ御洞ロ僧俗親疎不隔
遠近上下ヲ不分押並テ右ノ貨財ヲ施行セシムル則ハ神社仏寺ニハ
沈香法衣ヲ以シ其餘随分絹布紅糸木綿白布或ハ藥方扇子匣扇ニ至
ルマデ所殘ナク与ヘ賜リシ好物至今護身ノ符トシテ子孫ニ伝附セ
シ人ノミ

犬ノ馬場ノ並松何レモ枯衰スル事アリ此ノ時 菩薩宮下アリシハ千
手陀羅尼ノ札ヲ押セバ生返ルト云フ併テ宗々思々ノ祈念タルベキ
尊命各々行法ヲ勤メ札ヲ打タル然ニ千手陀羅尼ノ札木毎ニ朽葉飄
零シ青葉繁茂タリ至今其ノ緑ヲ見ル事聖君心ノ所欲皆天理ニ当
テ其德草木ニ及ベリ

一説一芸ヲ抱ク者片土山里ニ在リト雖モ詔命アリシニ位ノ高下ヲ不
選下部唐人ニ至ハ其本領主ニ僞ヲ返シ名字ヲ授テ諸侍ニ交ヘシメ
出家ヲ好スル者ニハ仏經仏衣ヲ与テ之ヲ立タシムル事才智備リ出
ル者ハ天之明命ヲ顧ル故ニ天之威ヲ畏テ賞之宜ヘリ

百姓等ニ向イ無理非法ヲ以テ誅滅シテ檢斷ヲ行イ追討シテ地利ヲ貢
ル邪見放逸ノ侍イ驕奢時ハ其所帶ノ職ヲ召放シテ教戒シ給フ夫人
成テハ有上驕ラズ仁道ノ心ヲ天理ニ括テ恩ヲ万物ニ施シテ仰テ三
宝ヲ崇敬シ俯テ人民ヲ愛敬シテ人ヲ殺ス事ヲ嗜ズ民ノ時ヲ奪ハズ
刑罰ヲ省キ稅歛ヲ薄シテ民ヲ飢ヤサズ寒ヤサズ人ヲ愛スルノ心傾
刻モ懷ニ忘レズシテ家ヲ保チ困ヲ安シ天下ヲ得ルヲ所以者何トナ
レバ等約之失天下也失其民失其民者失其心也得天下有道得其民斯
得天下矣不仁ニシテ感世鄙民天子ハ不保四海諸侯ハ不保社稷卿大

夫ハ不保宗廟士庶民ハ四体ヲ保タヌゾト仁政ヲ行テ如然章篇ヲ諸
錄ヨリ書拔キ大臣歴々賜ラレシ其ノ万之一ヲ題之

蜂起ニ出軍行師時ハ命宗々祈念行法仏前神前鐘鼓聲ハ休時ナシ因之
所向城廓無不以運掌是時敵慈合戰死亡セシ訃音 尊耳ニ針セレバ
即曰夫仏ハ一切衆生皆是吾子トコソ刺定アリツルニ双涙ヲ忍テ携
花汲水御奠ラセ給フ其場ニ於テ恒例ノ如ク彼此ノ死骸ヲ一坑ニ埋
却シテ大塚ヲ築カセ大施餓鬼ヲ勤行シ周遍法界ニ四備供奉セシ功
德ガ彼方此方ニ相溢テ人身ニ染ム時ハ心ヲ碎キ肝ニ銘スル故ニ先
世ノ怨敵モ現在ノ胡敵モ脱甲橫槊降参ノミアリツ

大乘妙典十二部書ヲシ阿多ノ入來田原ニテ十二所ニ奉納経墳ヲ築カセ
テ供養ノ日柴居ヲ架ヘ仏座ヲ調飾シ日新寺盤忠和尚ヲ焼香ノ師ト
シテ濟家洞家真言天台宗列座シ法華一部連経誦誦セシムル回向ハ
諸三宝照鑑闢死戰亡ノ衆生即成仏ノ直因ヲ仰ギ覺ハルル訟ヘナリ
加世田河野辺ノ疆大当原ニ於テ亦妙經十三部土塔十三基供養ノ功勳如
右戰亡衆頓悟成仏ノ願望ナリ

御代ノ政道ハ三代ノ隆シ其法相備テ好字好德重天理三宝顯天路地信
心五常ヲ先シ内交於國人暫時モ惻隱ノ心是非ノ心ヲ不措殺害人
傷ヲ畏テ禍之ノ家ノ賑孤德ノ者ヲ憐ミ自奉公甚薄賦役甚寡キ故ヘ

萬民富樂デ飢寒ノ色少惜恨ノ愁ナケレバ謀叛ナク逃散ナク百姓載
君如日月親君如父母思慕セシ謂ハ天地神明与物推移ル其明輝其心
時ハ人中不邪四時不乱天上人間平等之法ニテ風モ以時雨モ以時之
天地霽湿セバ草木モ繁リ郡聚合衆モ豊ニシテ 君子ヨリ以下庶人

ノ子弟ニ至ルマデ皆ナ榮ヘ建ク榮ヘヲ花億億至今代六十州ニ芬々
タリ

天公ノ御行モ模稜兩端ノ持シテ暗レントシ雨メナラントシ有時而昏
迷容人欲ニ蔽ヘレテ強竊二盜ノ罪業ヲ作ス 仁君常ニ刃傷誅罰ヲ
怖レ口雖モ仏法第一大慈大悲ノ教誨并ニ五戒ヲ以テ為宗 法武

道ノ家ニ於テ不可有不誠如是我覺 仁君愛ニ戒之之道牛割キ申指
 シ張付ヲ通シ猶罪流罪死罪ノ三刑モ亦緩之至極ノ罪死地サシ
 向ケ重科ハ遠流ニ処シテ盜賊ヲ燒鉄ヲ額ニ印テ放サセ給此外不
 幸者其輩ハ未法五濁亂ノ時世仏魔天魔ノ所行禁制異ニ繁キモ亦
 天ハハルハル機則三略治國安人也亡國破家失人也
 唐船商仙ノ器財金縷ル古人尊即チ閉目瞞眉曰是妾國ヲ之
 斧斤珠玉金縷ハ実雖為迷心鳩毒此ノ艇中ノ貨財總官物
 命速取於貴前比難大散サ
 セルルモ不可不取見之乎諸余貨貨以テ欲スル偏ニ彼ノ砵
 碗ヲ捨テテ万民非業ヲルベキ精成債功
 勸善書ニ天下之禍莫甚人為隱德者亦莫大於活人云ヘリ
 博奕ノ制甚以不輕其ノ当人ニ於ハ非沙汰之限宿本ニ至テハ科ノ深淺
 ス分チ或ハ傷害或ハ所領ヲ沒收シ所帶ナケレバ流罪ニ行ハル是人
 ヲ賺シ人ニ掠メラレテ後遺方ナク惡逆無道ノ企出来ヲ企事偷盜ノ
 根本タルニアラズヤ
 僧還リ成敗ハ親類由緒ノ計タリ無沙汰ニ於テハ諸侍見合ニ禁タルベ
 シ以為難得仏心ヲ字ビ難受仏体ヲ具シテ其性心ヲ持タズ塗炭ニ落
 入ル無性ノ者ノ恥辱ヲ不存親ノ命ズル行ニ背ク事一盲衆百引ク
 罪業猶更ニ繁シ是ヲ以テ還俗ヲ好ンズル輩ハ他國ニ趣テ走リツ併
 テ親ヤ兄ノ斷絃ヲ統シ若シ言上ヲ遂ゲ上意ヲ以テ繁目タリシ是又
 無性ニアラズ能ク本心ノ守リ一条ノ紅線ヲ引テ諸音響ク調フモノ
 ナリ
 於諸侍御制禁事額上ヲ荒蕪シ口内ヲ不機牙齒ヲ不黒爪上ヲ不
 研座中ノ起居履闕御門ノ出入不謹戲笑言語シ威儀胆如タ
 ラザル侍イ出仕停止アル事節々殊更ニ歳シ十八九若冠ノ人々額ヲ
 広メ鬢髮ヲ取リ山寺ノ酒屋ヲ嫌疑スル輩ニ於テハ御折檻其父ニ帰
 シテ甚シキヲ以テ其父亦親子ノ機縁ヲ放捨スル故ニ寺社ノ住居暫

月ニシテ鬢毛ヲ起テ額ヲ直シ如本粧成テヨリ御赦免出仕アリツ
 ① 勸善書云夫一念機惡微而休咎極速且修善蒙福積惡蒙禍善惡之報理有必
 然
 ② 孟子一不仁不義則國危
 ③ 左伝一有能者不得蔽隱
 ④ 孟子
 三代之得天下也以仁其失天下也以不仁國所以廢存亡者亦然
 夫仁天之尊爵也人之安宅也
 ⑤ 孟子
 六國一三三完則國安
 ⑥ 孟子
 六國一三三完則國安
 ⑦ 孟子云無則國非人也則隱之心仁端也禍深也
 ⑧ 年貢
 ⑨ 六韜
 ⑩ 三略上
 ⑪ 遺錄
 ⑫ 紅線ハ系圖止錄
 ⑬ 論語一立不中門行不履閭
 ⑭ 衣前後襖如也 櫛ハ整兒
 不孝ノ禁制
 田布施ニテ御仲間孫七ト云者父ノ四郎右エ門ニ對シテ評論ノ余リ杖
 子ヲ取リテ向フ此事已ニ尊耳ニ触レテ傷害ト宜下アリシ速ニ彼ヲ
 害殺シテ土葬シヌ 普薩願テ其レ孝行ト者八万ノ細行千行百
 行ノ先タリ所謂千經万典孝義為先天上人間方便第一タリ是故二三
 千之刑法モ亦不孝ノ者ヲ先ンズ然ルニ何ンゾ彼ヲシテ輕ク行ハシ
 ムルヤ依之彼ノ死骸ヲ掘出テ不孝ノ二字ヲ生鉄ニ模シテ燒之其額
 上ニ火印ヲ指シテ道途ニ曝サル如是ノ罪業ノ模校シ刑罰ニ目ヲ驚
 シ耳ニ針スレドモ忘ルル者ノ爲耳
 田布施ノ垂ノ腰ニ長井弥五郎ト云ヒシ人アリ對論シ惡口最中ニ聖君

菅原
御出行此ノ雜言ヲ聞給テ路中ニ滞在シ宮原六郎ト召ス諾シ頭ヲ地
ニ低ル何事ゾ聞テ參レ聞テ欽デ母ト口論ヲ言上ス 君双眼ヲ閉ヂ
暫ク思惟シ誅滅ト宜フ六郎庭ニ立テ跡五々ト喚フ応声出テ向フ
一打ニ誅シテ却來リ御前ニ跪キ如是ト奉奏聖君顔セテ解カズ即チ
歩ヲ運ビ給フ

高橋ニテ辺牟木庫藤兵衛尉親ニ對シテ論量返答此事尊耳ニ入テ御扶
持水田一町ヲ召放シ大赦ニモ之ヲシテ免許セシメズ右ノ党類類時
々起來ル事余多アルト雖モ不孝ノ淺深御行イ急緩中ヲ分ケ給イシ
ヲ以テ教行ヲ思量スベシ

常行

天下ニ不思議ナル面影ノ生ズル時ハ 三嶽ノ御宝前ニ御座ヲ籠メ一
天大小ノ神祇一体一心ノ觀法彼ノ御圖ヲ拝見シ願ルル冥慮ニ任テ
行レケレバ善根ハ弥ヨ繁茂シ突障ハ即チ消滅シテ家國興隆タリシ
ハ菩薩正ニ三嶽ノ御再誕ニテ御座マシツル故ニ指回フ一句一言モ
神体天口ヨリ出ル尊命其ノ毎事相シリシハ三十年已前ト想ルヤ今
ノ時ニ當テモ仰セ置カレシ御言葉ヲ草木国土人天ニ當テ見ルコト
般々明鏡ニ影ノ移ルガ如シ

田布施三尊三所ニ就ニテ丑時詣テ毎夜弘河ニ至テ御クウリヲカケ一
七日ノ誓願成就シ畢ヌ是ヨリ仏前神前ノ行イ三百四十八戒ヲ修ス
ル沙門ニ依佈タル事説キ尽シ難シ

浅からぬ頼みをかけていくたびも
のほるみたれの神よあはれめ
下までもにこりはあらし浅からぬ

心の水を神しみたまは

御看經所ハ二階造リ柱ハ雲ニ竜ヲ五色ニ葺礎ニシ其上□ニ仏檀ヲ構
ヘ仏具等護摩灌頂ノ案前ニ異ナラズ日夜ノ勤行僧法師ノ行イ先ツ
曉天ニ近臣凡上ニ立花灯明香鑪香合并鬘伽ノ水ヲ備テ御前ニ捧ク
即チ香ヲ燒キ水ヲ奠リ身心ヲ収テ觀法觀念經咒諷誦シ了レリ是レ
此ノ御勤ハ定否定灯法華訓詁ノ持經怠惰アラズ

家國繁興長久ノ爲ニ一箇國ニ於テ法華經六十六部御奉納ノ御誓願乃
チ并尻神力ヲシテ回國セシム然ルニ彼皆道ニ出ル則ハ同行百人百
余員薩摩神力ト頼ヲ打テ諸國ニ普告ヲ貽シ二十二年ニ至テ四千三
百五十六部ノ妙經ヲ拝納成就シテ本國此ノ地ニ歸リヌ斯ノ功勳ヲ
賞シテ日州真幸院内ニ大明神一所ヲ宛行レリ

法華經一部刊刻シ一千部摺写テ方々ノ宗々ニ授与シ有時ハ僧徒一百
余員殿中ニ聚メ一百余部ノ卷軸ヲ配分シ誦誦了テ其ノ經卷ヲ惠マ
シム刊木ハ以テ潤院ニ寄附セリ

釈尊御信敬ノ仏緣誠ニ玄獎三藏ノ再生ニテ御座スヤ左視右視一念法
界万法一心ニ住シ給テ白他ノ隔ナク上臚下薦男女ニ至テ教誨シ給
フ夫レ百年ノ榮花ハ風前ノ塵リ此ノ風塵妄執ニ迷テ六情ニ纏イ五
欲ニ羈テ多生曠劫ノ苦ヲ受シ事ヲ忘ル夫レ一念ノ発心ハ命後ノ灯
ビ此ノ心灯性火ヲ寔テ仏法ヲ慕イ禪道ヲ尋ネハ一念ノ間ニ本覺發
光ノ城都ニ至リ曠劫多生ノ業ヲ得ント指シ示シ給フ故ニ善男善女
咸仏ノ直道ニ入ルベキ願イ渴シヨル者ノ陽燄ニ走り飢タル者ノ松
葉ヲ食スルガ如シ因之 天法公ハ女身垢穢ニシテ參祥山和尚三匠

透得山居ノ庵主ト称セラレ 文質公モ女相ニシテ成仏ノ法器ニア
ラザレドモ參俊安和尚庵主号ヲ許サレ給フ皆ナ是レ菩薩大慈大悲
ノ教訓ニ因テ來生ノ値遇ヲ得給フ

高子修理大夫 貴久君子モ亦念ヲ仏心ニニシテ捨身ノ行願ヲ以テ
色心ノ当体本有ノ覺体ナルヲ契悟シ御法名ヲ大中良等庵主ト崇メ
ラレ給フモ是心是仏法華三昧ノ精神常ニ法華訓詁二六時御手ヲ放
シ給ハズ御看經所二界ノ上床ニ昼夜定否定灯其ノ仏前ニ御座シ法
華一卷誦誦了テ二卷ヲ頂戴シ焼香々烟未絶ヘザルニ座脱坐亡生死
ノ涯ナシ是即チ 菩薩教化ノ骨髓妙法教主ノ全体體然タリ

新菩薩 等庵主喪地ニ於テ泰門僧敬ク報恩謝德ノ為ニ堂一字ヲ創建
シ謹テ表ヲ 菩薩ノ孝孫修理大夫義久君子ニ上ル意旨ハ右ノ本尊
菩薩 庵主一心ノ正体尊像ヲ冀フ太守尊命 菩薩在世ノ清話仏ニ

ハ釈迦ト宣示アリツル御信仰ハ釈尊タルベシト釈迦如来ノ尊形ヲ彫刻シ王城ヨリ御同道安座点眼今 菩薩 庵主一軌三宝南無釈迦ト拝レ給フ因縁人心ノ業ニアラス在日釈迦妙法華ト一念ニ敬白シ給ヘバ諸仏ノ護念モ亦ニ無キ故ヘ太上感應篇曰禍福無門惟人自召善惡之報如影隨形ト見ル時ハ 釈迦文仏之光影ハ 日新菩薩ノ尊体ヲ離レズト知ラレタリ

或時キ宜言スラ人皆今世後世ヲ忘レテ胸中ノ魔賊ヲ除カズ己心本覺ヲ理ヲモ明メズ煩惱ノ紐ニ自縛セラレテ身心ヲ苦ム此ノ紐ヲ切ベキ智恵ノ利剣ナキ凡夫ハ念仏ノ力以テ仏果菩提ニ至レ此ノ界ニ人ト産レ出タル者ハ千返數珠ヲ腕ニ貫テ念仏ヲ唱ヘヨト教ヘ給フ故ニ土農工商童男童女ニ至テ千返數珠ヲ爪繰テ不斷念仏三昧ノ御代此即チ喜見城ニテ饒ヘズ寒ヘズ喜樂ヲ得テ忘レツ

或時ハ阿彌陀尊像ヲ刊木ニシ興シ其ノ全体ニ八万四千ノ毫釐ヲ鑿リ或ハ地水火風空ノ五輪ニ八万四千ノ毛孔ヲ鑿シ斯ノ二相ヲ白紙ニ摺写シテ御封内無數恒沙ノ人民男女上下不隔彼ノ穴阿彌陀ト五輪ノ画像ヲ一人ニ一幅充授ケ念仏一萬返唱ヘテ一穴ヲ塞キ八万四千ノ穴ヲ塞ナク黒申セト宜下アリシハ人皆ナ五塵七情ニ迷テ信心ノ手ヲ取り出サザル故ニ宝山ニ入テ手ヲ空シテ帰ランズル不使サヲ歎シテ是ハ偏ニ御奉公ト責メズンバ二世安樂ノ宝ハ難得ゾト深ク御恩惟アツテノ助功ヲ閑ニ措ベキ者ニ於テハ過代ノ行イ可有御断リ是実ニ折伏門ノ慈悲ナリ

① 子日一孝經五刑之属三千而罪莫上於不孝

・五刑

刻其額墜之属千載其肌膚千斷其足屬五百刑其勢属二百死刑二百都食二千

刑罰

② 孟子一不得乎親不可以為人、不順乎親不可以為子、舜尽事親之道後漢書一有過不諫則惡不懼

怪事

③ 喜怒哀樂愛惡

④ 財色食命睡

- ⑥ 日新昏御姉様
⑦ 日新君ノ後妾
⑧ 菩薩ノ高子
⑨ 貴久公
⑩ 紺字□聚也又馬ノ□ノ長繩
⑪ 刊ハ創也
⑫ 古語一寫人宝山空手飯乎
妙藥大師釈以信為手信心之手不取出故不得宝
住持三寶在胸中者也
或書一信ハ道源功德ノ母ト説ケリ宝山ニ入テ手ヲ空ト云ハ信ノ手ナキ故トミエタリ
- 加世田ノ洪水ハ永祿第八曆乙丑六月十有七日巳午ノ間ニ出ツ此ノ時キ大雨ニアラザレハ人々遠キ慮リ無キニ涌キ水トヤラン諸山ヨリ涌出デ計ラザリキ白浪虚空ヲ打テ叢林野村江海渺々タリ依テ人家ノ浮沈ヲ見ル者ノ手ヲ拱シテ踊躍セルノミ於此理義ノ勇有ル者ノ流ヲ截テ人馬ヲ援家ヲ助ク是等ノ人ヲ召上ゲ終日酒飯飽クマデニシテ青駄力ニ応ジテ与ヘシム河立ノ稽古此ノ時ニアリツ
- 琉球国ヨリ官貢ノ竜舟 上表
春頭之慶賀珍重曼福
屈国之都督御封内干才偃息千秋万歳多幸多幸然間調飾美船為使節
差天泉寺長老並世名城主良忠令渡海^②祝^③於^④府同尊府雖為微少之方物
- 一、五十兩黄金 一、五十斤真南蠻香 一、五十端線織物 一、五十斤紅糸 一、五十斤白毛 一、五十斤五色糸 一、五十端白布 此外寶紗縞
- 進呈之委細月泉長老可被達
台聽者也
- 恐惶不備
萬緒多幸
流球国中山王
進呈 嶋津日新斎

右ノ財物次第ヲ遂テ持參ノ道路十町バカリ打続平歩管弦ヲ以ス此
ノ宝財ヲシテ仏閣神社道ヲ橋ノ修理ニ加ヘシム

唐船南蛮舟年々入貢ノ貨物或ハ寄船ノ土貢ヲシテ道者貧人ニ施サシ
ム

元三ニ先ツ鷹屋八幡福壽三社ニ御參詣加世田ノ侍臣一等ノ供奉タリ
御下向後チ五箇所ノ郡臣地衆同時ニ召出シ遠方ノ諸臣ハ翌日ヨリ
ス

年頭御談合ノ初ニ先ツ仏寺神社御再興ノ事第二ニ道橋シ修理ノ事第
三ニ國家ノ事所謂人理ヲ導ンズルハ蓋テ外カナキ者ノ地道ノ重ン
ズルハ載セテ捨ル物ナシ斯ノ二ツヲ兼テ人民ヲ安ンジ社稷ヲ守テ
天下國家ヲ持ツ天地人一モ欠ル則ハ高位ニ在テモ持タザル故ニ慎
テ誠ヲ古往ニ取テ評判セラル

菩薩ノ積字聖經賢伝四書七書歌書詩法文章諸錄窮メズト云事ナウシ
テ其ノ總明教智無端仏法當機ノ存神東関北越ニ馳ス依之左大臣信
輔卿御下向ノ因坊ノ津ニ於テ有ル翁ニ對シテ御清談ニ日新ノ遺跡
ヲ見タイナ 日新ノ御世ヲ見タ者ハ耻カシヨ我ニ於テ不足ノ事
ノミ有ラウズ道理ヲ流人トナツテ是迄下リタルヨト思ヘト御褒美
ノ心事戲言ナレドモ思イヨリ出ルヲ校フルニ六十年前以前ノ政其ノ
名實五雲天上ニ翔リ至今月郷雲客左輔右弼ニ慕イ重シ恥ヂ敬ハレ
給フ化徳ハ独リ政教ヲ行ハルルニ我ガ本体ノ明ヲ明カニシ取周之
明法暗キ事ナキ事証四十七首ノ吟味仏法參得ノ詠嘆臨終辭世ノ一
頌ニ明鏡ナリ

殿中ノ趣キ尋常明御授ジテ誨ヲ求メ今ハ法華ノ説今ハ六經ノ談或ハ
日本讀白官武目大平記砂石集ニ至ル迄テ時ヲ得テ螺ヲ吹カセ諸宗
ヲ集メ勤テ學ヲ勉メシ事四時一日モ破費セズ一朝一日ノ他遊ニモ
書籍ヲ携ヘ至所寸隙片時ヲ惜テ古書ヲ聞キ書義ヲ尋テ其ノ要ヲ取
テ機鑑トセシ故ヘ賢者才人自遠方來テ喜樂ノミアリツ
殿中日々ノ定法近臣幼稚ノ人々早朝ニ一浴シ髪ヲ握ル中ニ觀音經一

卷説諭是レ其一日ノ祈念タリ髪ヲ結イテテ前日所學ノ書籍ヲ覆シ
其書末ヲ習學シ或ハ字ヲ學ビ或ハ文ヲ學シテ時ニ之ヲ習ハセシム
疎學ノ人ニ於テハ痛痒ヲ取り暇空ヲ撰テ打擲外事ナク訓導ヲ嚴ニ
ス胸射馬騎リ下リ初心ノ者ヲ荒馬ニ馳セ鞭ヲ加ヘテ接シ給フ次ニ
鞠ノ稽古暮の此外人世ノ功業殘ル所ナク機ニ必ジ分ニ隨テ教ヘ訓
ハシ給フ夏口ニ至ハ相撲并河立ノ稽古日々在之終ニ是ノ學強敵
ト組テ打勝チ深淵大河ニ溺テ難ヲ遁ルル者ノ多シ是等ノ人々右ノ
御折檻ハ是ノ時ノ為ニヤト思フ者ノ見ル者ノ其ノ御心ヲ恐レ尊
デ目ヲ合セ涙ヲ拭イ手ヲ合セ心ヲ砕ク事諸芸給テ如是接シ出ダサ
レテ功成リ名ヲ遂シ人ト皆然カリ

日新
聖君常ニ道ヲ成シ道ニ立テ迷ヒ給ハザル故ニ腕ヲ立テ力ヲ以テ明主
ヲ任シ明君ヲ除テ恣ニ武威ヲ振ハルルニアラズ天運循還今ノ時ニ

當テ剛風暴雨雲モ覆イ道暗シテ迷フ者世ヲ乱シ國ヲ亡ス事ト自暴
自棄太甲日天作孽猶可逭自作孽不可活此ノ生ケ難キヲ生ケ治メ難
キヲ治テ家ヲ興シ國ヲ保ズ是レ天与不取返受其咎時至不行返受其
殃故ニ取之行之見レバ化弥滿チ德弥光レリ誠ナル哉ナ以テ勝人昌
ヘ以テ勝人亡ブ今此ニ力ヲ要セズ道ヲ明ニシテ得之其德伊作入リ
ニ願ル詳左

伊作御本領ノ來由御祖父河内守殿ハ当家九代忠國公之尊子十代立久
公法名節山ノ御舍弟初メ伊作ヲ領シ其ノ後チ日州福島ノ令タリシ
ガ浮世ノ譏言ニ縁テ薩ノ府ニ迂リ三年セ不知行ニ御座シナガラ
事君以忠故使臣以礼本分ノ伊作ヲ任ゼラル彼シコニ本覆シ給イ政
ヲ教ヘ身ヲ潤シ屋ヲ潤ス惟レ德子孫ニ流ヘラルル祥相孝子一男又
四郎殿是レ孝子二女一男

日新
菊三郎殿幸哉ナ忠幸公ノ尊子トシテ田布施阿多高橋ヲ領シ四箇所ノ
主將タリ長ツテ 三郎左衛門尉殿ト仰ギ立身ノ歳シ相模守殿不惑
ノ歳シ 日新入道殿知天命則仏ノ四弘誓願ヲ願トシテ十信十住十

行十回向十地ヲ修學シテ仏果ノ大智如空廣大無辺ナルヲ明メ法雲
地ニ至テ無辺ノ功德水ヲ出生シテ草木国土皆ナ常ニ潤サシメ所作
事業自在ナル故ニ法名ヲ得給フニ四主実報土ノ菩薩常潤ト称セラ
レシカ自身卑下シテ在家ノ菩薩ト拜マレ給フ

相模守殿ト申セシ時世ノ一乱当家十四代修理大夫勝久公ノ時ニ当テ

帖佐ノ衆頭辺河筑前守両城ヲ構ヘ城戸ヲ垂レ乱權逆茂木ヲ立テ兵

ヲ落サントス其久公モ亦加勢三百余騎相籠メラル於此欲起一挙ノ

義兵ヲ伊作ノ相模守殿忠良公ニ命ジ速ニ出兵打之時キ永昌十六年

丙戌十二月四日大隅加治本溝邊横川山田之勢大將 忠良公馳騎ヲ

始メ十四箇所ノ軍勢ヲ率シテ十二月七日ニ押寄セ本城ヲ賁落シ

出水大將ヲ初メ許多打取リ即時ニ新城ヲ攻メラルルニ本城ヨリ北

入リタル男女上下一同ニ落得ク則ハ大勢ニ逼ラレ堀リ溝ニ落死

セル者ノ二百六十余員彼ノ亡盡ニ大施餓鬼ノ勤修シ水供会曇リ御

用ハセ給イテ師城ニ御一文下野入道殿御番トシテ 忠良公ハ伊作

ニ帰去シ給フ其ノ忠勤ヲ賞シテ伊集院谷山ヲ宛行レ同十二月十二

日ニ御知行成テ明年丁亥二月伊作田布施ノ上卒ヲ彼ノ地ニ移シ給

フ

大守勝久公忝モ福昌大膳堂頭ヲシテ 虎寿御曹子御継子ト命ゼシメ

代々ノ宝物御文書ヲ付属シ畢テ隱遁ノ地撰議裁斷タルニ伊作ヲ指

サル忠良公謹テ肯諾シ給フ依テ 勝久公御入道ナサレ伊作ニ向テ

御出行 忠良公モ御法体ニテ御供タリ伊作ヨリ 虎寿御曹子モ御

出テ迎ヘ供奉ニテ内城ニ諸シ進ラセ御祝言諸臣各ノ地ニ俯ス然テ

後チ 虎寿御曹子鷹鳴ニ御入部又々千秋万年ノ至祝御家郷上下安

堵ノ思イヲナス

全五月右ノ下野入道伊地知因幡守全新左衛門尉謀叛ヲ起シ軍兵ヲ出

サントス依テ六月五日 忠良公加治木ニ至テ下野入道伊地知父子

打果シ帖佐ノ松原ヨリ御舟ニテ谷山ニ推着田布施ニ御帰リ給フ

真久公河上上野守ヲ使節トシテ勝久公ニ言上ノ旨思外ニ山里ニ推籠

メラレ給イシハ宿意浅カラザル事再ビ鷹鳴ニ御入部義理ハ論判ニ
不及ト出水ヲ始メ串木野市來都合十一箇所軍士ヲ倡テ同六月十一

日ニ伊集院ヲ賁落サル谷山ハ加世田河辺加尼山田ノ兵衆押寄スト

雖モ議ニシテ相渡シ六月十二日ニ所ノ落人田布施ニ參上ス

虎寿御曹子モ全十五日ニ鷹鳴ヲ忍々ニ御出テ伊作山後平ノ遍路ヲ伝

テ田布施ニ御參ノ心此ノ日郡臣幾ク千万多シト雖モ御供七人山田

伊与守木脇大炊助川越民部左衛門長井善左衛門園田清左衛門并尻

九郎二郎公老母鎌田筑前守各等御手行過險機田布施ニ至リ給フニ

日新公呵責シ給フ一度御養子トシテ太守タリシ上ハ勝久公ノ御手

ヲ汚シ身ヲ道ニ捨テナント頃給フ依テ伊作ノ御所ニ立帰ラセ勝久

公御対面勝久公涙臉ヲ拭イ曰親子ノ機縁愛別離苦心サハ身ニ隨ハ

ヌ世中ハト三日ニシテ田布施ニ御送り參ラセラル

勝久公六月念一伊作ヨリ鷹鳴ニ御入部御評判ニ伊作ハ忠良公御本覆

トアリシニ真久公伊作御懇望ノ訟訴和之者ノ非礼之礼非義之義大

人弗為余ルニ非礼非義不信不忠大公曰士不誠信非我士也臣不忠諫

非我臣也ト謂ハレシ文王ノ鑑不遠貴久公ノ世ニアリ何ゾ開カザラ

ンヤ

日新君 忠良君ノ信士此ノ明鏡ノ台ヲ開キ儉讓シテ云ク忠諫他ニアラズ伊作

責ヲ進ムニアリ伊作ノ人民モ亦衆議一心ニシテ今日打立或ハ明日

打立ト諫ヲ入ル依テ引兵入伊作之地事

日新君子御世乱劇之初メ七月廿三夜打立是即 菩薩降生ノ好日今夜

玉兔ヲ待ツ者ノ鵲鳴ノ期スル事今古絲毫モ移易セザルニ計ラザル

皎月成ノ時ニ三嶽ノ脇ヨリ出生シ万物照然トシテ白昼ノ如クナル

ニ伊作ノ士庶人連判相圖軍勢ヲ將イテ難賞祝物ヲ調和シ田布施伊

作ノ堺イ太刀打原ニ相迎ヘ一統ニ手ヲ合セ仰ギ俯シ手ヲ展テ灯明

ヲ挑グト雖モ忽チ吹滅シテ須臾利那ノ問ニ七宝ノ盃ヲ含ミ三祝ノ

詞ヲ述べ速ニ城籠ニ押寄セ内外同心即時ニ城内ニ攻入り内城ノ御

審伊地知將監ヲ打ち方々ヨリ籠リ居タル兵衆ヲ西城ニ賁攻メ翌日

悉ク打果シテ本分ノ殿中ニ安座本望ノ欲樂已前御相續ノ御文書宝
物ヲ并領ノ並縁ハ自身ノ精神人民ノ忠謀偏ニ依天三笠ノ和光一休
化身ノ神明ヨリ出ツ太誓曰天視自我民視天聰自我民聰因之聞之
資之絲髮モ私欲ノ腕力ヲ以テセザル道理一帖佐ノ錯乱靜謐ノ忠
賞ハ伊集院谷山ニ備リタルヲ召帰サルル非道説苑ニ不謂ヲ誅賞謬
則善惡乱ルト一虎壽御曹子親子ノ堅約三綱其ノ二ツノ大綱ヲ斬
ラル君子ハ以一言為千歲規矩而舌ヲ舒テ耻辱ヲ吐付ラルル無道
一伊作ハ本領タリシヲ御隠ノ地トシテ召取真久公ニ御細談細密ハ
胡乱横道ノ迷イ時哉天与取事本領運ノ大道正路タル故ニ無中兵
而勝無衝機而攻無溝壘而守ル一毫モ人欲ノ私ニ蔽ハレハ明德何ゾ
蒙ランヤ爰ニ打立チ云ト諫メ申シタル者ニ打立兵衛ト名付給ハ
ル是レ亦天ノ命タル所也此ノ心口心アル事歟

長吉ノ桑波田讃岐守再野心ヲ起シ鷹鳴ニ出仕ス緩急遺恨甚ダ深キ処
ニ天文癸巳三月廿九日関村ト関フ依テ狩人ノ支度ニテ白晝ニ緩歩
シ入り留守居桑波田河内守同名式部少輔ヲ擊テ相殘ル者皆追落シ
テ城郭ヲ堅固ニ構ヘ磐石ノ安キヲ得ル処ニ同八月十四日鷹鳴ヲ始
メ吉田ヨリ日置ニ至テ七箇所ノ軍勢ヲ野久尾ニ差寄せ吐氣ヲ萃サ
セラル 忠良公伊作ヨリ馳統キ樺山右衛門平田左馬介ヲ始トシテ
許多打取リ勝チ吐氣ヲ拳ゲ帰程ヲ催サル後々ニ至テ彼ノ桑波岐ヲ
召寄せ召仕フ愛隣ハ夫レ国君好仁天下無敵此之謂也

日置ノ山田式部少輔同十二月日降人ニ成テ詔ヘ日置持參御奉公ト
言上タリ依テ同廿日ニ御知行畢テノ衆議ハ一治一亂一得一失ノ前
後ヲ檢校シ評定ニ前者ノ桑波田讃岐ガ二心ノ未練ヲシテ後者ノ山
田式部ガ降參ヲ刑戮セラル然テ後チ 君彼ヲ現存セシメザル事ヲ
悔還シテ其ノ子孫ヲ撫朗シ御取立給イシ御心ヲ懼レヨ尊メ致堂胡
氏曰人莫難於知過莫難於悔過莫難於改過迷而不知者天下皆此也
知而悔者百有一人焉悔而改者千万人有一人今爰ニ悔而改メ給フ

① 孟子小勇者血氣之怒也大勇理義之勇也血氣之怒不可有理義之怒不可無
② 掃帚也

- ⑧ 極ハ理也
- ④ 孟子 梁天者保天下畏天者保其國詩曰畏天之威于時保之
- ⑤ 近衛殿
- ⑥ 淮南子云聖人不貴尺璧而重寸陰以時難得而易失也
- ⑦ 孟子 言非礼義謂之白暴也言身不能居仁由義謂之自棄也
- ⑧ 大年様
- ⑨ 四土 同居土 方便土 實報土 寂光土
- ⑩ 實報土 斷無明菩薩生此土云々身量音聲色像莊嚴無量無辺云々
- ⑪ 菩薩高子修理大夫貴久
- ⑫ 自伊作鷹鳴ニ皈ル
- ⑬ タカ女
- ⑭ 孟子 誠者天之道也思誠者人之道也又云信道源功德母ト説ケリ
- ⑮ 六略
- ⑯ 三略 仁賢之智聖明之慮貞新之言廊廟之語
- ⑰ 須臾 一口一夜ヲ二十ニ分タル其ノ一ツ也
- ⑱ 剎那 爪弾キスル間を六十五ニ分チ其ノ一ツ也
- ⑲ 三綱 君臣父子夫婦
- 右所謂勝久公伊作ヨリ鷹鳴ニ御入部タリシ時諸侍万方歳ノ御世ヲ仰
テ告ク夫レ為國之道侍賢与民信賢如腹心使民如四肢①孔子曰治國
所先在尊賢賤不肖後漢書曰進賢而廢不肖君之明也然ルニ當時ハ末
広伯嚭ヲ始トシテ町人猿樂倒シ是等ノ類イ故ナキ者ヲ進テ功臣ヲ
廢テラル遺恨述懐説拾ノ連判君暗姦邪為之起真久公愁之諫メラル
君近小人則賢者見侵害ト謂ヘル事聞給フヤ否ヤ公不受又云文王曰
唯仁人能受至諫不惡至情ト諫メラル公不聽夫智者順以成德愚者逆
以取害則ハ危亡不遠ト是猶ヲ耳ヲ掩ル諫臣以謂三諫而不聽則逃之
ト嚙口退キタル時ハ天文三年甲午十月廿五日谷山ニテ末広傷害タ
リ此ノ事勝久公ノ耳ニ針シ根占ヲ指テ落チ給フ是ニ至諫ヲ謂ケズ
逆以害ヲ取ラル太公曰君不肖則國危而民乱君賢則國安而民治禍福
在国君不在天時

天文四年乙未四月ニ至テ勝久公根占ヨリ竊ニ御入部尊カリシ二十六
人ノ連判此ノ中河上上野守ヲ誅罰セラル忠臣愁テ曰明主使臣不獲
有罪是レ上慢而殘下也會子日戒之戒之出乎爾者反乎爾者也此語疑
ハズ即時ニ伊地知右衛門兵衛振逆威加世田河辺鹿兒山田市來伊集
院吉田ノ軍勢ヲ引率シテ魔嶋押寄せ放火スル時ハ風煙天ヲ遮リ猛
焰地ヲ覆テ蒼天ト哭スル様子屋夜一七日於此勝久公帖佐ニ向テ落
行キ真幸ニ至テ久金ヲ賴給フニ久遠ノ事ヲ暗ス王無親臣矣昔者所
進今日不知其亡也於戲止々誰ヲカ恨ミン禍福無不自己求之者
伊地知ガ府中ニ亂レ入レハ勝久公魔嶋ヲ御出デ真幸ヲ指テ行カセ給
イシハ安祿山ガ長安ニ押入レハ玄宗華清宮ヲ御出デ蜀江ノ南ヲ指
シテ幸ナルニ異ナラヌ乃チ雨微ニ烟暗ク山河黃落シテ國中ニ明主
ナシ愛ニ相懷守殿忠良公ハ古來傑出ノ士豈待一知己也自己ノ嫡男
三郎左衛門尉殿貴久公次男右馬頭殿時久甲子都合三千餘騎ヲ將テ
天文五丙申三月一日伊集院ニ馳籠リ城衆悉追罰シテ親殘ル処ナク
掌内ニ握ラル是レ天ノ与ルヲ取テ會稽ノ恥辱ヲ雪ギ給フ實ニ天道
ハ自然ナリ其功聞ナウシテ今又此ニ帰スル事其身正而天下歸之詩
曰永ク言配命自求多福困之此ノ地ヲ守護所トシテ貴久公御座シテ
明法不怠政道ヲ行ハセ給フニ本ヲ務メ本立テ道生ノ道ヲ決テ真幸
ニ御座ス勝久公御入部ヲ仰キ迎ヘラルルニ會テ承諾シ給ハズ猶正
心誠意ヲ尽テ打テ口説セ給ヘドモ無道ノ道塞テ顧ミ給ハズ
忠良公暗ニ目ヲ閉デ手ヲ歛テ我レ君ニ不遠君吾ニ遠ヘ給ウ災障求不
得ノ苦惱嘆傷悲休ム時ナカリケリ

加世田入り天文七年戊戌節季晦戌ノ越ニ軍衆ヲ一所ニ集メ 聖君其
ノ四面ヲ回り御斷リ給フ只今加世田ヲ責メン此ノ中生テ婦ン者ハ
退歩シ骸ヲ曝サン者ハ進行タラン裁斷返返ス三度ニ及テ先ツ蟻娘
ノ銳士ヲ選デ先鋒トシ阿多松坂ノ通路正當夜半闇シテ方隅ナキニ
計ザル稻荷火ノ影ヲ欺キ明々トシテ忍路ニ入レハ其火ノ光リ炬火
ヲ帶テ重畳ノ屏垣ヲ越ルニ手ノ舞ハ不足ノ蹈ハ所狼狽生セズ猶預

ナク速ニ吐氣ヲ擧レハ城中モ同音ニ付ルト雖モ對敵火ニ入ル夏ノ
由シ消亡シテ嗣音ナク 仁君谷ヲ出ル春鶯微妙ノ凱歌ヲ唱テ安堵
ノ榮耀日々ニ最フ余ヨリ加兒山田河辺ヲ始メ諸所ノ官軍甲ヲ脱キ
繚ヲ解テ降参シ來ル時ハ四方ニ敵ナク道泰ヲ歌イ無私ヲ賀シテ
以三王之道而シテ仁賢ヲ信シ禮儀ヲ正シ政事ヲ行ハル諸侍モ亦詩
ヲ賦シ歌ヲ詠シテ此ニ仰止ス依之加世田ヲシテ三世常住ノ蓮台ト
セシム

市來責天文八年六月廿九日先ツ神社仏寺御建立ノ行願ヲ以テ士卒ヲ
平ニ置シ堅陳ヲ構ヘ給フニ軍士ノ用備敬將命喜テ敵ヲ破ラン事ヲ
以ス是即チ神明ノ慮リ大勝ノ徵主將何ヲカ慶ヘン悠々タル夜半ノ
御夢想七箇國ノ主將タラン何ノ身心ヲ勞スヤ答テ云先ツ此ニ七ヶ
所安堵ヲ又云イヤヤ九州ノ將タラン問曰ク是ハ如何ナル御人ニ
テ御座スヤ彦山ヨリト答フ睡夢覺テ彦山三所ニ向テ双眼ヲ合セ權
現不二一心ニ帰シテ南無彦山大神權現ト観心シ仏菩薩ノ御足ヲ擣リ
頭上ニ戴テ子女孫々代々昌シニ九州一統ノ安堵ヲ祈ル其ノ誓願ノ
心行ハ年々參詣九年ヲ約シ双眸ヲ開キ合爪ヲ解テ山法師讀經坊ニ
命ジテ彦山詣テ忽ナリ是日仏天ノ計イ足輕ル密ニ城麓ニ必ビ寄り
閑ニ管窺スルニ城主中務頭打テ出ルヲ打伏セ頸ヲ取テ擊ク 君見
參シ給イ御手ヲ拍シ御涙ヲ流シテ曰ク彼ノ一城一國ニモ替ヘ難キ
者生虜ザル余哀ニ仍テ三日飲食ヲ飽クマデニセズ歌ハズ雖然祈所
ノ冥感其ノ一月中ニ一城ヲ掌ニ運サル自是方々ノ城主心ヲ通ズ故
ニ兵ヲ谷山ニ向ケラルレバ陳々日ヲ不移甲冑ヲ脱キ予盾ヲ捨テ聖
新公ノ高子修迎大夫貴久公
君ノ御足ヲ戴キ魔嶋ニ御入部ヲ仰ギ冀テ安座セシメ無私ノ化ヲ展
ベ給フハ人心ノ腕力ニアラス天然ノ貴胤其德乾坤ニ合ツテ天理地
道ノ威風ヲ振ハル其威風隅州界ニ行ク則ハ木折レ草偃シテ平坦
坦タルニ蒲生狼リ勁松ノ容ヲ影ス

蒲生入り先ツ若宮八幡宮建立ノ御願ヲ觀法觀心以テ荒比良ニ寄り陳

所ヲ構ヘラルル暮夜ニ稻荷明神ノ火勢白日如シ勸請吐氣ノ拳レハ
靈鳥郡ヲ成シテ城内ニ飛走スルノ吉兆ヲ待見ルニ城主露參シテ邪
答院ヘ落行其有様ヲ相傳ミ給テ彼ガ憾慨ヲ我ガ胸ニ収メ我ガ積祥
ヲ彼ガ心ニ譲リテコソ天道人道理道ノ三際明ナル公法ナリト即チ
召椅セラルルニ一首御贈リノ御詠
しぶやには心とまりしかまうとの

ちんのにはひに袖をふれなは

自是宮殿造営ヲ御企テ神殿悉ク新造新添成就シ以テ白銀ノ幣帛拜
進シ給フ

隅脇入り先ツ正八幡宮御建立ノ御誓願ヲ成シ給テ軍勢騰鳴ニ群集シ
發足海陸兩路ニ分ツ是故ニ船中ニ足ヲ置ム軍士陸地諸所ノ村家ニ
乱レ入ル火勢迸散山上ニ赫キ海中ニ映スルヲ見ナガサレテ足シ酸
タ心忽シテ漸ク浜巾ニ推若キ宮内御壇ニ入レバ地衆心ヲ合スルニ
本田在城ノ兵衆モ亦心ヲ一ニスル事偏ニ菩薩應身ノ作略ニテ逆徒
ヲ追討シ万民ヲ愛惠シ一統ノ御代ニシテ牛ヲ放チ馬ヲ帰シテ政行
ノ最初ニ八幡宮作興並二十五菩薩ノ裝束面具宝冠瓔珞金襴衣金縷
僧伽梨二獅子ノ飾リ金襴ノ幡二十五流白銀ノ幣三流神物皆ナ金玉
ヲ琢キ成シテ御遷宮御願文ニ南無八幡大菩薩ヲ句ノ上ニ挙テ十一
首ノ倭歌

なにはつの今は春辺と神かきに

句へる梅の冬こもりかな

むつまじき世をしら雪の千里まで

かけてしき地の神のみ心

はる近きおとろかくまの下草も

花咲みなる世をやまつらむ

ちはやふる神代にはいき玉こがね

のべみがきたるこの殿つくり

まもれ猶人屋りならすじひふかき

ちかひのうみのはかりなけれは

むかしをもちかへすだもとの句ひかな

あまつ乙女のいと竹の声

たまたすきかかるとき世のにこりにも

心そめとのいはし水かな

いさ清きすみ家を捨てちりふかき

世にまじはれる神はたのものし

ほとけ又世に出しをの四の海に

みあかかやける宮うつり哉

さしも草さしもしれとやうかりける

よをしいとふはなかりける身を

つきも日もひかりをそへていへいへの

千代のさかへは神のまにまに

真幸北原金親自没シテ院内上ヘナシニ浮カレケル時ハ猶□水之就下

自然ニ薩ノ大海ニ流入シテ波靜ニ風収テ人民モ塵機ヲ生セズ花竹

モ和氣ヲ合ム

又ハ路

菱刈實メ軍衆ヲ真幸中ニ引籠メ般若寺越ヘ山野間道行方ヲ弁ヘザル
ニ稻荷松明ヲ帶テ魁ス漸々ニ山ヲ出デ見渡セバ菱刈院内諸所ノ稻
荷火衆星ノ拱スル如ク螢火ノ点スルニ似テ方所ヲ指分チ競馬貴入
リ城々十ヶ所に及ブ軍勢ヲ一日中ニ責攻分取り斬捨テ逐退クルニ
牛山一堪ヘテ熊八代ノ援兵ヲ引卒シ時々ノ關戰勝負未決セザルニ
神明ノ御夢想檀ノ下ナル牛ノ声々 菩薩夢中ニ大日ニ祈ル禱リノ
新ニテ幾程ナク敵軍ノ猛勢ヲ釣リ入レテ殘ル所ナク撃亡シ一統ノ
御世ニシテ牛山ヲ改テ大口ト号ス

右戰亡衆ノ頸項同堆ニ築立テ大施餓鬼ヲ勤修シ敵味方一致ニ生天成

仏ノ御吊イ詠ニ周之沢及枯骨ト伝ヘ唱テ恩流今ノ世ニ漲テ人々

浮キ沈ミ恋イ慕イ□又事ヲ題シ上トスルニ其ノ窮リ無キ者ノ譬ヘ

バ四海ノ一敵ヲ酌ミ九牛ノ一毛ヲ拔テ載之

肝付省釣先生 聖君嫡ノ高女ニ婚嫁シ機縁膠漆ノ交リヨリ堅カリシ

ガ謀叛ヲ起シ弓箭ヲ帶シ甲冑ヲ着ケラル 聖君出御成テ撰議アリ

シハ夫レ君臣父子ハ鳥ノ両翼車ノ二輪分破スレハ立ツ事ヲ得ス本
根一樹ノ花モ東傾セバ西傾シ西傾セバ東傾シ給ハハ両花世々香シカ
ラン若シ此ノ言ニ違フアラバ天下非一人之天下乃天下之天下ニア
リナカラ君臣ノ法ニ違フ忠孝ノ儀ニ背レバ叛者ノ亡ビナント判断
シ給フ釣受ケタマワズ君手ヲ袖ニシテ孝女ニ御贈ノ一首

もるよともしらてたのまはこのもとに

振ではさそふ露よしくれよ

然後チ吳越相隔テ信ヲ不通婚ヲラルル事天下ニ人ナシノ振舞タリ
シガ御評判御詠ノ如ク昔ノ榮耀ハ時雨ト消滅シ榮花ハ草露ト零落
シテ今音モナク臭モナシ

日向入リ天正四年壬子八月先々高原責ノ歳断封内ノ士庶人肝付下大
隅根占ノ謀臣ヲ治ルニ相戰事三年此ノ中チ民力ヲ疾シ農ノ時ヲ失
フ故ニ國家ノ衰微飢寒ノ憐凶凶之富国民ヲ豊ニシテ兵ヲ出サバ行
クトシテ利アラズト云事ナケン太公曰民不失務則利之農不失時則
成之蓋善為國者馭民如父母之愛子如兄之愛弟見其飢寒則為之憂見
其勞苦則為之悲賞罰如加於身賦歛如取己物此愛民之道ナリト主將

義弘公委ク察シ察ク思惟シテ其レ此ノ欲界ハ四苦八苦充滿シテ寒
熱ノ辛苦三感五住ノ煩惱五欲七情ノ苦惱何レカ通レン敵モ人ト御
方モ人ト寒ズル時ハ彼レ寒ズ人ト人ノ敵對取捨勝負ノ二偏勝ヲ
得ルバカリニアラズ利ヲ取ルバカリニアラズ時ノ運ニ因テ身ヲ捨
テ名ヲ後代ニ貽シ或ハ國ヲ取テ嘗テ當世ニ掌ゲン太公曰兵勝術密

察敵人之機速乘其利復疾擊其不意時ハ察機乘利不意ニ一戰シテ天
運ノ得失ヲ見ント攻之一朝擊平得利得名即チ野尻ヲ衝ニ福永丹波
野村党 主將ノ竜文五彩ヲ監察シ或ヲ逆ニスル時ハ日州諸所ノ城
主皆チ和之歟夫ノ伊東ヲ千里ノ外ニ倒退シ一國ヲ平来テ此ノ功勳
ヲ奏ス主將畏天之威默然トシテ逆徒ヲ賞シテ賞セズ天与ルヲ取ル
則ハ手ヲ懷ニシテ握之國人欽テ有道君ト敬イ無為ノ化ヲ染ム此

ノ理皆チ天之明命与君而所以為德也

豊後ノ大友入道宗麟天正六戌刃年六ヶ國ノ勢ヲ權テ日向國裡ニ逼入
リ高城ヲ押震四方八面ニ家シテ皆皆二六時遊興亂舞舞期ノ思イナ
シ於此 君山軍勢本陣ヲ打破レバ陳々亂レテ行方ナク淵河ニ馳入
リ々々打重リ方々ニ追登追伏セ斬捨テ無數恒沙ノ死骸大地ニ布キ
滿チ透聞モナキ故々其地ヲ逃レテ本國ニ歸ル者百一千万一人ト聞
コフ自余豊州本本乱テ六國未ベ治ラズ枯衰テ枝ヲ不長無花皆是知
存不知亡知榮不知殃故也

肥後六ヶ國靜謐ノ氣瑞ハ右ニ所宜市来入リノ夜半ニ彦山神命ノ御夢
想九州一統ノ主將クラント蒙リ給フ依テ 聖君大誓願ヲ成シ給フ

其ノ願力冥慮ハ孝孫修理大夫 義久公ノ御世ニ當テ六州諸山ノ峰
々々文字ノ風幡虚空ヲ凌テ翻ル別テ豊前宇佐八幡宮ニ播揚スル幡
竿五色ヲ交ベテ朝日ニ晶キ斜陽ニ映スルヲ人皆取ント議シテ樹上
ニ登リ手ヲ展ルニ及デ明々トシテ消ハ國々山々ニ吐氣ヲ擧ゲ所々
辻々ノ稻荷火幾千万ト限リナク浦々磯渚ヲ打ツ血波物々ニ染ム瑞
彩祥光幾回化生變遷シ六天下ノ耳目ヲ傾側シテ終ニ肥後國內ヨリ
薩摩勢ヲ引山シテ

肥後ノ矢崎責天正六歲次戊刃時ニ彼ノ城ヲ打ルル則ハ火花ヲ散ス戰
イ一朝ニ攻崩サルレバ六箇國ノ人民上下押並テ伶僞動転驚怖詩歌
管絃ヲ捨テ稼穡紡績ヲ忘レ忿々敷ク治ラズシテ終ニ肥後國中皆幕
下ニ和服ス

肥前入り天正十二年甲申三月廿四日國主龜造寺隆信有聞ニ至テ打向
フ所ニ四ヶ國ノ兵船隙限ナク推入々々相戰イ北走スルヲ迄係迫攻
テ隆信ガ類ヲ握リ撃ル見サセ給フ其ノ普レ幾内東北ニ鳴ル
而肥筑四箇國ヲ擊タルルニ筑紫岩屋ニ至テ諸勢勇腹刺心熱汗ヲ出サ
ル

豊後入り天正十四年内戊十月日三箇國ノ軍勢日州表ヲ通路トシ肥筑
四ヶ國ノ勢肥後國中ヨリ責入而豊州ヲ平治シ赤迫内裡ニ幡竿ヲ立
テ九州一統ノ政道タリシハ日新菩薩神明仏陀ニ体ノ信心一心分身

命根敗壞アル事ナク火ニ入り水ニ入り天下ニ示現シテ家國ヲ保シ人民ヲ安シメ給信力市來貢山ノ御夢想九州ノ主將タラン神勅ソノ他無量ノ行願ハ五根五力ヲ尽サラルルニ縁也

扶桑ノ大將軍高麗國ヲ貢ラルル事七年惟時當家十七代義弘君高子忠恒公高麗泗川ノ主將トシテ日本諸國ノ軍勢ニ抽テ高麗諸國ヲ打平ケ高麗既一變ニ及シニ漢朝ノ官軍幾万億ト限リ無キ猛勢高麗國裡ニ溢テ勝負ヲ決スル則ハ我カ勢ノ諸陳ヲ推分指捨十文字ノ幡ヲ地軸トシテ鼓ヲ打チ寄セ來ル是レカルル所ニアラズ城内ヨリ打出ル軍勢芥子ヲ以テ須弥ヲ打ントスルニ似リト雖モ追之退ルニ朝ヨリ暮ニ朝ニ統テ翌日關ニ伐伏セル類ヲ注スニ耳ヲ斷テ騎捨テタル牛馬ニ負セ來ヲ見給フ御吊議式一念ニ三祇劫滿ノ仏心青蓮目ヲ以テ三万余人ノ全体ヲ普ク觀破シ凡聖不二ノ勝位ヲ觀シ寶蓮座ニ昇セ諸法ヲ四備供養シテ後見參ニ入レ給即賞テ我國出水加治木蘇那高麗郡合八万石ヲ宛行加給フ御感狀曰

今度於朝鮮國泗川表大明國朝鮮人催猛勢相勤之処父子被及一戰則切崩敵三万八千七百余被打掃之段忠功無比類候依之為御褒美薩摩之内御藏入給人分在次第一円被宛行畢矣目録別紙在之並息又八郎被任加持其上御腰物長光義弘江御腰物正宗被拜領候於當家名譽之至候也仍狀如件

慶長四年正月九日

あき のもり 輝元
越後の なかは 景勝
備前 中納言 秀家
加 大納言 利家
江戸の内府 家康

羽柴薩摩少將殿
右一々天ノ与ル榮耀偏ニ 日新菩薩ノ大願子々孫々代々繁茂之念

根念力碎身粉骨ノ一心代々次統シテ名ヲ我朝高麗漢土ニ留給フ或曰世守也

- ① 左伝一鳥稱善人遠不善人
 - ② 裸録類 用無義手打不防家
 - ③ 孤 多疑也古之婦其名化為狐也
 - ④ 猶子 二字共獸名也此獸多疑心故喻人之多疑而不進也
 - ⑤ 三王 夏禹商湯周文武
 - ⑥ 君子風行小人草偃
 - ⑦ 得心比心便是仏心
 - ⑧ 古語一心在高山足先酸
 - ⑨ 詩又故牛桃林野馬馬花山陽
 - ⑩ 左一湯之德及禽獸周之一骨
 - ⑪ 六韜一太公曰天下非一人之天下乃天下之天下也
 - ⑫ 孟子 君子有終身之愛無一朝之惡也注云天下者為天下之天下非一人之私有故也
 - ⑬ 鑒ハ同臣
 - ⑭ 三惑 見思惑憂夢砂惑無明
 - ⑮ 五住 色受相行識
 - ⑯ 五欲 財色食命睡
 - ⑰ 七情 喜怒哀樂愛惡欲
 - ⑱ 龍文五彩 國羽沛公之戰范增說羽曰吾今久望沛公其氣皆為龍文五彩此天下之氣也
 - ⑲ 獨父 孟一齊宣王問曰湯放桀武王伐紂一曰臣弑其君可乎曰賊仁者謂之賊賊義者謂之殘殘賊之人謂之一夫問諫一夫紂矣未聞弑君也獨夫紂蓋四海版之則為天子天下叛之則□□深警 孟二卷
 - ⑳ 兵道六韜 存者在於慮亡者在於慮歟
 - ㉑ 孟子 從之者如飯市或曰世守也
- 諫議
善も悪も善なりなせばなす
心よこころはちよおそれよ
一不動愛染衆生愛顧の形容を能く見執あるへき事

一 聊爾の子細しつめられ候は各乃護身の符ついには良薬たるべき事

一 開き候は当日は憐愍のやうに候といへども翌日は身をほろぼす禍殃乃たねたるべき事

一 国家のためには身命をも軽んじ世をおもむし私をも捨あやまりをもあらため腹立なきにもいかり怒たきをもこらへ聖人のこと業をも恐れ理法に心底を任せられ候はは則天道神慮他所にあるべからざる事

一 君としては臨み別義なく候内には鰥寡孤独乃あはれを密行し仮初にも人をそこなひやふらじの特戒を逼塞候て外には禁籠禁獄張着をもかまへらるべく候是真の慈悲たるべく候

右諫言に似たりといへともひたすら老耄の至と

永録四年十月吉日

宥免あるべく候 日新

義久

参

① 礼記 愛而知其惡傳而知其天

② 後漢書 破家為國亡身奉君

③ 孟子 文王一怒而安天下之民武王亦一怒而安天下之民

④ 孟子 亦云小勇者血氣之怒也大勇者理義之怒也血氣之怒不可有理義之怒不可無知此則可以見性情正議天理之欲

⑤ 孟子 鰥寡孤独而無告者文王曰寡老無子曰幼而無父曰孤此四者天下之窮民而無告者文王曰寡老無子曰幼而無父曰孤此四者

六韜 存養天下鰥寡孤独廢贈禍亡之家其自奉也甚薄其賦役也甚寡故万民富貴而無飢寒之色百姓戴其君如日月親其君如父母文王曰大哉賈君之德也

いろはうた

いにしへの道を聞ても唱えても

わかおこなひにせすはかひなし

楼の上もはたふのこやも作人の

ころにこそは高きいやしきは

けふもけふもとまなひをはせて

似たるこそ友としよけれまじはらば

われにます人おとなしき人

仏かみ他にまします人より

ころにはちよ天地よくしる

下手そとてわれとゆるすな稽古たに

つもらはちりも大和ことの業

とかありて人をきるとも軽くすな

いかす刀もたたひとつなり

智慧能は身に付ぬれと荷にならず

人はおもんしはつるものなり

理も法もたたぬ世そとて引きやすき

ころの馬の行にまかすな

ぬす人はよそより入るとおもふかや

耳目の門に戸さしよくせよ

流通すと貴人やきみか物かたり

初てきけるかはもちそよき

小車のわが悪業にひかれてや

つとむる道をうしとみるらん

わたくしを捨て君にしむかはねは

うらみもおこり迷懷もあり

学問は朝のしをのひるまにも

なみのよるこそなをしつかなれ

よきあしき人のうへにて身を磨け

友はかかみとなるものそかし
種となる心の水にまかせすは
みちより外に名もなかれまし
礼するは人にするかは人をまた
さぐるは人衣をさぐるものかは
そしるにもふたつあるへし大方は
主人のために成物としれ
つらしとて恨みかへすなわれ人に
むくひむくひてはてしなき世そ
ねかはすは隔てもあらしいつはりの
世にまことある伊勢のかみ垣
名を今に残し置ける人もひと
ころも心何かおとらん
楽も苦も時過ぬれば跡もなし
世に残る名をたたおもふへし
むかしより道ならすしておごる身の
天のせめにしあはさるはなし
うかりける今の身こそは先のよと
おもへはいまぞ後の世ならん
亥にふしてとらにはおくとゆふ霧の
身をいたつらにあらせしかため
のがるまし所をかねておもひきれ
時にいたりて涼しかるへし
おもほへすちかふものなり身の上の
よくをはなれて饑を守れ人
くるしくとすくみちをゆけつつらおりの
すまはくらまのさかさまの世ぞ

やはらくといかるをいはは弓と筆
鳥にふたつの翼とをしれ
万能も一心とありつかふるに
身はしたのむな思案堪忍
賢不肖もちるすつるといふ人も
かならずならは殊勝なるへし
ふ勢とて敵をあなとる事なかれ
多勢をみてをもをるへからす
心こそいくさする身のいのちなれ
そろゆれはいきそろはねはしす
回向には我と人とをへたつなよ
かんきんはよししてもせずとも
敵となる人こそはわか師匠そと
おもひ返して身をもたしなめ
あきらけきめもくれ竹の此世より
まよははいかに後のやみちは
酒も水なかれも酒となるそかし
たななきけあれ岩かことの業
聞ことも又みる事もころから
みなまよひなりみな覚なり
弓を得てうしなふことも大将の
ころひとつてをははなれす
めくりては我身にこそはつかへけれ
先祖のまつり忠孝のみち
みちにたた身をはすてんと思とれ
かならず天のたすけあるへし
舌たにも齒のこはきをは知物を
人はころのなからましやは
えたるよをさましもやらでさかつきに

無明のさけをかきぬるはうし
ひとり身を哀とおもへ物のことに
民にはゆるすところあるへし

もろもろの国や所のせひたふは
人に先よくをしへならはせ

善にうつりあやまれるをはあらためよ

義不儀はむまれつかぬものなり

すこしきをたれりともしれみちぬれば

月もほとなきいさよひの空

右乃歌は嶋津相模入道日新此みちをもて遊心さしの浅からざりし
ゆへにひろくまなひとおくもとめていひおける詞の花のこれる木
の本もなくおもひの露もれたる草かくれもなしわかき老たるをい
はす心を留めて見侍らば此四十七首を書してよきあしき天か下
のことわざをしり侍らん教誡のはしめと成へき物にや重蒙求我た
くひなからむかしけにふかくねさせる心のたね染くあらはれぬる
ことの葉はくれ竹の世々にも稀なる事になむ是をみせ侍し宗艱法
師一筆しるしつけ侍れかしとわりなればははかりの関のははか
りなからいささをろかなる心をのへ侍る事になりぬ

准三官 御判

① 韓子外伝云以古為鏡可以知興替

② 古語曰貧賤學道勤業必為富貴々々恣情怠行則必為貧賤

③ 論二子曰朝聞道夕死可矣

④ 論四子曰三人行必有我師焉其善者而從之其不善者而改之

⑤ 古語一夜々抱仏眼朝々与仏起

又云暗室誨心々目如電

⑥ 古者云水積成淵學積成聖

⑦ 貞觀政要太宗曰國家大事唯賞與罰若賞當其勞無功□罰當其罪□惡

者讒權則賞罰不輕行也

詩格一節義功名遠不離南宮商像煥丹青

⑧ 制禁惡馬常加鞭釣得心魚莫捨竿

⑨ 法苑九十八使之煩惱賊三惑五住煩惱也此盜人被盜成仏之種子迷五道

六趣也

⑩ 論語五孔子於鄉党陶々如也似不能言者

陶々形容宛然不能言辭早過順不以賢知先人也

⑪ 古文前集勿謂今日不學而有來日勿謂今年不學而有來年

韓氏外伝一以人為鏡可知得失

⑫ 論二子天仁者已欲立而立人已欲達達人

漢書一聽信用之者喪聽如仇者亡

⑬ 大先世因緣有不祥厄難之事常或以惡報怨則怨終不正如欲以草消火也若以

惡報怨則怨無不正如欲以水消火也

⑭ 孟子一百姓不能改也詩曰殷鑒不遠在復后之世

⑮ 人生方穠有千歲世上榮枯無百年

⑯ 莊子一若人作不善得顯名者人不害天心誅之

⑰ 古語一見現在果知過去未來

⑱ 續聚十六生死事大無常迅速可憐光陰時不待人

⑲ 六朝一義勝欲則目欲勝義則亡

⑳ 越王勾踐之伐吳客有獻醇酒一器王使人注河之上流使士飲其下流味不及

加美而士卒戰自五也

㉑ 韻一楚人弓一鳥号之一左右請求之正曰一一楚人□求也孔子聞曰

□乎不大不自人遺之人得之何疑也

㉒ 通鑑一漢高口命乃在天雖扁鵲□答

㉓ 屈原一舉世混濁我獨清衆人皆醉我獨醒

㉔ 禮記一蛟龍得水然後立神聖人得民然後立

㉕ 論一忠信無友□已者過則○憚改

㉖ 法華一少欲知足能修普賢之行

孔子家言一孔子觀桓公之□器□□□□□
□之器孔子曰吾聞宥座之器席則散中則止滿則覆明君以為□器故常置之於

座右□第五白試注水□乃注之水中則正滿則覆夫子然歎曰嗚呼夫物有滿而

不覆者□子路□散問持□有路乎子曰聰明□之□愚力被□□以讓公

振世守□□富在四海守之以謙此所謂損□又賢之道也

御歳六十一二至テ生キ茶毘往生ノ御企テ日限決定其日ノ裝飾皆悉ク
調法在之於是君臣抱一統之愁思甚訴フ國家ノ大事即チ在此其レ
如何トナレハ國之本在家家之本在身々亡テ國何ソ興ランヤ 菩薩
所謂主聖臣賢天下何乱君明臣直國家何亡諫臣再三奏シテ告ス君逆

諫則國亡人皆食則体瘦ト打堪ヘ訟フ 菩薩聞之制節謹度不敦逸只
葬送ノ儀式ヲ以テ茶毘場ニ於テ空籠ヲ火葬シテ諒闇一七日執行
イ方々宗々ノ御吊イ供養布施物如例是レ此ノ勅志兼日自國他國ニ及
テ回文高札ヲ立ラル其旨趣ハ於薩州加世田莊從十月初三日至其九
口而可爲施行者也因之是日ヲ迎テ修行者乞食貧人幾千万ト計ラズ
四方ヨリ來至ス然ニ回國行者ノ本願ニハ八木一斗鷲目百足其外ハ
一升一百ヲ配分ニテ無辺ノ衆生ヲ利益シ無辺ノ大願ヲ成就シ給フ
年々法華千部会大般若真說法華万部会開卷ノ日

觀彼久遠猶如今日ノ意ヲ
遠き世の妙なる法の色香をも

けふまた驚の深山辺の花

年々紫藤ノ花見宗々詩歌ノ緒素ヲ倚セ歌舞遊園花ニ伴テ日ヲ終フ

ちらぬ色を松にくらべよ藤の花

みどり春けき今日の明暮

前日菱莉の弓箭の折節

松かえは花をかすりのふちのゑん

大口きてもまひあそふらん

春の花見夏ハ蓮池ノ花水見流螢紅葉寒花ニ詠シ四時景光ヲ捨テズ愛

見ル寥々仏ト与ニ起キ仏ト与ニ睡ラル

秋も半分今夜も千里の

詠明月

年ごとに月を見しかとみちみちて

こよひのかげにます影そなき

すえよしの名におふ月もみるはかり

千里をかけて君しすめれば

神祇優歌

神かきやいふことの葉もしらま

よるひるとなき家のかことに

永祿十一年戊辰七夕

名高きもくたれるもなし七夕に

けふはかすてふよもの衣て

常潤院御遊山の日俄に大雪ふりてさしむかひ給ふ野山の景比するに

違愛寺ノ鐘歌枕聴高炉峯雪捲簾看と云心にや

春に聞野山の雪の明ほのも

かかるときにやすたれまきけん

伊住本坊に御覽にての菊を七十余の□□□して

おとろふる身そはつかしきくれないひの

酒宴樂舞聞召 一枝曼秀居士之御事を思食合給ひて

たはふれを聞につけてもをを絶し

ことのはことに露けかりけり

子期去後白牙絶絃と云にや

御法樂詠 大悲権現冠シ置 七首優歌

たたたのめうき世なればや神慮

かたしけなくも塵にまじりし

いのれなを直なる道はさぞ□あらむ

まよへる世をも神はまもれば

光をば世にやはらけてをろかなる

こころのやみをてらすとそしれ

ここそは極楽なれと三熊野の

神の光りもあひに会つ

村雲にやどりてこそは月の名の

きよくものほれ此神も神

けにきそとたうとくおもへ世の為に

たちくたりける神の御心
むかしとて遠くはあらし千早振

神はけふこそ御幸なりけれ

仏法參得詠

もとくひをうちおとされて落もせず

きられさりけりける人もなし

このしんにかたちなければはからひよ

つもらばつもれ塵もほこりも

うたがひははれたる空にそこそなく

雲のおこれば雨のふるなり

すまさむとおもふ心はにごりけり

よにただありの水の蓮葉

てらすべくまのなれば月も日も

ただ白妙の雪のあけほの

ここふよりよろほひ出て見し夢の

旅のまくらにはやさめにけり

尋来しそのいにしへの音つれは

聞ゆともなくかもなかりけり

髪をそり袈裟をかけたる知事は

しらぬをいまはしるところしれ

月しろは楼の内にもしるければ

かかるときにや唇もさきけん

をのかししそのまままのいろいろに

柳も花もさきもからずも

さとれるとおもひしこそはおろかなれ

ぎんもひ□んも我ひとりかは

三界の外までつつむけきころも

うちのすみには一物もなし

ききぬれどつゝに消さぬ縁の火は

大慈大悲のひかりなりけり

六字和歌 詠永禄九年於三之山打死敵慈之万霊成等正覺ヲ唱給

なからへもおもへは嬉しいき玉の

をはりたしき法にあふ世は

無ねんにも念仏こそはまさりけれ

生は無生にこゆるわうしやう

あくこうの山とつもりし雪の上に

あたる日影やみだの名号

御名にこもる万の仏神かせの

払ははあくまぢりも残らじ

たれとてもなけかきらめや後の世を

よくの心と色にかへなは

仏菩薩ときをく法の数なれど

世に越たるは四十八くわん

永禄九年三之山ニ於テ打死敵慈ノ万霊ニ替テ正覺ヲ唱給フ

たれにかも誰そと聞れん 誰しかも

誰かはひとりたれかのこらむ

御舟遊の日松島ニテ

たちかへりまたや来て見んまつしまに

うちおどろかすおひのしらなみ

① 孟子曰人有恒言□□皆言天下国家天下本在国国之本在家家之本在身

② 代要論 国將興責有諫臣家將興盛責練

③ ヤブル

④ 伝大士心王□□々々懐仏眼朝々起仏共又云如法塔扉若有人得見此塔礼拝供

養皆近菩薩ト雖食スル也

⑤ 心不是仏智不是道

⑥ □□□□□□□□□□

⑦ 頼吟小玉元無事只要旦即認得声

⑧ 法華 是真精進是名真供養

⑨ 杜子美卷十一 詠月 四更山此月殘夜水明樓

會經巴峽猿啼處 三峽巴陵有 明月

廣

⑩ 類聚 明々百草頭明々祖師意

⑪ 二十八祖偈 迦葉仙賢 去第一 一切衆生在清淨從本無生無可謂即此身

心是幻淵化之 無罪福

⑫ 心抱大庭

⑬ 鷄足 衣方 米坐 林灯々 統如

御歳七十七惟時永祿十一年戊辰雪月ニ至テ少病小腦ニ染テ嘯詠シ給

いそぐなよまたととむるなわかところ

さだまるかぜのふかかぎりは

此御詠ヲ聞テ御前ノ臣等涙雨愁顔ヲ洗イ情波悲喝ニ溢テ言ノ葉モ
断ヘタリト雖モ菩薩日ノ行法形相ハ変色ナシ同十三日ノ曉天ニ
近臣如例凡上ニ立花燈明香爐並關伽ノ水ヲ備テ御前ニ捧グ即香ヲ
焼キ氷ヲ奠テ觀念觀法身心ヲ収テ後テ良臣ヲ召テ辭世ノ一頌ヲ唱
ヘ給フ

不来不去 四大不空 本是法界 我心如同

臣謹テ此ノ一首ノ深旨ヲ聴聞シテ伺候ノ諸臣ニ對シテ是ハ

菩薩ノ尊体未生己前法身ノ応化現在ノ妄身只今此ノ穢土ヲ離ルルト

雖モ本體不變真如ノ性相今更ニ七情五塵ノ生ズル所ニアラズトノ

尊命ヲ郡臣頭ヲ低レ鳴リヲ鎮テ音セズ双淚又雨脚ノ如シ稍暫ク在

テ落ル淚ヲ拭テ藥方ヲ勸メ奉ルニ菩薩頭ヲ掉ツテ吟シ玉フ

くへばくふくはねばくはすもろともに

たかなやかふや大や木のきれ

御声ヲ勵シテ咏シ給ヘトモ惆悵沈夢トモ現トモ覺ヘズ猶ヲ良菜

ヲ哺セ進ラスルニ菩薩哺ヲ吐イテ吟シ給フ

ゑんどののしにいたらんとするものを

物のくはんくはんとゆふ人は誰ぞ

是ニ至テ 太守圍公赤面ヲ舉ゲ眸子ヲ撝テ宜フ面々皆ナ立チ去レ

々々菩薩聞之日エイナアニヲ云カ大臣謹テ告ス男女共ニ立チ去レ

ト 上意ニ候 菩薩曰クイヤ只居レ見憎イ事ハシアルカ産ルル

時ノ大事死スル時ニアリ二度ノ大事ハ定タル事トナゲクナヨ辱ム

ルナト云イテ隔世登遐シ給フ肉身仏ニテ御座シツル故ニ臨終殊

勝ノ事ノミ多シト雖モ書キ尽スニ難ナリ蓋シ沐浴剃髮皆ノ御

支度ニテ興ニ乗セ進セ誰ソ時ニ日新精舎ニ移シ給フ時ニ欲テ

尾者十有餘員雖有之制禁辛ク無免許而於爲供奉者其遺跡可斷絶高

札ヲ所々辻々ニ立ラル然ル間二十年來其ノ志モ言上致シツル中条

二郎右衛門尉市來ニ於テ自害火葬同日ナリ加世田ニテ滿留江右衛

門尉自殺同所同時ニ火葬法号光隣道心此是ノ二上座謹テ供奉ヲ遂

ク其數萬ノ郡臣ハ徒ニ弓ヲ抱テ号スルノミ 太守御所ノ間御前

ニ御座シテ一七日昼夜十四日御容不懈シテ葬送ノ日ヲ待チ給フ是

事上下感嘆セザルハナシ全至十九日奉殯送則ハ珠龕八方階級欄

干並幡蓋竜頭馬寶輝火燄花幔ニ至ル迄皆金銀珊瑚真珠等ヲ以

ス龕倚セ北郷殿佐多殿 導師俊安雄和尚曉天寅ノ越ヨリ世統ノ奠

文始テ大臣歴々ノ祭文諸仏事未ノ越ニ終リ山頭ニ趣ク其路次二百

十余丈皆薦席ヲ舒ベ紵布ヲ重ヌ左右燭燭々タリ茶毘所ニ至リ見

レバ四方ノ藩籬ニ重ニシテ四門面々鳥居東莞心門總テ背段子ヲ以

テ捲キ立テ修行門ハ赤ク菩提ハ白ク北ノ涅槃門ハ黒段子ヲ以テ包

ミヌ額ノ中ハ何レモ白結ナリ中央ノ厨屋板蓋ニシテ黃絹ヲ覆フ四

方ノ水引ハ赤絹ヲ以ス是ノ時風飄刺幡五色ノ光明天地ニ映ズル事

ヲ凡夫ノ難見昇率天上ノ樂ヲ拜ム其ノ中央ノ沈香火上ニ珠龕ヲ安

置シテ奠茶奠湯ノ仏事導師点火云

富潤屋連經身 文經武緯經天真

心頭性火發明後 打一円相拋擲云

三教功名属一人

次ニ念誦諷經了テ師撝曰百骸俱潰散ス一物鎮長靈作魔生是一物

為万物之根源為天地之太祖 即時ニ火光三昧皆ナ沈香ヲ焚焼ス然
ル間タ奴兒婢兒等推入リ推入リ取斯香四方ニ北走スル者ノ際限ナ
シト雖モ成敗スルニアラズ亦復担負シ来テ四方ヨリ火中に投入ス
ル者窮限ナシ御供ノ心上坐モ亦向火焰裡受用ス

中隱影前ノ殿飾ハ錦繡綾羅唐錦ヲ雜工仏具等類二十四合ヲ初供台種
々ノ立花皆ナ金銀ノ宝ヲ展ベ殿裡天井ノ主位客位ヨリ縁ニ及テ出
ス花ノ様会以テ圓リ或ハ段子金襴金紗ヲ要テ松竹梅玉母桃花楊柳
ニ葡萄ヲ葡萄セ其ノ花台欄干ノ中金銀ヲ以テ包ミ下ノ水引段子薄
ク織物皆悉ク莊嚴成テ左右上下ヲ顧視スル此即四禪天上ノ快樂風
災火災ナク無煩無熱ノ道場臨之仰見者線糸利舌渡刃鬼神モ唇皮ヲ
結ビ肝毛ヲ豎テツ

中有一七日勤行ノ禪徒其出都而差定ス乗ル者ノ五十人漸写大乘法
花二部頓寫一部觀音懺儀會禪詰商量無位真人一為比丘衆都合百
八十員方々排進ノ札經五十九部至今堂中御靈屋ニ現在セリ追悼
ノ優歌唐詩幾百千下限リナキ者ノ不記之中隱ノ善勳畢テ後

太守園君日々御堂詣テ朝來辰巳ノ間タル事移易ナキ故供奉ノ諸臣
モ亦不怠二七日三七六七日忌營備モ年回忌ニ異ラズ四七日忌ヲ迎
テ園公梅華一朶ヲ獻テ御詠
春またきたくひはあらしたをれとて
ほとけのためにさくやこの花

貴久

卒哭小祥忌ニ當テ妙經說前仏法正令夜禪屋前二七日ノ勤修翌年六月

廿三日

修型太夫久
太守園公二界ノ看經処壇上ニ御座シテ法華一卷ヲ説讀了テ二ノ卷ヲ

初メ説讀了ルニ其經卷ヲ持攝シ俄然トシテ無常三昧ニ入玉ヲ

大祥忌ニ至テハ 太守園伯公ノ勤修七周十三回忌ニ及モ亦十斤同聚

會孝行ヲ展セル道チ一七日ノ諸行事檀波羅蜜相此時ニ顯ル 御詠

梅の花植し岳へをこととへは

義久

二十五回忌ノ諸勤行大孝ヲ展セル事如右御年回其節々齋料疎忽ノ振

舞イ奴多胡亂ノ僻事アリシ輩天罰其命ヲ蒙リ當時当座ニ身ヲ喪シ
命ヲ失イシ事子々孫々ニ縉テ斷絶セシムル靈鑑厥ノ光影ヲ見者多
下雖モ知ル者少ナレ

新八世
三十三年ニ当初冬泰門見納謹テ謝儀報恩ノ為ニ田布施河野辺五カ

所ノ大德禪侶ヲ拜命シテ宗々ノ仏事ヲ修スル事三日終ニ散筵ニ臨
テ三巡ノ茶一盞ノ湯ヲ差ルニ各々一頌ヲ唱フ次ニ拈香云

此是梅檀大樹乃為蓋世陰涼孤根自入諸法其氣搜千仏腸
爰小比丘守見伏遇梅嶽常潤普薩三十三才示寂之辰是雖一面假示生

滅之相至今兩人淚垂領氣否南未休見上座某甲亦思之假使修恒沙善

因布髮毛割身問稽首讚歎經世上而君恩千萬億分不敢及其一分安獲

酬報其一分之方分一平於今開斯勝會奉差於爾繁榮拜請老大尊宿而

商量先聖公案或若說大乘蓮經已欲調識秘密咒拈提靈湯苦者注大

千沙界卒香得此香氣泰獻三世諸仏十方賢聖衆則如雨露普潤無性有

恃無以不飽足這裡供具於戲尊哉無量妙義非以眼可見者一々從日

新菩薩之中心相照也太奇也

太奇

夫以

日新菩薩 乘三代道収四海浪政平資家益盛化洽治國彰彰好文而嘯

詠有工騷人吟以惱他惱自行師則誅賞不謬軍士務以勝衆勝強是以文

武名震飛海外見解神足走諸方是當法門獨脫之機豁開本來面目偏緣

禪道修學之力秀發本地風光信受仏果大智粉尽法中諸障時稱生妙淨

官十地四滿菩薩今為居純淨土三祇劫滿法王看々円備八万四千種好

示現千百億方化相濟度方便難信難解口妙妙功德無辺無量焉磨時塵

解脫法々々當說甚煩煩惱無明業性業果說甚苦提提聖賢如真常大地山

河是實報土大官阿鼻為大覺場正當仏性三昧之儀作麼生宣揚熱知宝

香頌云十月微霜滿庭菊一香一色入梅昌

同雪月正當ノ忌日ヲ相待テ

太守園伯君光來給供終追遠事中陰初ノ儀式梵鑑ノ嚴飾殿裡天井ニ

至テ繚ヲ鋪設種々花樣五色金銀ヲ雜ヘ并供書經經咒法談般々ノ善
助修力終テ手ヲ野僧ニ借テ一瓣ノ妙香ヲ焚シム先ツ恭拈其香云

大日本國關西薩隅日三州大守藤氏 義久欽迎慶長五年臘月十三日
祖翁前相模守

日新寺殿梅岳常潤菩薩三十三番示□之辰預於斯日謹發誠心而施設
淨財□列剎遐途之碩德看說法花大乘經王頓書寫其六万九千言金文

或商略彈話作宗々仙事以追慕之允今臨散會命山僧拍此妙咒樓觀向
宝前諸人開豁心眼看花番々雪片々三千供具不墮乳酪生熟之五味總

具一炷烟中於是過去諸如來現在諸大薩埵未來諸賢聖衆普照臨這道
場供物掌浩腸藻々乎怡々如也人無能名焉三輪清淨至哉大哉無上甚

深功德以奉報門極深恩 伏願統惠命於無窮振威風於万劫其
日新菩薩本有自性 竊惟

隱作仏記取至人尋 因効靈山一会度生 治教為人民慈母
是即金峰三所応化 恩惠及禽獸嬰兒 皆担恩貫骨 深懷惠鍾肌

惟德金盛之威 流賢子賢孫類與家季歷 能尽愛惡之道 膺無父無仏為活国良医
是時民不寒不饑到今思彼思之 所謂軍權令東夷誅戮勉

勵終包甲青弛弓矢道學緣西江吸尽頓悟 被激金樓僧伽梨
相性具活而活手 安心非得骨得皮

其三明三智惠光 破世界万八千土雲霧 諸四智四德片味 吞洞庭七十二峰月輝

此日不纏在世分身之体即令誰見法界唯心之姿 進退無相妙心 變現十方三世

却來応供法眼 普饒三大僧祇 今時大用度古昔 古昔妙德香今時

這竹德用紹隆無尽一句何以自知

歲々松根生子葉年々梅□茂孫枝 右精計聖君之氣質而尋政教之成功則其心雖存而知者鮮矣得謂今復古
昔法不備所以忘其盛時也於戲前君不忘思慕其德容咏歎一其明法以
粗誌之者須使唐誕之辭不敢逃其罪過矣

慶長二歲次丁酉三月 日新寺八世泰田守見納行年六十三而綴之書之

① 頌空假中三諦一句空語三句假語三四中道實相

□□□ 日新菩薩真知□依薛世此□□酌 云介

儒門君子翁積部九空々 明達玄々理三教成一同 福日比丘勸勵仏光普照禪師即書之代賢

② 喜怒愛樂愛惡欲 色声香味触

③ 日新君之高子修理大夫貴久公齋名伯圖 黃帝軒轅帝騎龍上天郡臣后宮從者七十余人小臣不得上悉持龍竿拔墮弓

④ 抱弓而号(泣也)後世名其処曰罪淵弓又曰烏号 菩薩之高子修理大夫陸奥守殿齋名伯圖御法名大中良等庵主御名乘貴久

⑤ 會ノ字 日新菩薩之孝孫修理大夫義久齋名龍伯公 六度組 因位釈迦菩薩符燃灯仏入王城時

⑥ 大般若 常 菩薩見法涌菩薩時 左伝 蕭繁若壽可養於王公

⑦ 三代謂夏殷周也禹湯文武以仁得之 旅彰 龍弱能強其國旅彰

⑧ 司□嘉謨□者感也以弱勝強者民也 誅賞不謬 誅賞謬則善惡乱

⑨ 妙淨宮 十地經 有淨妙土出過十界十地菩薩当生其中 純淨土 三身中他受用身微妙淨現極身居淨妙土為化十地菩薩衆

日新大人之御家風褒美之事 左大臣信輔卿御下向ノ因坊津ニ於テ有翁ニ對テ御清談ニ日新ノ遺跡

ヲ見タイナ日新御世ヲ見タ人ハ恥シイヨ我ニ於テ不足ノ事ノミ
有ズ道理デ流人ト成テ是迄ニ下リタルヨト思ヘト
日新君子所以異於人者以其存心而樂天畏天事天是故國人樂君畏君
事君而稱仏体尊信尊敬其光映五雲天上左輔右弼月鄉雲客亦慕之重
之則天下人可不敢尊之哉依製此篇而發其歸趣矣 泰田見納謹誌

非売品

昭和三十九年三月十日

鹿児島市山下町一七四

発行所 鹿児島県立図書館

印刷所 鹿児島県教員互助会印刷部

電話 ⑤五九五三番

